

平成21～23年度 大学教育・学生支援推進事業
大学教育推進プログラム

もっと世界とクロスする 救援ナースの育成

最終報告書



日本赤十字広島看護大学

ご 挨拶

学 長 新 道 幸 恵

日本赤十字社は、国内外の災害時などに救護を行う看護師を独自に育成し、派遣している。救護を行う看護師（以下救援看護師という）の育成は、看護大学や看護専門学校で、赤十字の歩みと活動、救急法や災害看護学の科目を通して基礎的な能力やモラルを育成する。専門的な能力の育成は、卒業後、赤十字病院の院内教育において行われる。日本赤十字社の国際救援看護師の派遣活動や育成に着目して、平成21年度の文部科学省の大学教育・学生支援推進事業に国際救援看護師の基礎能力の育成を目標にした「もっと世界とクロスする救援ナースの育成」を申請し、採択された。国際救援に出かける看護師は、現在は、卒業後に看護師としての勤務経験を重ねて一人前の看護師として成長した段階で、特別なプログラムによるトレーニングを受けて、一定の資格を得ることになっている。そのような卒業後の特別プログラムの一部を大学の学部教育カリキュラムに設けることで、国際救援看護師としてのモラルが身につき維持され、現在行われている卒業後のトレーニングプログラムをある程度省略出来ることを目標にした。

本事業は、本学の教育目標のうち、①看護の現象をグローバルな視野でとらえ、国際的に貢献出来る基礎的な能力を養う、②赤十字の基本理念を理解し、人道的に社会貢献できる能力を養うという目標をもとに、①国際的に活躍できる資質を備えた看護師育成の強化を目指す、②赤十字ネットワークを活用した国際救援看護師基礎コースの開設という事業目標を設定して、平成21年度から23年度までの3年間取り組んだ。この報告書は、その実践の記録であり、平成24年度から開設することになった国際救援・開発協力看護師コースの運営の参考になることを目標にした記録である。

本事業を開始するに当たって、運営組織と評価組織を編成した。運営組織には、本学のカリキュラムの運営責任者である学部長等、国際看護学を専門としてこれまで本学の学部において関連授業を担当してきた教員及び英語科目の担当教員、会計や備品管理、全体の進捗状況を管理する事務職員をメンバーとした。評価組織は形成評価、総括評価を行う組織として、学内の教員及び学外の国際看護学の教授並びに、国際救援活動を行っている看護師をメンバーとした。本事業の採択の連絡を受けたのは、平成21年度の後期が開始された後であった。その時点で、教職員に内容及び運営計画の周知を行うと同時に平成21年度事業の主な参加者である1年生、2年生を対象に本事業を説明すると同時に、これから卒業までに、国際救援コース（16科目21単位、うち2科目4単位は再掲科目）の受講希望者を20名を定員として募った。その結果1年生は28人、2年生は17人が応募し、全員を対象とすることとした。平成22年度からは、入学直後に、本コースの学生を募って、授業を開始した。これらの国際救援看護師コースを選択した学生は、本学の卒業要件とする138単位の他に14科目17単位を履修することになった。

本事業に取り組んだ3年間に、国際救援看護師コースを選んだ学生への教育を実施しながら、その科目の運営を通して、日本赤十字社の国際的なネットワークを活用し、その関係者や学内外者に周知することが出来た。そのことは、平成24年度から本学学部に国際救援・開発協力看護師コースの開設を実現することに大いに寄与することになった。

3年間、本事業に関与してくださった多くの皆様に心から感謝申し上げます。また、この報告書を読んでくださった方に、忌憚のないご意見ご助言をお願い致します。

目 次

ご 挨 拶

I 事業の取組概要	1
1. 具体的内容	1
2. 実施体制	2
3. 評価体制	3
II 国際救援・開発協力看護師コースの教育課程の概要	4
1. 国際救援・開発協力看護師に必要な能力	4
2. 教育課程	4
3. 科目の展開	4
III 国際救援・開発協力看護師コースの教育課程の編成	7
1. 学部教育課程	7
2. 授業科目の概要	8
IV 卒業時の到達目標と教育内容・方法	9
1. 異文化コミュニケーション能力	9
2. 課題探求能力・創造性	21
3. 状況判断能力・問題解決能力	33
4. 基礎的看護実践能力	40
V 評価について	49
1. 取組の概要	49
2. 目指す能力から見た評価	50
3. 本事業に対する学生の評価	50
4. 外部評価	55
5. 今後の課題と展望	59
VI 広報について	60
1. 3年間の取組	60
VII 今後の展望	64
1. 国際救援・開発協力看護師コースの開設	64
2. 災害看護専門看護師コースの創設	65
3. 今後の展望と課題	68

I 事業の取組概要

1. 具体的内容

本取組は、本学の現在の看護学部国際救援看護師育成のための基礎コースとして体系的な教育課程を編成し、実施しようとするものである。

本学は、赤十字の“人道”を教育理念として、ヒューマン・ケアリング能力のある看護職の育成を目標に教育課程を編成し、①赤十字の理念や活動、②災害看護、③国際看護や演習、④赤十字救護・援助方法等、赤十字看護師の育成に特有な科目を設けている。一方、日本赤十字社はその本来の使命から海外の災害や紛争時に必要な看護援助を行うために、特別の訓練プログラムを設けて、国際救援看護師（以下「救援看護師」という）として派遣している。

国際救援・開発協力看護師コース（以下、救援コースという）の必要性は、①本学に入学する学生のうち、国際救援で活躍したいと希望を持つ学生が年々増加しているところから、国際救援活動の基盤となる基礎能力確立のための看護教育プログラムの強化の必要性、②国際派遣要員として登録可能な卒業後2～3年後までに語学力や国際救援活動に対する意欲の維持が困難であることから在学中における特別なコースの開設の必要性によるものである。

そこで本学では、国際的に活躍できる資質を備えた看護師の育成のための救援コースを新たに開設することを目標として、平成21～23年度に3年間の取組を行うこととなった。1学年募集定員20名の予定で募集を行い、平成23年1月現在、1年次21名、2年次25名、3年次16名が、本取組による履修を行っている。

まず、救援看護師の基礎的能力としてまず本学の卒業時に求められる能力を明らかにし、その能力を到達目標として、体系的な教育課程を編成し、教育を実施した。

救援コースの教育課程は、現在の看護学部の教育課程を基本としてさらに、①異文化コミュニケーション能力、②課題探求能力・創造性、③国際救援時における状況判断能力・問題解決能力、④国際救援時に必要な基礎的な看護実践能力の4つの能力を強化し、赤十字看護師の役割能力の充実を目標とした。

本取組の達成目標は、次の6項目であった。

- 1) 救援コースの体系的な教育課程の編成
- 2) 実現するための教育内容及び教育方法の開発
- 3) 教育環境の整備
- 4) 教育評価のためのOSCE（客観的臨床能力試験）の導入
- 5) OSCEに活用するSP（模擬患者）の養成
- 6) 国際赤十字社など海外演習先の開拓

体系的な教育課程の編成では、救援コースの卒業時到達目標を可能にする科目群を既設の教育課程の中から、救援コースに関連する14科目を選択し、救援看護師に必要な能力を育成するための教育内容及び方法を創造し、授業計画を明確化した。

また、教育内容及び方法の創造にあたっては、次の①～②を原則とした。①救援コースに特化した14科目は少人数指導とした。②国際看護学演習、災害看護学及び卒業研究は、国際救援関連機関における実地視察を中心とした演習を行い幅広い学びを保证する。③総合看護実習や卒業研究では、日本

赤十字社国際部や国際医療救援拠点病院（以下「拠点病院」という）での演習・実習をとおして、課題探求型の教育をする。英語能力や看護実践能力を評価するために、筆記試験やレポートの他にTOEIC、SPを用いたOSCEを活用して多面的に評価した。

2. 実施体制

本取組は、学長の主導のもとに、全学的な取組とした。ただし、授業科目の14科目は、科目単位認定者が中心となり、学内のテーマA定例会議や企画委員会の開催により、教育内容や方法を洗練化する機会を得た。また、教育内容や方法の企画では、国内外の赤十字関係機関などの協力を得ることができた。

本取組の実施体制は、本学全教職員で臨み、学長の主導のもとに「もっと世界とクロスする救援ナースの育成プロジェクト委員会（テーマA定例会議）」を設置し、下部組織に企画班、実施班、評価班を配置した。

企画班は、本取組全体の企画・総括を行った。平成21・22年度は、「もっと世界とクロスする救援ナースの育成プロジェクト委員会（テーマA定例会議）」のメンバーと同一であった。さらに、平成21・22年度に各1回、国内の国際救援に携わる専門職5名で構成された企画運営委員会を開催し、本取組において具体的な示唆を得ることができた。

実施班は、救援コース14科目の担当教員で構成し取組を展開した。評価班は、形成評価委員会及び第三者評価委員会で構成し、毎年スケジュールに基づいて効果的に実施されているかなど検討を行った。

学内では、本取組は学内の関係する各委員会と連携した。つまり、教務委員会は救援コース教育課程の実施、SPの養成は、本取組以外の事業（テーマB）と関連して行った。国際交流委員会は、海外関係組織との交渉、学生支援委員会が統括するチューターは、救援コースを選択した学生の個別相談

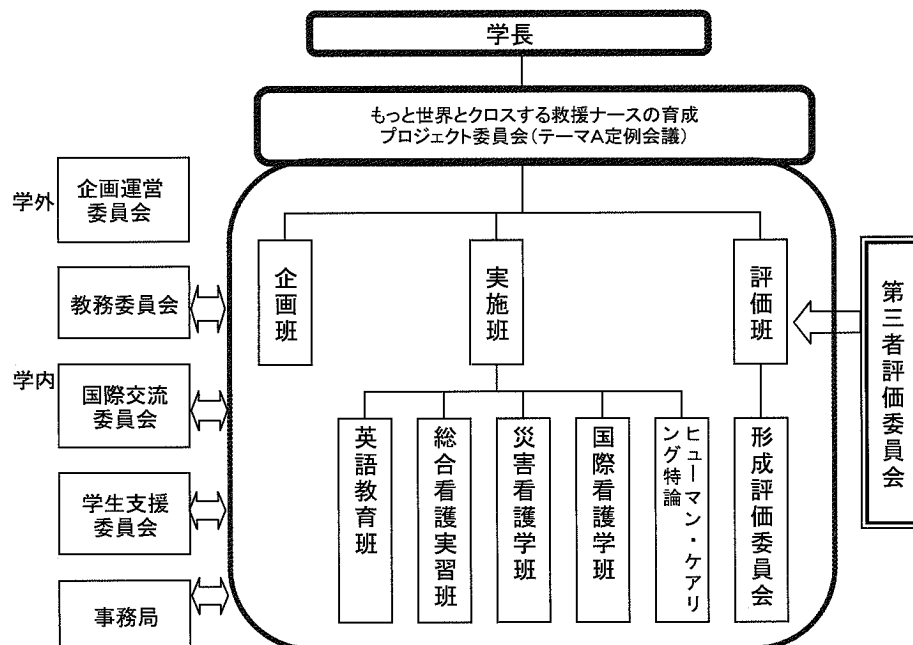


図1 取組の実現に向けた実施体制組織

や学習指導を行った。

3. 評価体制

取組の評価に関する体制は、事業の公正な評価を行うため、学内の評価班と学外委員を中心とした2つの評価委員会で事業評価を行った。

1) 学内体制

- (1) 学内に評価班を置き、班員は一般教養科目、専門基礎科目、専門科目の教員5名で構成した。評価班では外部委員会規定の作成、外部委員の選定、委員会開催計画の立案実施及び、各評価委員会にはかる内容に関する検討を行った。
- (2) 評価班で検討した評価の枠組み、到達目標、評価の方法等は、テーマAの定例会議に諮り、14科目の教科担当者等で調整の上、評価委員会に提出した。

2) 学外体制

(1) 形成評価委員会

形成評価委員会委員は、外部委員5名と学内評価班5名、合計10名で構成した。外部委員は日常的に国際救援活動を支えている日本赤十字社国際部課長と、救護看護師を海外に派遣した経験のある4つの国際医療救援拠点病院の看護師長である。

年2回開催し、各委員は海外救援の経験を踏まえて授業内容、年度目標の進行状況、活動内容と体制、次年度への課題等について評価した。

(2) 第三者評価委員会

第三者評価委員会は、外部委員6名と学内評価班5名、合計11名で構成した。外部委員は、国際救援の経験豊かな学識経験者2名、日本赤十字社の看護部・国際部の各部長、国際医療救援拠点病院の看護部長2名である。

第三者評価委員会は年1回開催し、取組事項活動全体に対する意見や、救援コースを履修する学生に求められる能力、組織的な支援体制、事業終了後の発展のための改善点など総括評価を行った。

Ⅱ 国際救援・開発協力看護師コースの教育課程の概要

1. 国際救援・開発協力看護師に必要な能力

救援コースの学生は卒業後に、国際救援・開発協力看護師としてのキャリアを希望した場合に、主として日本赤十字の国際拠点病院に就職して、一定の看護師経験をした後で、国際救援・救護活動に必要な研修プログラムを終了することになっている。その後、国外に派遣される機会を得るようになる。

海外で救援や救護のために活動するためには、文化も風習も看護に使用する物品や求められる技術も異なる地域で、活動に必要な役割や行動をアセスメントしながら直ちに行動を開始しなければならない。そのために要求される能力は、看護師としての実践能力であり、応用能力である。また、救護や救援活動をするために、現地の実情をアセスメントする能力、現地の人々と協働するための異文化コミュニケーション能力やコーディネート、活動に必要な物品やマンパワー等を整えてマネジメントする能力などが求められる。

2. 教育課程

本事業の中核部分となる教育課程の構築に際しては、上記の能力の育成を視野に、本学の教育理念の下に設定した教育課程の構築のための4つの概念（構成概念）、即ち人間、知、関係、技に沿って科目設定をすることにした。「人間」の概念のもとには、課題探求能力、創造性を育成する科目を、「知」の概念のもとには、異文化コミュニケーション能力を育成する科目を、「関係」の概念のもとには、災害における問題解決能力、状況判断能力を育成する科目を、「技」の概念のもとには、国際救援に必要な基礎的な看護実践能力を育成する科目をそれぞれ設定して、合計16科目21単位（うち、2科目4単位は本学の卒業要件科目と重複）を救援コースに特化した授業科目群（以下、救援コース科目という）とした。それらを学部教育課程に学年進度に応じて配置をした。

3. 科目の展開

本事業は①救援コースの体系的な教育課程の編成、②教育内容及び教育方法の開発（救援コースに特化する教科目）、③教育環境の整備、④教育評価のための客観的臨床能力試験（OSCE）の導入、⑤OSCEに活用する模擬患者（SP）の養成、⑥海外の演習先の開拓を達成目標として、平成21年度から23年度の3年間取り組んだ。上記の救援コース科目を展開しながら、教育内容を整備し、教育方法を開発してきた。

異文化コミュニケーション能力の教育に当たっては、LL教室を情報処理教室の一部を改修して開設した。その教室は授業に使用する一方で、学生がいつでもその教室に整備した語学教材や救援コースの学生用に契約して使用可能にしたALCのweb用の自己学習教材を使用して自己学習出来るようにした。そのほかに、自己学習を促進するためにiPodを学生個別に配布し、異文化コミュニケーションに関する英語の学習用教材を収録し、いつでもどこでも学習を可能なようにして、能力の向上を支援するシステムを整備した。本事業の1年目には、1年生と2年生対象に異文化コミュニケーション科目の授業を非常勤講師を新たに採用して開始した。1年生には、異文化コミュニケーションⅠ、Ⅱ、

基礎ゼミⅠとして英語集中ゼミの科目を、2年生には異文化コミュニケーションⅢ、Ⅳ、ヒューマン・ケアリング特論（ボランティア活動、特別講義）、看護英語（国際救援活動英文購読）の科目を開講した。平成22年度から3年生対象に基礎ゼミⅡとしてニュージーランドのクライストチャーチにある大学に3週間集中の研修を予定していたところ、出発直前2週間前にクライストチャーチ地震が発生したことから中止せざるを得なくなった。そこで、研修先を英国に変更し、平成23年度に英国の大学での研修を行うこととなった。

平成21年度から1年生を対象に、日本赤十字社の国際活動用の研修プログラム基礎保健ERUが熊本で開催されたのを機会に、その一部プログラムへの参加と国際救援活動経験者からの講義、日本赤十字社の発祥の地巡りなどを含めた研修旅行を実施した。参加学生に、日本赤十字社の国際救援活動の意義や内容を理解させ、国際救援看護師への動機付けをし、使命感を芽吹かせる貴重な機会になったようである。この研修は①赤十字の救援看護師の役割能力、②災害時における問題解決能力、状況判断能力、ヒューマンケアリングを実践する人間性、③国際救援時における看護実践能力、の育成に寄与するものとして企画し、3年間実施した。

国際看護学関連科目のうち、国際看護学演習は、ケアリングに関する学習を中心にした米国のコロラド大学並びに米国の赤十字社における研修、フィリピンのキリノ州におけるフィールドワーク、ジュネーブにあるWHO（World Health Organization）、ICN（International Council of Nurses）、ICRC（International Committee of the Red Cross）、IFRC（International Federation of Red Cross and Red Crescent Societies）、UNHCR（United Nations High Commissioner for Refugees）等における研修の3種類の演習を企画し、救援コースの学生が一つ以上に参加するようにした。本学では、米国研修は開学以来実施し、フィリピンへの研修は平成20年度から開始していた。それらの研修を本事業に位置づけるに当たって、内容や研修期間を本事業の目的に適応するように修正した。ジュネーブ研修は本事業のために新たに加えることにし、日本赤十字社の国際部の支援を受けて、平成21年度に事前調査のために関係者が現地へ赴き、関係者と面談をし、企画を具体化し、平成22年度から、ジュネーブに学生を引率して研修を行ってきた。国際看護学を学ぶ科目として国際社会と保健行動並びに国際看護学がある。これらの科目は学部の選択科目として開講していたが、救援コースの学生には必須科目として位置づけた。これらの国際看護学関連科目は、①異文化コミュニケーション能力、②赤十字の国際的な活動や使命への理解、③災害や紛争における国際機関の活動やその連携活動への理解、④国際救援や開発協力における看護実践能力の育成に寄与する科目として企画し、実施してきた。

幅広い学びを保証する科目として災害看護学、総合看護実習、卒業研究を位置づけて救援コース科目として教育内容の精選を行った。これらの科目は既に学部の科目として開講していた。災害看護学は、救援コースの学生対象の国際救援活動疑似体験ツアー、避難所疑似体験演習などを新たに設けた。総合看護実習では、学部の4年生全員を対象とする実習で必修科目を救援コースの科目とすることによって、救援コースの学生は、5つの日本赤十字社国際医療救援拠点病院のうち4カ所の病院を選択して、相互実習の目的と救援コースの目的に沿った内容を履修することにした。卒業研究は、全学生の4年次必修科目であり、救援コースの学生は救援・開発に関するテーマを選ぶことになる。これらの科目は、主として災害時における問題解決能力、状況判断能力、ヒューマン・ケアリングを実践する人間性の育成に寄与する科目として位置づけて、教育内容を精選し、OSCE評価方法を導入した。OSCEはSP（模擬患者）を研修による育成をして実施した。

3年間、試行錯誤しながら救援コースの教育課程を編成してきた。その成果を基に、平成24年度から発足する国際救援・開発協力看護師コースの教育課程として実施する予定である。救援コースの看護師には、救援コースの科目のみならず、看護実践能力に関わる科目も重要であることを理解させ、全体的にバランス良く履修するように支援していきたい。

Ⅲ 国際救援・開発協力看護師コースの教育課程の編成

1. 学部教育課程

本学の教育理念は、赤十字の基本理念に基づき、豊かな人間性と幅広い教養を涵養し、学問的基盤に立ち、生命の尊厳と人類の叡智を基調としたヒューマン・ケアリングの意味と価値について教授することであり、将来、ヒューマン・ケアリングの実践、教育、研究の領域において、リーダーシップを発揮できる基礎的能力を育成することをめざしている。

本学の教育課程は、「人間を理解する領域」「知を深める領域」「関係を深める領域」「技を駆使する領域」の4領域から編成している（図2）。

また、4つの領域における授業科目は、一般教養科目、専門基礎科目および専門科目に区分している。一般教養科目は、人間形成及び学問全般の基盤となる部分である。専門基礎科目は、保健・医療・福祉など看護学を学ぶための専門的基盤となるものである。専門科目は、看護学を理論と実践が統合されたものとして学習し、研究的に探求するための科目である（図3）。

看護の対象である人間を、生物体としての存在だけでなく、文化的・社会的あるいは歴史的存在として全人的に理解するための「人間」「知」「関係」、これらの学問的基盤を統合し実践へと導く「技」の4つの領域からヒューマン・ケアリングについて広く深く学んでいけるカリキュラムを構築しています。

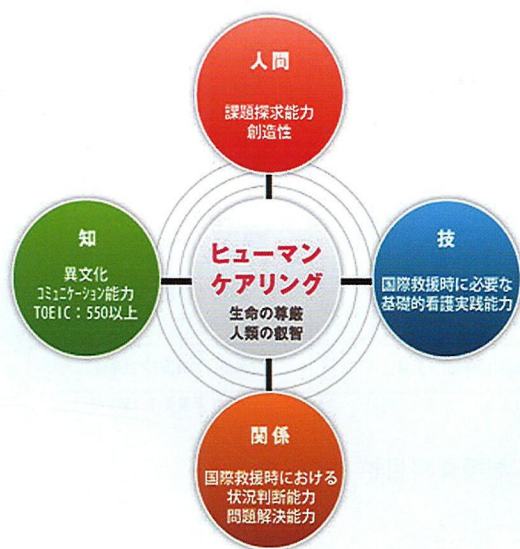


図2 教育課程の基本的な考え方

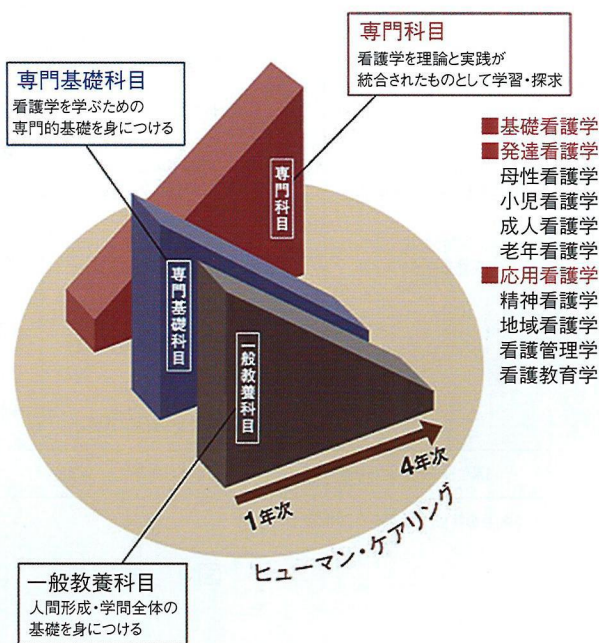


図3 教育課程の構成と進度

本学の教育目標は、次の6点であり、救援コースは、④、⑤の目標を強化する教育課程である。

- ①生命の尊厳と人間の基本的権利を尊重できる豊かな人間性を養う。
- ②看護学の基礎的な知識・技術、並びに人間との深い関わり、環境との相互作用とを統合し、ヒューマン・ケアリングの理念に基づいた実践能力を養う。
- ③保健・医療・福祉の向上のために、学際的協力・連携を図り、看護を担うべき役割を果たすことのできる能力を養う。
- ④看護の現象をグローバルな視野で捉え、国際的に貢献できる基礎的能力を養う。
- ⑤赤十字の基本理念を理解し、人道的に社会貢献できる能力を養う。
- ⑥看護の現象を科学的に探求し、看護学を発展できる基礎的能力を養う。

2. 授業科目の概要

救援コースを選択する学生における履修モデルを提示する（図4参照）。救援コースを選択した学生における卒業時の到達目標は、看護職として基礎となる能力を育成しながら、国際救援・開発協力を担う看護実践力を育成することである。

そこで、救援コースの教育課程は、平成21年度に新しく編成した学部教育課程を基盤として編成をした。平成21年度生の卒業要件は、看護師・保健師教育課程132単位、看護師・保健師・助産師教育課程151単位である。そのうち救援コースに特化した14科目（21単位）は、学部教育課程における必修科目7科目（11単位）、選択必修科目3科目（4単位）、選択科目4科目（6単位）であった。

救援コースの教育課程は、学部教育課程に編成した授業科目を基盤として、救援コースに特化した14科目を選定し救援コースに必要な能力の育成を目指すものである。

1年次から4年次にわたる救援コースに特化した14科目を選定すると同時に、年度別の到達目標を明確にした。また、各授業単位認定者は、救援コースに必要な能力を育成するために教育内容や教育方法を工夫したシラバスを作成した。

〈1年生〉		〈2年生〉		〈3年生〉		〈4年生〉	
英語Lis.&Spe. I-1 (異文化コミュニケーションⅠ)	1(30)	英語Lis.&Spe. II (異文化コミュニケーションⅢ)	1(30)	基礎ゼミⅡ (語学研修)	1(30)	卒業研究 (国際救援に関するテーマ)	2(60)
英語Lis.&Spe. I-2 (異文化コミュニケーションⅡ)	1(30)	英語Lis.&Spe. III (異文化コミュニケーションⅣ)	1(30)	国際社会と保健活動 (国際医療保健活動)	2(30)	総合看護学実習 (国際医療拠点病院実習)	2(90)
基礎ゼミⅠ (英語集中ゼミ)	1(30)	基礎ゼミⅡ (英語集中ゼミ)	1(30)			災害看護学 (避難所訓練を含む)	2(30)
		ヒューマン・ケアリング特論 (ボランティア活動、特別講義)	1(15)			国際看護学 (健康問題の日米比較)	2(30)
		看護英語 (国際救援活動英文講読)	1(30)	国際看護学演習 (フィリピン研修)	2(60)	国際看護学演習 (7月研修or'ジュネーブ'研修)	2(60)
3単位(90時間)/25単位		5単位(135時間)/50単位		3単位(60時間)/31単位		10単位(270時間)/32単位	

※ 各科目の特化した内容を()内に表す

卒業要件:138単位

図4 救援コースに特化した授業科目群

Ⅳ 卒業時の到達目標と教育内容・方法

本稿では、救援コースに特化した14の授業科目に関連する卒業時の到達目標について、期待される4つの能力別に記述する。具体的な教育内容については、能力ごとに代表的な授業科目について記述し、各授業科目の最後に今後の課題を述べる。

1. 異文化コミュニケーション能力

国際救援・開発協力に従事する際には、当然のことながら、英語力が必要不可欠なものとなる。だが、そればかりでなく、コミュニケーションの取り方、大衆文化、カルチャー・ショック、社会問題、ライフスタイル、価値観、民族的多様性など現地に特有の様々な物事を理解するために、異文化理解に関する知識とコミュニケーション能力も重要な要素となる。また、卒業後、国際救援・開発協力に従事するにしても、通常は医療現場で看護師の業務をこなしながら、異文化コミュニケーションの基となる英語力を伸ばすための自律的な学習を継続しなくてはならない。ここでは、英語と異文化コミュニケーションに関わる能力を醸成するためにどのような教育活動を行ってきたのかを詳述する。

1) 卒業時の到達目標

卒業時の到達目標は次の通りで、各授業に関連する到達目標を○印で表している。

表1 異文化コミュニケーション能力における卒業時の到達目標

卒業時の達成目標(太字)と 下位目標(年次別目標)	1年次			2年次				3年次			4年次					
	英語 L & S I・1	英語 L & S I・2	基礎ゼミ I	英語 L & S II	英語 L & S III	ヒューマン・ケアリング特論	看護英語	基礎ゼミ II	国際社会と保健活動	国際看護学演習 (フィリピン)	卒業研究	総合看護実習	災害看護学	国際看護学	国際看護学演習 (アメリカ)	国際看護学演習 (ジュネーブ)
3. 英語力を活用して、積極的に異文化の人々とコミュニケーションできる																
<1年次> TOEIC350点以上を獲得する	○	○	○													
<1,2年次> 英語を用いて、異文化の人々と積極的にコミュニケーションできる	○	○	○	○	○											
<2年次> TOEIC400点以上を獲得する				○	○											
<1,2年次> 多様な価値感を理解する姿勢を持つ	○	○				○										
<3年次> 英語を用いて自分の意見を他者に表現できる								○								
<3年次> 自分の意見を理論立てて表現でき、他者と意見交換できる								○			○					
<3年次> TOEIC500点以上を獲得する								○								
<4年次> TOEIC550点以上を獲得する								(○)								
<4年次> 英語で他者と相互理解・意思疎通を図るコミュニケーションを図ろうとすることができる							○						○	○	○	○

2) 授業科目

(1) 英語リスニング&スピーキングⅠ－1、2（異文化コミュニケーションⅠ、Ⅱ）／英語リスニング&スピーキングⅡ、Ⅲ（異文化コミュニケーションⅢ、Ⅳ）

〔この授業と関連する到達目標〕

- ・〈1年次〉 TOEIC350点以上を獲得する
- ・〈2年次〉 TOEIC400点以上を獲得する
- ・〈1・2年次〉英語を用いて、異文化の人々と積極的にコミュニケーションできる
- ・〈1・2年次〉多様な価値観を理解する姿勢を持つ

これらの科目はそれぞれ1年次と2年次に開講される科目であるが、お互いに内容と指導法が密接に関連しているため、ここではまとめて述べることにする。

異文化コミュニケーションは1年次から2年次にかけてⅠからⅣまで4科目を設定し、お互いに内容と指導法が密接に関連するように教育内容を調整した。正式な看護学部の教育課程では、英語リスニング&スピーキングとなっていることからわかるように、異文化コミュニケーションばかりでなく、英語の学力を伸ばすことにもかなりの重点を置いた。このため、この科目は初年度から英語を母国語とする教師によって英語のみで講義を行っている。

救援コースの学生だけを集めて、1クラスの人数を10数人から20人程度としたため、リーディング、ライティング、スピーキングなどの指導の際、指導内容に柔軟性を持たせることができた。また、個々の学生に目が行き届くため、より多くの発言を求めことができ、しかも、小テスト、レポートなども多く与えることができた。その結果、学生の意欲は概して高く、ほとんどが好成績を収めている（おおよそAとBが半分ずつで、Cは1人か2人）。

テキストとプリント教材を通じて、TOEIC 550点を取れる水準のリスニングやリーディングを十分に与えたことが功を奏し、学生は1年次から2年次までの間に、英語力と異文化コミュニケーションの両面において着実な進歩が見られた。

多くの学生の成績分布はAかBで、ほんのわずかであるがCもある。さらに、通常のAの基準よりもはるかにすぐれた成績をあげる学生が一部いた。したがって、英語リスニング&スピーキングⅠ－1、2の到達目標である「英語を用いて、異文化の人々と積極的にコミュニケーションできる」、「多様な価値観を理解する姿勢を持つ」と英語リスニング&スピーキングⅡ、Ⅲの到達目標である「多様な価値観を理解する姿勢を持つ」は学生の成績分布から見る限りおおよそ達成できたものと思われる。

だが、英語リスニング&スピーキングⅠ－1、2の「TOEIC350点以上を獲得する」という到達目標に関しては、この点を超えた学生数が25人中14人（平成21年度）、21人中15人（平成22年度）、27人中15人（平成23年度）であり、十分に達成できたとは言いがたい。同様に、英語リスニング&スピーキングⅡ－1、2の「TOEIC400点以上を獲得する」という到達目標に関しても、17人中5人（平成21年度）、28人中12人（平成22年度）、21人中11人（平成23年度）である。積極的にTOEICの受験をしない学生もいるため、実際には、この目標をもう少し上回るはずであるが、必ずしも到達目標を達成できたと言うことはできない。

今後の課題の課題としては、上述のように、通常のAの基準よりもはるかにすぐれた成績の学生をどのようにすれば伸ばすべきなのかという点が挙げられる。彼らは非常な努力家でもある。正当

に評価する成績の尺度として、例えば、Sのようなものがあったとしてもいいかもしれない。いずれにしても、彼らをもっと伸ばすために個人的な指導が特に必要である。また、そのような学生でなくとも、優秀な成績をあげたとか、成績の伸びが大きかったとか、あるいは、TOEICの点数が大幅に伸びたというような学生を正当に評価することも高い動機付けを維持させるために必要である。ほんの一部だが、講義に付いていくのがやつの学生もいた。彼らも特に個人的な指導が必要である。



写真1 質問風景



写真2 講義風景

(2) 基礎ゼミ I

〔この授業と関連する到達目標〕

- ・〈1年次〉英語を用いて、異文化の人々と積極的にコミュニケーションできる
- ・〈1年次〉TOEIC350点以上を獲得する

基礎ゼミ I は救援コース以外の学生も履修する科目であるが、救援コースの学生だけを集めたクラス編成を行い、次のような基本的な英語学習の方法に関する指導を行った。

- ・自分に最もふさわしい英語学習の方法を身に付けることが重要であることを理解させる。
- ・これまでの英語学習の方法を見直して、より良いものにさせる。
- ・効果的に英語力を伸ばすのに役立つ手段を自分自身で見つけ出す。

具体的には、単語力、多読、多聴 (iPodとポッドキャストを使用)、CALL (Computer Assisted Language Learning)、語学学習の方法と目標の設定、非言語学的情報伝達、音声による情報伝達、発音、ポートフォリオの使い方、TOEIC受験に関する指導を行った。それによって、次のA～Dのような課題に直面した。

- A. 語学学習の支援を行うには講義時間だけでは時間が不足している
- B. ルーブリック (rubric) に対する評価がやや妥当性に欠けている部分がある
- C. それぞれの講義内容との連携と整合性が取りにくいところがある
- D. 講義への自発的・積極的な参加が見られない学生がいる

Aは、講義以外の時間に、イングリッシュ・アドバイザー (下記参照) が速読の勉強会と学習相談を行った。これによって、この科目の講義が完了した後も、個々の学生の学習支援をすることが可能になった。

Bは、ルーブリックを改訂し、再構成することによって、成績の基準をより客観的で点数化でき

るようにした。ただし、主観的基準と客観的基準のバランスをどのように取るかということに関してはまだ難しい点が残っている。

Cでは、できるだけ毎回の講義内容との連携が取れるようにしたが、講義内容の幅と難易度を調整するのが困難なことがあった。

Dでは、英語の講義への出席は英語に触れる時間を増やす貴重な機会というよりも、むしろ、単なる単位取得の手段として捉えているように見受けられる学生が一部いた。これは専門科目の看護学と語学の学習を両立させることがなかなかうまく出来ていないことを意味している。

この科目の目的は「自律的な英語学習の方法を身に付ける」ことによって、達成目標の「英語を用いて、異文化の人々と積極的にコミュニケーションできる」ようにすることである。この科目の成績分布はほとんどがAかBであり、Cは1人か2人程度であったため、前述の異文化コミュニケーションⅠ～Ⅳで述べたように、ある程度は成功したと言える。また、「TOEIC350点以上を獲得する」という達成目標に関しても同様である。

今後の課題は、上述のDのような学生に対して、どれくらい英語学習に時間をかけると、例えば、TOEICでどれだけの点を取れるようになれるのか明確な基準や努力目標を示すことができるようにすることである。これができれば、自分の限られた時間と労力を語学学習にうまく向けられるようになり、語学学習を切れ目なく行えるようになるはずである。このためには、ループリックによって、常に自分の英語力の伸びを記録し、教員から語学学習のアドバイスを受ける際の材料となるようにさせる必要がある。

(3) 基礎ゼミⅡ

〔この授業と関連する到達目標〕

- ・〈3年次〉英語を用いて自分の意見を他者に表現できる
- ・〈3年次〉自分の意見を理論立てて表現でき、他者と意見交換できる
- ・〈3年次〉TOEIC500点以上を獲得する

基礎ゼミⅡは3年次の後期に開始されるため、この原稿の執筆時点では、まだ終了していない。この講義では、ホームステイをしながら海外の語学学校で英語の研修を行うことによって、英語力を向上させ、同時に、異文化に対する理解力と社交性を深めるための講義と演習を行っている。

ただし、海外での語学研修は必ずしも義務ではないため、救援コースの学生が全員それに参加するわけではない。したがって、この講義では、次のようにクラスを2つに分割した。

A. 海外（今回は英国）での語学研修に参加する学生

B. 不参加の学生

Aクラスでは、議論とロールプレイを通じて、ホームステイをしながら海外での語学研修に必要な文化、言語、実生活に順応できるように指導しているところである。海外での研修は基礎ゼミⅡの科目の延長上に位置づけられている。平成22年度は平成23年3月5日から3月26日まで、ニュージーランドのクライストチャーチ市にあるChristchurch College of English Languageでの研修の予定であったが、2月22日の大地震のため中止となった。平成23年度は英国のカンタベリー市のCanterbury Christ Church Universityに場所を変えて、平成24年3月3日から3月25日まで行われる予定である。また、TOEICによって、語学研修前後の語学力を測りたかったが、受験率が低かつ

たため、十分な資料が得られそうにない。

Bクラスでは、英語力の向上ばかりでなく、パブリック・スピーキングの練習と人間の命と看護に関わるディベートも行っている。

どちらの学生も語学学習の進み具合と語学研修の準備の度合いを確認し、ポートフォリオに記録させている。

講義は2コマ連続で行われるため、密度が高い。それにもかかわらず、学生は十分な予習を行って講義に臨んでいる。「英語を用いて自分の意見を他者に表現できる」、「自分の意見を理論立てて表現でき、他者と意見交換できる」というこの科目の到達目標に関しては、この講義がまだ進行中で、どれほど達成できたか判断しにくい。だが、成績分布はほとんどがAかBとなる見込みで、成績という観点からは目標が達成されたと言える。だが、「TOEIC500点以上を獲得する」という到達目標に関しては、500点を越えた学生は25人中7人で、2年次からの伸びがなかなか見られない。



写真3 パソコンを利用した基礎ゼミⅡでの語学学習の様子（LLC）

この科目はまだ英国での語学研修が終了していないため、まだ講義が継続中であると言える。このため、今後の課題について述べるのは早すぎるかもしれない。だが、ループリックによる語学学習の記録、アルクネットアカデミーの利用時間、TOEICの受験がこの科目の評価として今後不可欠なものとなるだろう。また、海外での語学研修への参加に関わりなく、基礎ゼミⅡの単位を得る要件として、AグループとBグループの両方の学生に学期の中間（7週目）と期末（15週目）に自己評価と語学学習の進み具合を報告させることで、自律的な語学学習の習慣を付けさせることも重要である。

（4）ヒューマン・ケアリング特論

〔この授業と関連する到達目標〕

- ・〈2年次〉多様な価値観を理解する姿勢を持つ

ヒューマン・ケアリング特論では、学外からの講師を招いて特別講義を行なっている。内容はJICA青年海外協力隊の活動を中心としながら、長期間にわたる異文化での生活経験にも及んでいる。異文化との共生について具体的な体験談を聞くことによって、多様な価値観を理解する姿勢を養うことを目指している。

今後の課題としては以下の点をあげることができる。

異文化理解の必要性に自覚的であることについては、上記のような特別講義も出発点となり得ていると思われる。その一方で、この授業における単位認定の要件としているボランティア活動への参加においては、あらかじめ準備された活動への参加にとどまっており、活動自体の目的設定や手段の選定への参画は十分ではない。多様な価値観を理解するという観点からは、企画段階から他者と協働することが重要であるといえ、今後はボランティア活動への参加に際しては、この点について留意した指導を行なっていく必要がある。

(5) 災害看護学

〔この授業と関連する到達目標〕

- ・〈4年次〉英語で他者と相互理解・意思疎通を図るコミュニケーションを図ろうとすることができる

災害看護学では、講義で災害看護活動において他職種との連携の重要性を理解し、学生自身が問題意識を持って学習できるよう教授している。また、「学外の災害救護訓練への参加」などの演習での体験が、他者との相互理解・意思疎通を図ることの重要性を実感する機会となっている。さらに、英語でのコミュニケーションについては、「国際医療活動疑似体験ツアーへの参加」によって、語学学習の必要性を強く認識し、学習意欲の向上につながっている。

今後も講義で学生に相互理解や意思疎通を図ることの重要性を伝えるとともに、学生が体験的に学べるように、演習の機会をできるだけ多くすることが課題である。また、学生の体験を意味づけしていけるようディスカッションを行い、支援していく必要がある。

(6) 国際看護学

〔この授業と関連する到達目標〕

- ・〈3年次〉自分の意見を理論立てて表現でき、他者と意見交換できる
- ・〈4年次〉英語で他者と相互理解・意思疎通を図るコミュニケーションを図ろうとすることができる

国際看護学（講義）は、3年次「国際社会と保健活動」を履修した学生を対象に、4年生前期に開講している。15回の講義前半は、国際看護学概論、異文化看護、文化・宗教の多様性とヘルスケアに関する議論、看護者が直面する文化・風習と倫理的な問題をテーマに、文献を用いてディスカッションを中心に講義を進めている。具体的には、世界の健康の格差を理解するため、WHOから世界健康統計データを用いて、世界の健康指標・健康問題の格差の概要を把握し、世界からみた日本の保健指標の特徴を理解させるようにしている。また、講義後半では、米国や先進国の看護の現状をテーマに取り上げ、積極的に英語文献や英語資料を取り入れている。文献を活用し、講義で互いにディスカッションをしながら自分の意見を明確にすることから異文化コミュニケーションのための能力の基礎を養っている。

今後の課題として、講義の中で、英語での発表や討論はまだ難しい現状であるが、学生がより主体的に取り組めるよう、講義の演習課題を予め明示すること、日本語でも自らの学習体験を他者にわかりやすく表現し、意見交換できる機会をより取り入れていく予定である。

(7) 国際看護学演習（アメリカ）

〔この授業と関連する到達目標〕

- ・〈1、2年次〉英語を用いて、異文化の人々と積極的にコミュニケーションできる
- ・〈1、2年次〉多様な価値観を理解する姿勢を持つ
- ・〈3年次〉英語を用いて自分の意見を理論立てて表現でき、他者と意見交換できる
- ・〈4年次〉英語で他者と相互理解・意思疎通を図るコミュニケーションを図ろうとすることができる

国際看護学演習（アメリカ）では、8月中旬の約2週間、米国コロラド大学での講義・演習、大学関連の保健医療施設の見学、および異文化研修として大都市ニューヨークを訪れている。コロラド大学の講義・演習プログラムは、本学担当教員とコロラド大学の担当教員が、学習目的を達成するために作成したオリジナルなプログラムである。米国の看護教育の概要、米国医療制度、各看護専門領域の看護の現状と課題、講義テーマに関連した大学関連保健医療施設の見学で構成されている。講義・演習の通訳は担当教員が行っているが、学生にとって日本での自身の看護実践、医療、健康問題を米国の教員や学生に紹介し、意見交換する学習プロセスによって、日本の看護や医療について俯瞰的に見つめ、自身の看護実践について再考し、それまで日本で「当然」とみなしていた看護実践の中の長所、短所に気付くきっかけになっている。加えて、短期間でも長期滞在型のホテルで、現地で実際に自炊をし、英語を用いて生活することから、米国の文化、現地の特性、デンバー地区の健康問題の特徴を捉えることが可能となり、生きた異文化を体験できる貴重な機会となっている。

また、異文化交流という側面から、現在では演習最終日に、研修のまとめとお世話になった方々へのお礼のスピーチ、参加者全員でのソーラン節の披露を行っている。今後の課題として、学生が本学での看護の学びや日本での学生生活について、米国の学生・教員に紹介する機会を持つということも今後検討していきたい。

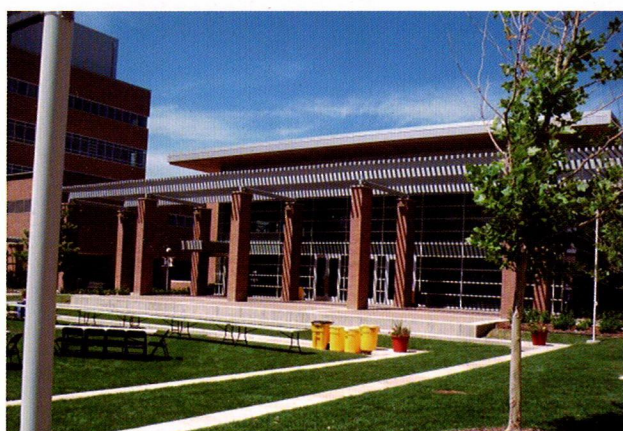


写真4 コロラド大学キャンパス



写真5 コロラド大学看護学部長の講義



写真6 ロッキー山脈国立公園



写真7 昼食会

(8) 国際看護学演習（ジュネーブ）

〔この授業と関連する到達目標〕

- ・〈4年次〉英語で他者と相互理解・意志疎通を図るコミュニケーションを図ろうとすることができる

国際看護学演習（ジュネーブ）では、ジュネーブの国際機関を訪問し、それぞれの施設の概要説明を受け施設見学等をおこなった。平成22年度に訪問をしたICRCは救援コースの学生であれば通訳なしで講義を聞けることを期待されていた。しかしながら、国際救援コースの立ち上げたばかりであり、学生達は英語を1年次から体系的に学んできていないため、初年度は通訳を介して内容を理解していった。平成23年度は、事前学習をして臨んだので、質疑応答を英語とする学生もあり、事前学習や語学力をつけることの必要性についてさらに認識を深めていた。ジュネーブ研修中は、自分たちで食事を取る必要もあり、ジェスチャーを交えて、英語でのコミュニケーションを図ろうとしていた。海外研修に参加することにより、英語を話そうというモチベーションが高くなっており、4つの能力の中で一番不足している能力として学生たち自身が考えていた。国際救援コースの学生だけが参加するのではないため、講義については通訳をつけるが、今後の課題は、事前の学習を充実させていくことと同時に質疑応答については英語で直接やり取りができるようにしていきたい。



写真8 UNHCRでの講義

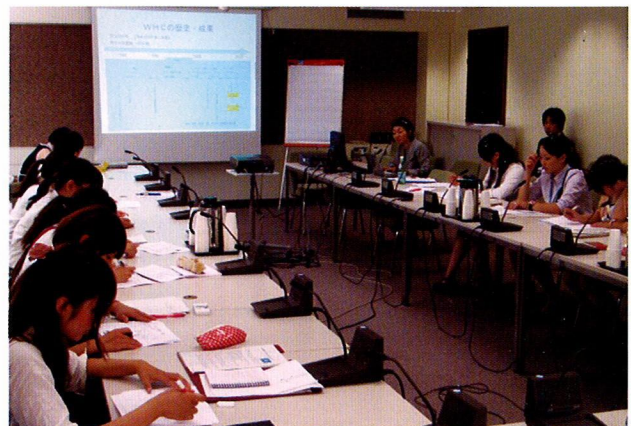


写真9 WHOでの講義

(9) 国際看護学演習（フィリピン）

〔この授業と関連する到達目標〕

- ・〈1、2年次〉英語を用いて、異文化の人々と積極的にコミュニケーションできる
- ・〈4年次〉英語で他者と相互理解・意志疎通を図るコミュニケーションを図ろうとすることができる

国際看護学演習（フィリピン）は、マニラでは英語、キリノ州ではタガログ語を用いることになり、現地通訳ガイドを依頼した。実際に、キリノ州の州立病院に実習に来ている看護学生とお互いの看護実習や大学内での講義等の相違について質問をしあい、交流を深めた。この交流会は、少人数のグループに分かれて実施したので、片言の英語でも自分の意思を伝えようと身を乗り出して会話をすることができた。さらに、フィールドでは水道事業について現地住民にインタビューをする機会もあり、異文化の理解とともに語学力を向上させる必要性については再認識できた。この演習

の今後の課題は、専門用語については少なくとも英語を聞いてわかるレベルにし、質疑応答等を含めて意見交換ができるようにしていきたい。



写真10 BWSAにインタビュー



写真11 看護学生と交流

(10) 講義科目以外のものについて

上記の科目以外にも学生の異文化コミュニケーション能力に係わる到達目標を達成するために、様々な学習資源を用意した。同時に、英語学習の指導役として、イングリッシュ・アドバイザーを採用した。

〔学習資源など〕

A. ランゲージ・ラーニング・センター（語学学習室、LLC）

この教室は主に国際救援コースの学生の講義に使われるだけでなく、学生の自律的な英語学習の便宜を図るためのものである。

B. ノートパソコン

LLCには27台のノートパソコンが備えられている。これらは主に次のCとDのアルクネットアカデミーによる英語学習とiPodを用いたリスニングの練習のために用いられている。

C. アルクネットアカデミー

アルクネットアカデミーはアルク教育社の提供するインターネットを活用した自己学習システムである。現在、スーパースタンドコースが導入され、レベル診断テストの後、リスニング、リーディング、そして、TOEIC受験のための学習ができるようになっている。それぞれの学生の学習時間と学習量が記録されており、必要に応じて教員がチェックし、学習に関するアドバイスを与えている。

D. iPod

iPodはCDやポッドキャストなどからダウンロードした音声データを利用し、リスニングの練習をすることを目的として救援コースの学生全員に貸与している。

E. 図書、雑誌、新聞

1種類の月刊英語雑誌（English Express）と2種類の英字新聞（Asahi WeeklyとMainichi Weekly）を定期購読している。また、約168冊の英語の速読用の図書と約12枚の語学学習用のDVDも備えた。

F. 視聴覚機材、キャビネット、机

52V型の液晶テレビとDVDプレーヤー、図書や新聞などを収納するためのキャビネット、そして、机と椅子を26脚整備した。

G. TOEIC (Test of English for International Communication)

TOEICは英語コミュニケーション能力を向上させるという目標（4年次に550点）を達成できたかどうかを測る尺度である。年に2回、それぞれ5月と11月頃に行った。

H. 英国での語学研修

この教育プログラムは基礎ゼミⅡの科目の延長上にあるものという位置づけである。海外の語学学校で、英語の研修を受けながら、英語力ばかりでなく、社交性と異文化理解を深めることをねらいとする（基礎ゼミⅡを参照）。

A～Fの学習資源はすべて英語の自律学習支援を行い、TOEICで高い点数を取るためのものである。救援コースの学生は基礎ゼミⅠの講義の中で、これらの有効な活用方法の説明を受けている。

LLCの空き時間には、パソコンやDVDプレーヤーでリスニングの練習をする学生たちの姿がよく見受けられた。アルクネットアカデミーの利用時間の調査をしたところ、学習時間が36時間以上の学生がいる一方で、1時間に満たないものもいた。iPodの使用状況をチェックし、インストールされている学習教材の内容とその利用時間を調査した。その結果、アルクネットアカデミーの場合と同様に、学生によってその使用時間と学習教材の量に大きな差が生じていた。このような学生に対しては、個別に呼び出し、面接を行った。それにもかかわらず、他の科目の勉強で余裕がなくなり、英語そのものの学習に熱意を失ってしまい、結局、英語の学習時間を増やすことができないものが一部見られた。

図書や雑誌、新聞を読む量も個々の学生によって大きな差が生じていた。夏季・冬季休暇などの時期的な要因以外に、試験や実習期間などが密接に関わっているようである。

TOEICは1年のうち前期と後期の2回行った。受験が必ずしも義務ではないため、毎回全員受験とまではいかなかった。例えば、平成22年の受験者数は、前期が約62人中30人、後期は32人、平成23年度の後期は89人中42人、後期は17人である。学年別のおおよその受験率は2年間で、1年生が全体の約80%、2年生が約30%、3年生が30%、4年生が約10%であり、学年が上がるにつれて、受験率が落ちている。この原因は1年次では英語学習に対する動機付けが強かったにもかかわらず、学年が上がるにつれて、思ったように英語学習の成果が得られなかったのが原因であろう。しかも、専門科目にかける時間の大きくなったため、3年前期から4年後期の間の実習期間中の受験率が著しく落ちている。このため、学年が上がるにつれて、点数の伸び率も低くなる傾向が見られ、特に、2年以上になると、特定の学生しか受験しなくなってしまった。

視聴覚機材は異文化コミュニケーションや基礎ゼミの授業でよく使用されていた。特に、DVDは学生たちの自主的なリスニングの練習に大いに役立っていたようである。

アルクネットアカデミーを用いた学習時間はTOEICの点数の伸びとも相関関係があった。例えば、2年生では、TOEICの点数が380点（1年前期）から495点（2年前期）まで伸ばした学生は約24時間、350点（1年前期）から575点（2年前期）まで伸ばした学生は約27時間をアルクネットアカデミーで学習していた。3年生も同様に、430点（1年前期）から585点（3年前期）に伸ばした学生は約17時間、535点（1年前期）から585点（3年前期）に伸ばした学生は約28時間だった。このような学生はLLCで姿を見かけることが多く、iPodでの学習や図書を利用することにも概して積極的

だった。

LLCでDVDや図書、雑誌、新聞を使って学習した時間は、iPodでの学習時間と比例関係にあるというのが私たちの印象である。だが、残念なことに、半数以上の学生がこのシステムでの学習を習慣とするところまでは至らなかった。

英国で行われる語学研修は最終的に15人の応募者のうち9人の救援コースの学生（3年生）が参加することになった。他にも、ジュネーブ、アメリカ、フィリピンでの国際看護学演習があることを考えると、この人数は決して少ない数ではない。

今後の課題をいくつか挙げておく。LLCを利用した英語学習に積極的で、しかも、アルクネットアカデミーの学習にも10時間以上かけているにもかかわらず、あまり点数を伸ばしきれない学生が一部いる（特に、学年が上がるにつれて、この割合が増える傾向がある）。このような場合、イングリッシュ・アドバイザー（下記参照）などの英語担当者が早めにそのような学生を見つけ出し、個別に面談をすることによってこまめな学習指導をする必要がある。

今後は、異文化コミュニケーションと基礎ゼミの講義の中で、A～Fの学習資源、特に、アルクネットアカデミーの活用状況をチェックし、それをそれぞれの学生の成績に反映させるようにすることによって、上記の学習資源を包括的に利用させ、TOEICで大きな点数の伸びが確実なものとするような学習指導をするのが重要である。

また、英国での語学研修は金銭的には学生の負担となる。他の3科目の国際看護学演習とのバランスをうまく取れるように、卒業までの長期的な学習計画の中で考えさせなければならない。

〔イングリッシュ・アドバイザーによる英語教育活動〕

LLCを中心とした補助的英語教育活動の一環として、平成23年度にイングリッシュ・アドバイザー（非常勤）を新たに採用した。

イングリッシュ・アドバイザーはLLCで速読の勉強会（希望者のみ）を行った。内容は主にスピードリーディングで、TOEICの試験前にはリスニングも多く取り入れた。これはTOEICでリーディングの点数が低い学生にとって有効な受験対策となった。また、英語の学習相談を行い、1年生に関しては、ほぼ全員と面接をした。

必修科目の英語ライティングⅠ-1、2（1年生）をこれまでの3クラスから、4クラスに分けた。そして、そのうちの1クラスを救援コースの学生だけで編成し、これをイングリッシュ・アドバイ



写真12 LLCでの講義風景



写真13 LLCの全景

ザーが担当した。これはライティングという科目が英語の講義科目の中で最も指導に手がかかり、同時に、学生が最も苦手とする科目だからである。これによって、救援コースのライティングに関してはこれまでよりもきめの細かい指導ができるようになった。

さらに、いくつかの英語版のDVDのトランスクリプションを作成した。学生のリスニングの練習のみならず、英語と日本語の表現の微妙な差異を知ることができるようになり、文化的な背景まで学習できるようになった。また、夏期講習として、TOEICと看護英語の勉強会を行った。看護英語以外にも英語のスピーチや時事英語、英語の歌詞などさまざまな教材を用いて英語学習の動機付けを高めるようにした。

今後の課題としては、学年が上がっていくにつれて語学学習に対する興味が薄れていく学生がいる。英語力を測る尺度となるTOEICはビジネスに関わる内容のものが多いため、国際救援で使われる英語と隔たりがあり、それが学習に積極的に取り組めない原因にもなっている可能性がある。これをある程度解消する手段として、実用的な看護英語やメールの書き方、TOEICで点数を取りやすくするための勉強の場を提供する必要があるかもしれない。

2. 課題探求能力・創造性

国際救援・開発協力に従事する際に期待される能力の一つである「課題探求能力・創造性」に関しては、大学教育全体にその育成が求められている「学士力」とも関連が深いといえる。こうした意味においては本プログラムのみならず、本学の教育課程全体がその育成に関わっているといえ、そのすべてを提示することが求められるべきかもしれない。しかしながら、報告書という性格上、以下では本プログラムに特化された14科目において目指された「課題探求能力・創造性」の育成の様子に限定して提示していくこととしたい。

1) 卒業時の到達目標

卒業時の到達目標は次の通りで、各授業に関連する到達目標を○印で表している。

表2 課題探求能力・創造性における卒業時の到達目標

卒業時の達成目標(太字)と 下位目標(年次別目標)	1年次			2年次			3年次			4年次					
	英語 L & S I : 1	英語 L & S I : 2	基礎ゼミ I	英語 L & S II	英語 L & S III	ヒューマン・ケアリング特論 看護英語	基礎ゼミ II	国際社会と保健活動	国際看護学演習 (フィリピン)	卒業研究	総合看護実習	災害看護学	国際看護学	国際看護学演習 (アメリカ)	国際看護学演習 (ジュネーブ)
5. 赤十字の理念のもと、被災地等の救援先において、公平・中立に判断できる必要性を理解する															
<1~4年次> 倫理に関する基本的概念、理論を理解している														○	○
<3, 4年次> 医療現場における倫理的課題について気づく											○	○	○	○	
<4年次> 国際救援・開発協力の現場における倫理的課題について検討し、問題解決の方法を考察できる															
6. 赤十字の国際救援に積極的に参加する意思を持ち続け、自己の能力開発を高める姿勢を身につける															
<1~4年次> 赤十字の国際救援・開発協力活動への興味を持ち、自ら学ぶ姿勢を持つ								○	○					○	○
7. 国際的視野をもち、必要に応じて現状を改善、改革するための創造的思考力を身につける															
<1, 2年次> 他者と協調して課題に取り組む姿勢を持つ						○									
<1, 2年次> 日常生活において限られた資源の活用を考えられる						○									
<2年次> ボランティア活動の運営に積極的に参加する						○									
<2, 3年次> 対象により良い看護を提供するために創造的に工夫することができる															
<3年次> 積極的に行動でき、他者への指導力を持つ															
<1~4年次> 自分の意見を持ち、他者に表現できる								○						○	○
<4年次> 自分の意見を理論立てて表現でき、他者と意見交換できる										○	○		○	○	○
<4年次> 限られた資源の活用について検討し、工夫することができる												○			
<4年次> 専門職としての自覚を持ち、積極的に自己開発することの重要性を理解する							○			○	○	○	○	○	

2) 授業科目

(1) ヒューマン・ケアリング特論

〔この授業と関連する到達目標〕

- ・〈1、2年次〉他者と協調して課題に取り組む姿勢を持つ
- ・〈1、2年次〉日常生活において限られた資源の活用を考えられる
- ・〈2年次〉 ボランティア活動の運営に積極的に参加する

この授業は、ボランティア活動に関する理論の学習、ボランティア活動の実践、海外でのボランティア体験に関する講義の3つを柱としている。特に重視しているのはボランティア活動への参加である。ボランティア活動に参加する際の要件として、「学外において、本学の学生以外の団体（個人）と協働すること」を定めている。受講生はこの要件を満たしたボランティアへの参加を通じて上記3つの目標に到達することが目指されている。なかでも「他者と協調して課題に取り組む姿勢を持つ」ということについてはボランティア体験から得ることが大きいようである。

その他の二つ、「日常生活において限られた資源の活用を考えられる」、「ボランティア活動の運営に積極的に参加する」の両者については、学外でのボランティア体験においては企画の主体として参加する機会が少なく、実際には学内でのイベント（自治会などが主催する各種行事）の企画・運営に係わるなかで力をつけていくようである。学外でのボランティア体験が、学内行事に対するより積極的な参加に結びついていることが背景にあると考えられる。

また、海外でのボランティア体験に関する講義においては、日常生活において限られた資源を活用することや自らの企画によってプロジェクトを進めることなどについて、具体的な事例を学ぶことができる。

今後の課題としては、ボランティア活動の運営への参加を促すような関わりを充実していくことがあげられる。他者との協調性を身につけること、また限られたリソースを活用することは、ボランティア活動の目的設定や方法の選択に具体的に関与することによって、体験的に、かつ効果的に学習することが可能となると考えられる。



写真14 ボランティア活動の様子
（保育ボランティア活動）



写真15 海外でのボランティア体験に関する講義
（NICARAGUA y Japón 平成23年度）

(2) 国際社会と保健活動

〔この授業と関連する到達目標〕

- ・〈1～4年次〉赤十字の国際救護・開発協力活動への興味を持ち、自ら学ぶ姿勢を持つ
- ・〈1～4年次〉自分の意見を持ち、他者に表現できる

国際社会と保健活動では、世界の保健医療状況を理解し、グローバルな視点で国際保健活動に関する基本的な知識を理解することを学習目標としている。本講義の中では、開発協力の理念とその変遷、世界の健康問題とミレニアム開発目標、国際活動のさまざまな組織とその役割等を学習する。国際社会と保健活動を受講することを国際看護学演習（フィリピン）の参加条件としているが、日本赤十字社とフィリピン赤十字社の二国間支援の開発協力事業であることを本講義の中でおさえている。前半は講義をしたうえで、後半は自分たちで取り上げたい国を選択して、その国の保健医療体制や健康問題、それに対する対応策について文献等で調べて発表を行っている。そうすることで、自らが設定した課題に対して主体的な学習にすることをねらいとした。具体的には、フィリピン、インドネシア、ブラジル、ボリビア、コンゴ、エチオピア、ソマリア等について取り上げていた。

こうした演習を通して、自分たちで課題を見出して現状分析し、分かりやすく発表するための工夫をし、主に課題探求能力と問題解決能力を育成することをねらいとしている。

また、世界の状況に対して興味関心を持ってもらうために、講義時間の最初の10分間は、「ワールドニュース」と題して、世界で発生している災害や社会・政治・経済状態について報告をする時間を設けた。新聞やHP等から入手した記事を報告し、そのことが日本にあるいは世界にどのような影響を与えているのかということを考えるようにした。

例) イタリアの原発計画の中止について、WHOが携帯電話を発ガン物質に認定、ドイツでO-104発生、アメリカの竜巻災害、リビア情勢、東日本大震災等

(3) 国際看護学演習（フィリピン）

〔この授業と関連する到達目標〕

- ・〈1～4年次〉赤十字の国際救護・開発協力活動への興味を持ち、自ら学ぶ姿勢を持つ

本演習の目的は、開発途上国の健康問題とその背景、対策、看護支援のあり方への考えを深め、国際社会において看護および赤十字が担う役割について、グローバルな視野で考えられる基礎的能力を養うことである。訪問先は、フィリピン赤十字社本部及びキリノ州支部、マザーテレサセンター、スモーキーマウンテン等である。

日本赤十字社とフィリピン赤十字社の二国間支援のもと、日本から二人の看護師がキリノ州支部に派遣をされ、国際地域保健活動を展開している。キリノ州はマニラからさらにバスで10時間行った地域であり、RHU (Rural Health Unit) はあるが、そこにアクセスすることが困難な地域に住む人たちに対しても健康の維持増進ができるよう、ヘルスボランティアの育成を行っている。自分たちで自分たちの地域の人々の健康を維持することを目指した活動であり、開発協力の実際を見学できる貴重な体験となった。現地の小中学校で学生とともに近くに住む住民を対象としてマラリアやデング熱の予防、異常の早期発見のための観察、対処法などを紙芝居により実施し、健康管理の重要性を低学年から教えることの意味を理解することができていた。水道事業を実施した地域では、下痢や発熱などの健康に関する問題が少なくなり、生活の質が向上したことなどを住民に対してイ

インタビューを実際に行うことで理解を深めることができた。ただ、学生は語学力が乏しく、通訳を介してないとコミュニケーションをとることが難しく、本研修後に語学力をつけたいという思いを強くしていた。

マザーテレサセンターは、「死を待つ人の家」、「子どもの家」に行き、食事の介助や清潔の援助などのケア活動を行うことができた。シスターのお話やボランティア活動を通して、ヒューマンケアリングの意味や人間の真の幸福について等を自分なりに深めることができていた。スモーキーマウンテンでは、復興住宅に住む人たちの自立支援活動の実際を見学させていただくことができ、ここでも開発協力について学ぶ機会を得ている。



写真16 フィリピン赤十字社 本社



写真17 ヘルスボランティアによる健康教育



写真18 水道設備（タンク式）



写真19 衛生キットの配布

（４）総合看護実習

〔この授業と関連する到達目標〕

- ・〈３、４年次〉医療現場における倫理的課題について気づく
- ・〈３年次〉積極的に行動でき、他者への指導力を持つ
- ・〈４年次〉自分の意見を理論立てて表現でき、他者と意見交換できる
- ・〈４年次〉限られた資源の活用について検討し、工夫することができる
- ・〈４年次〉専門職としての自覚を持ち、積極的に自己開発することの重要性を理解する

総合看護実習は４年間の総まとめで、４年生９月の２週間、自分が設定した課題に対して主体的

に取り組む実習である。実習目標は、①多重課題への対応やマネジメント、リーダーシップ、チームケアについての理解を深めること、②自己の着目した看護チームの課題を見出して解決策を考えること、③看護職としての責務を自覚し主体的に倫理的な行動をとることができることの3点である。さらに、国際救援コースの学生は、④国際医療救援拠点病院におけるさまざまな国際救援活動の実際について理解を深めることを、目標として追加した。平成22年度は希望の学生7名が大阪赤十字病院と名古屋第二赤十字病院に、平成23年度は国際救援コースの学生16名が大阪赤十字病院、名古屋第二赤十字病院、日本赤十字和歌山医療センター、熊本赤十字病院に受け入れていただいた。

倫理的な行動という点では、4年間の実習経験があり、主体的に対象者の尊厳を重んじた責任ある行動（報告、連絡、相談等）をとることができていた。

この実習目標を達成するためには、自分の課題を明確にして臨むことが必要であった。実習前の面接では不十分であったが、実習指導者の助言やカンファレンスにより目的を明確にすることができていた。さらに、「国際医療救援拠点病院におけるさまざまな国際救援活動の実際について理解を深める」ために、活動経験者からの説明を受けたりしたが、自分たちが学びたい内容（役割や派遣体制等について）を明確にしながら、実習に臨むことができた。総合看護実習の受け入れが良かったので、学生は自己の課題に沿って、自分で実習計画を立案し、主体的に実習を行うことができた。最終学年の最後の実習でもあり、看護組織の一員としての役割、自己の責任と能力を認識した行動については考えることができた。看護管理者および専門看護師や認定看護師等のシャドーイングを実施することによって、チーム医療の中におけるリーダーシップやメンバーシップについて学ぶことができ、他職種と連携をとり、問題解決を推進することの必要性は理解できた。

国際医療救援拠点病院では、ERUなどを派遣する緊急救援活動をはじめとして、開発協力事業にも多くの派遣者がおられ、実習期間中にそうした活動経験者からの実際の活動報告を聞く機会を持って、それぞれの活動の目的や赤十字の役割、看護師の役割、派遣体制、その後のフォロー体制などについて理解を深めていた。また、国際救援に携わる看護師の人材育成計画やその内容なども説明を受けることができ、さらに国際救援看護師になろうというモチベーションをあげることができた学生もいた。平成23年度は、東日本大震災が発生後それぞれの国際医療救援拠点病院がどのような活動をされたのかを理解し、災害時には有限の資源を効果的・効率的に活用することが重要で、さらに日頃からの備えや教育が重要であるという認識を持つことができた。

（5）災害看護学

〔この授業と関連する到達目標〕

- ・〈3、4年次〉医療現場における倫理的課題について気づく
- ・〈4年次〉限られた資源の活用について検討し、工夫することができる
- ・〈4年次〉専門職としての自覚を持ち、積極的に自己開発することの重要性を理解する

災害看護学では、本事業の取り組みとして次の3つの取り組みを行っている。①トリアージ訓練におけるOSCEの実施、②国際医療活動疑似体験ツアーへの参加、③避難所疑似体験演習の実施である。授業において、さらに演習の一つとして「学外の災害救護訓練への参加」も行っており、講義だけでなく、学生が演習に参加することで、体験から学ぶことを重視している。

学生はこれら多様な体験を通して、到達目標「限られた資源の活用について検討し、工夫するこ

とができる」、到達目標「専門職としての自覚を持ち、積極的に自己開発することの重要性を理解する」については、必要性に気づき、取り組んでいく姿勢を持つようになっている。特に、「②国際医療活動疑似体験ツアーへの参加」において、上記到達目標の学生の自己評価は、いずれも達成できたと評価できている。この演習では、実際の国際活動について疑似体験をしたり、グループワークで自ら思考したり、体験談を聴いたりするなど、具体的にイメージすることで理解につながったと考えられる。また、実際に国際活動を行った体験者や、現在ハイチで活動中の派遣要員とSkypeで交流する時間をもて、赤十字看護師および専門職としての自覚を持つことに繋がっている。



写真20 災害看護学 OSCE実施 (1)



写真21 災害看護学 OSCE実施 (2)



写真22 赤十字国際活動疑似体験ツアー
(大阪赤十字病院で開催) グループワーク (1)



写真23 赤十字国際活動疑似体験ツアー
(大阪赤十字病院で開催) グループワーク (2)



写真24 赤十字国際活動疑似体験ツアー
テント設営



写真25 赤十字国際活動疑似体験ツアー
無線・イリジウム・GPSでミッション体験

到達目標「医療現場における倫理的課題について気づく」は、講義で災害時に起こりうる倫理的課題やトリアージにおける黒タッグの被災者へのケアについて、学生に問題提起することや、実際に演習で模擬傷病者役を体験することなどによって、学生自身が問題意識を持って考えることに繋がっている。

今後は、学生が授業を通して体験的に学んだことから、問題意識を持って考察し、課題を見つけられるようグループワークを行うなど、授業方法の工夫をしていくことが課題である。

(6) 国際看護学

〔この授業と関連する到達目標〕

- ・〈1～4年次〉倫理に関する基本的概念、理論を理解している
- ・〈3、4年次〉医療現場における倫理的課題について気づく
- ・〈1～4年次〉赤十字の国際救護・開発協力活動への興味を持ち、自ら学ぶ姿勢を持つ
- ・〈1～4年次〉自分の意見を持ち、他者に表現できる
- ・〈4年次〉自分の意見を理論立てて表現でき、他者と意見交換できる
- ・〈4年次〉専門職としての自覚を持ち、積極的に自己開発することの重要性を理解する

国際看護学では、3年次「国際社会と保健活動」を履修した学生を対象に、4年次前期に開講している。主な学習目的は、「国や文化を超え、グローバルな視点から看護の諸問題を捉え理解を深めるとともに、その問題解決のための初歩的な方策について学習すること」にある。講義は主に、2つの柱で構成され、講義前半は、国際看護の概念について理解し、世界的な視点から健康問題の概要を理解すること、異文化看護について、また宗教と文化の多様性とヘルスケアに関する議論について学習している。講義後半は、先進国主に米国を例にとり、医療制度、看護の現状について学んでいる。

講義では、毎年30名程度の少人数のクラスであるため、文献を用い討議中心にクラスを進めている。その中で学生は、講義テーマに関して自らの実習での看護実践や学習体験を、他者にわかりやすく説明し、共有すること、他者の意見を聞くことから多角的にトピックについて分析し複眼的な視点をもつことの重要性を学んでいる。この他クラスの取り組みの1例を挙げると、ヘルスケアに関する議論や倫理に関するテーマについて問題意識を高める目的で、米国ドラマER（30分程度）の一部を教材として使用している。米国の医療保険制度、高額医療を必要とする外国人不法滞在者に対する医療の課題、高度看護専門職の実践範囲と職務権限に関わる医療者の倫理の問題、臓器移植と医療者の倫理的葛藤という視点から倫理的課題の意識付けを行っている。

講義後半には、米国の医療制度、看護の概要と、看護教育制度、高度看護専門職の活動と役割について学んだ後、学生の興味関心のあるテーマを取り上げ、学生グループで資料を収集・作成し、日本と米国について比較検討した結果を発表し共有している。主な学生プレゼンテーションのテーマは、日米の健康問題の比較、海外渡航者の健康、マグネットホスピタル、医療過誤、臓器移植、感染症対策であった。テーマについて考察を深め、学生同士が意見交換する機会をもつことから、課題の探求能力、問題解決に関わる創造性につなげている。

これらの米国の看護の概要の講義と後半の学生プレゼンテーションの内容は、国際看護学演習（アメリカ）でのプログラム参加のための事前学習ともなっている。今後は、講義でのプレゼンテ

ーションの機会が、米国での演習の事前準備として効果的な学習の機会になるよう、プレゼンテーションのテーマをより焦点を絞って選定することや、日本での資料収集等では不十分な課題・問題については、必ず米国での演習で課題解決できるよう、学生に意識付けを行っていくことが課題である。



写真26 コロラド大学研究科長 コロラド大学看護教育



写真27 コロラド大学学生との交流

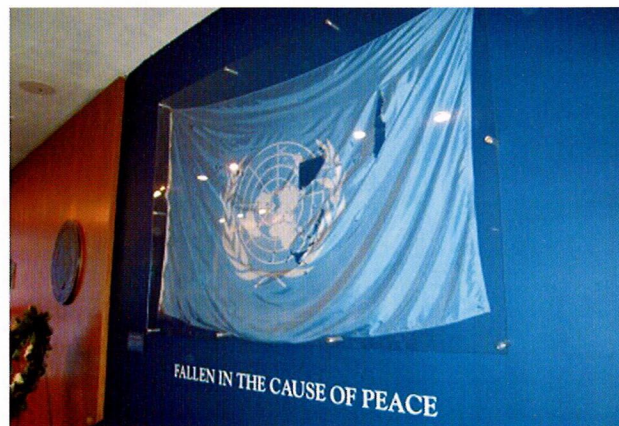


写真28 ニューヨーク国連本部

(7) 国際看護学演習（アメリカ）

〔この授業と関連する到達目標〕

- ・〈1～4年次〉倫理に関する基本的概念、理論を理解している
- ・〈3、4年次〉医療現場における倫理的課題について気づく
- ・〈1～4年次〉赤十字の国際救護・開発協力活動への興味を持ち、自ら学ぶ姿勢を持つ
- ・〈1、2年次〉他者と協調して課題に取り組む姿勢を持つ
- ・〈2、3年次〉対象により良い看護を提供するために創造的に工夫することができる
- ・〈3年次〉積極的に行動でき、他者への指導力を持つ
- ・〈1～4年次〉自分の意見を持ち、他者に表現できる

- ・〈4年次〉 自分の意見を理論立てて表現でき、他者と意見交換できる
- ・〈4年次〉 専門職としての自覚を持ち、積極的に自己開発することの重要性を理解する

国際看護学演習（米国）では、4年生を対象に毎年8月中旬の2週間、米国コロラド大学デンバー校看護学部、米国赤十字社マイルハイ支局、および異文化学習のためにニューヨーク、国連本部、911テロ跡地等を訪れている。主な学習目的は、「米国コロラド州、コロラド大学看護学部での講義、大学関連保健医療施設の見学・実習、異文化研修を通して、既存の看護概念・理論および看護現象について異なった文化・風習・環境下で比較検討し、看護の本質を探究する」ことにある。平成22年度4年生13名、平成23年度16名の学生が参加した（平成21年度は世界的なインフルエンザ感染拡大のため閉講）。

アメリカの医療制度、看護専門領域における現状と課題について理解する中で、学生は米国の「自主・独立の精神」や「個人の選択の自由を尊重する」人々の基本的価値観、多種多様なアプローチで柔軟に物事に対応する文化を実際に体験しながら、米国の文化的な特徴を踏まえた視点からも、医療や看護の現状について問題意識を高め知見を広めていた。また、コロラド大学教授陣の創意・工夫され、エネルギーに溢れた講義に触発され、活発に質問し自身の日本での学習体験を共有するなど、積極的な姿勢で興味深く問題意識をもって講義、演習に参加していた。

さらに平成22年度より、米国赤十字社での赤十字活動の実際や、保健医療看護専門職との連携、災害時等非常時の支援システムについて学び、広く国際的な視野から赤十字の役割と機能を理解する目的で、現地米国赤十字社での研修をプログラムに加えた。これにより、デンバー地域に密着し



写真29 地域看護学講義



写真30 高度看護専門職の役割と実践についての講義



写真31 米国デンバー赤十字マイルハイ支局(1)



写真32 米国デンバー赤十字マイルハイ支局(2)



写真33 米国デンバー赤十字マイルハイ支局(3)



写真34 コロラド州小児病院(1)



写真35 コロラド州小児病院(2)



写真36 コロラド大学シミュレーションセンター



写真37 老年看護学での演習

た住民への赤十字活動やボランティア活動、災害・非常時の活動等における看護師の役割を学び、赤十字ボランティア、赤十字職員との交流により、赤十字看護師として、より広い視点から専門職としての自覚をもつきっかけとなった。

今後も、コロラド大学での看護学講義・演習では、最新の米国における看護の現状と課題のテーマを反映したプログラムを演習先大学と交渉し共同して作成、実施すると共に、米国赤十字社の訪問も、継続して行う予定である。

(8) 国際看護学演習（ジュネーブ）

〔この授業と関連する到達目標〕

- ・〈1～4年次〉赤十字の国際救護・開発協力活動への興味を持ち、自ら学ぶ姿勢を持つ
- ・〈4年次〉自分の意見を理論立てて表現でき、他者と意見交換できる

国際看護学演習（ジュネーブ）では、約10日間、国際的な健康保健機関（UN、UNHCR、WHO）、国際赤十字関連機関（ICRC、IFRC、国際赤十字博物館等）を中心として、スイスのみではなくイタリアにある赤十字にゆかりのある地域（エマヌエレ2世祈念塔、サンピエトロ教会（納骨堂））や赤十字博物館等を訪問した。イタリアのカステリオーネでは糸杉の丘や納骨堂に行き、スイスのジュネーブではアンリー・デュナンの生まれた家、ソルフェリーノの思い出を出版した印刷所、5人委員会を開催した場所などの歴史的な場所を巡り、当時に思いを巡らしながらその場所を見学することができた。また、平成22年度はICRCおよびIFRCを訪問し、それぞれに活動目的や実際の活動内容、現在の課題などについて担当者より説明を受け、赤十字のあゆみと活動で学んだ知識に加えて実際に現地でグローバルに活動をしている方から直接に講義を受ける機会を持つことができた。特に国際人道法については、ICRCの捕虜の人権擁護のための活動を知り、赤十字の基本理念である人道、中立、独立が深く関わっていることを実感できていた。IFRCやUNHCR等では、緊急支援だけではなく開発協力につながる事業を実施していることも理解できた。さらに赤十字以外の国際機関としては、国連、UNHCR、WHO、ICN等も訪問したことにより、それぞれの組織の役割や赤十字との関係を理解することができた。各訪問施設の担当者を決めて事前学習を行い、資料としてまとめ情報を共有し、それぞれに主体的に講義を受けることができた。

WHOでは、母子保健やUNAIDS、Neglected Tropical Diseaseの担当者やインターンからのお話を聞き、その後の交流会では、WHOに日本から来ている若者と自分のキャリア形成について話をすることにより、具体的な将来像を構築する必要性や、自分の意見を他者にわかりやすく伝えることの重要性について再確認をしていた。



写真38 IFRCの視察



写真39 ICRCでの講義



写真40 ICNで講義



写真41 国際赤十字博物館



写真42 WHOで講義（母子保健）



写真43 WHOで交流会

3. 状況判断能力・問題解決能力

国際救援・開発協力に従事する際に看護専門職として期待される能力として、3番目に「国際救援時における状況判断能力・問題解決能力」の育成を目標に掲げている。看護専門職としての状況判断能力、問題解決能力については、本学の看護教育課程全体を通して、低学年の教養科目と看護学分野の専門教育による講義や実習により、学生の分析的状況判断、問題解決能力や批判的能力の育成に取り組んでいる。ここでは、特に学士課程において、国内の平時の状況に限ることなく、国際的な状況での平時・非常時にも触れ、学生が初歩的な段階で、看護の現象についてグローバルな視点から捉え、意識を持ち問題を認識できるよう、基本的な態度とその能力の育成のための取り組みについて紹介する。

1) 卒業時の到達目標

卒業時の到達目標は次の通りで、各授業に関連する到達目標を○印で表している。

表3 状況判断能力・問題解決能力における卒業時の到達目標

卒業時の達成目標(太字)と 下位目標(年次別目標)	1年次			2年次			3年次			4年次						
	英語 L & S I・1	英語 L & S I・2	基礎ゼミ I	英語 L & S II	英語 L & S III	ヒューマン・ケアリング特論	看護英語	基礎ゼミII	国際社会と保健活動	国際看護学演習 (フィリピン)	卒業研究	総合看護実習	災害看護学	国際看護学	国際看護学演習 (アメリカ)	国際看護学演習 (ジュネーブ)
4. 国内外の救援活動において、限りある資源を活用して、看護の必要性や実行可能な活動を判断する能力を身につける																
<4年次> 国際救援・開発協力現場に必要な基礎的看護技術の習得に取り組む													○			
8. 他者を救援するために、不可欠である自己の判断・行動に責任をもち、心身の自己管理ができる																
<2年次> ボランティア活動の運営に積極的に参加する						○										
<3年次> 自己の心身の健康管理が行える										○						
<1～4年次> 自己の心身を健康な状態に保つため、どのようにストレスに対処したらよいか気がつける															○	○
<4年次> 積極的に行動でき、他者への指導力を持つ							○					○			○	

2) 授業科目

(1) ヒューマン・ケアリング特論

〔この授業と関連する到達目標〕

- ・ <2年次> ボランティア活動の運営に積極的に参加する

ヒューマン・ケアリング特論では、学外でのボランティア活動に参加することが単位認定の条件となっている。受講生は週末や長期休暇を利用して、積極的にボランティア活動に取り組んでいる。しかし、ほとんどの場合、学外の団体から募集があった活動に参加するという形態をとっており、

主催者側の立場でボランティア活動に従事するケースはこれまでのところ見られなかった。運営サイドでの活動を行えるように事前に関わっていくことは今後の課題であるといえる。また、それと同時にボランティア体験がその後に行われる学内行事に関する主体的な参加に結びついている様子をうかがえることから、講義終了後も救援コースの学生に対するフォローアップを行うことで、「ボランティア活動の運営に積極的に参加する」という目標への到達に寄与することは可能であると考えられる。

(2) 国際看護学演習（フィリピン）

〔この授業と関連する到達目標〕

- ・〈3年次〉 自己の心身の健康管理が行える

国際看護学演習（フィリピン）は、3年次の「国際社会と保健活動」を受講し、開発途上国の保健事情および地域保健活動に関心を持った学生が参加をした。まず、本演習にあたって、3ヶ月前のオリエンテーションで、学生に対して予防接種（A型肝炎、破傷風、新型インフルエンザ）受けるよう説明し、自分なりのスケジュールを組んで全ての予防接種を受けなければならない。さらに現地でかかりやすい風土病などについても理解したうえで予防策（蚊に刺されないように長袖や長ズボンを着用、虫除けスプレーや蚊取り線香持参、野良犬には近づかない等）を講じて、研修期間中を通して自己の健康管理に努める必要がある。フィリピンを訪問した時期が雨季であり、日本とは異なる地域・風土での集団生活、研修期間中には舗装されていない道路を約10時間かけてバスで移動する日程が二日間あった。マニラのような大都市では英語を使い、キリノ州では現地の人とはタガログ語を使う生活、そして研修期間中は2人から3人部屋で共同生活を行った。学生の役割分担として、リーダーや環境係、健康係を設け、研修期間中の自己の健康管理はもちろんのことお互いの心身の健康状態を気遣い、平成22年度に実施したフィリピン研修では、体調を崩す学生はいなかった。日本から派遣されている二人の看護師からも、国際救援活動を実施するにはまず自分の健康管理をすることが重要であり、それが基本となることを学んだ。研修後についても、発熱・下痢等には注意を促していき、「自己の健康管理が行える」の目標は、本演習期間を通して学習する機会となり、ほぼ全員が達成できたといえる。

今後についても、特に衛生環境の良くない地域に入り共同生活をするということを学生に事前に理解してもらい、自己やお互いの心身の健康状態について管理をしていくことができるよう学生に関わりたい。



写真44 スモーキーマウンテン



写真45 ジプニーで川を渡る



写真46 カラバオで移動



写真47 ひとりが渡れるつり橋



写真48 ソーラン節の披露



写真49 赤十字ボランティアと一緒に昼食

(3) 総合看護実習

〔この授業と関連する到達目標〕

- ・〈4年次〉積極的に行動でき、他者への指導力を持つ

総合看護実習は4年間の総まとめとして、自分が設定した課題に対して主体的に取り組む実習である。この実習期間中は、その自己の課題に関連する看護師、看護管理者、医師やPTなどの医療従事者、患者、家族等と関わり、必要であれば各種委員会への出席等をして、現状の理解に努めた。また、それだけに終わらず、現状から課題を見出し、その根拠および解決策を考え、協力を得ながら環境を整えたり、資料内容を検討する。さらに、「国際医療救援拠点病院におけるさまざまな国際救援活動の実際について理解を深める」ために、活動経験者からの説明を受けたりしたが、自分たちが学びたい内容（役割や派遣体制等について）を明確にしながら、実習に臨むことができた。総合看護実習の受け入れが良かったので、学生は自己の課題に沿って、自分で実習計画を立案をし、主体的に実習を行うことができた。最終学年の最後の実習でもあり、看護組織の一員としての役割、自己の責任と能力を認識した行動については考えることができた。看護管理者および専門看護師や認定看護師等のシャドーイングを実施することによって、チーム医療の中におけるリーダーシップやメンバーシップについて学ぶことができ、他職種と連携をとり、問題解決を推進することの必要性は理解できた。

(4) 災害看護学

〔この授業と関連する到達目標〕

・〈4年次〉 国際救援・開発協力現場に必要な基礎的看護技術の習得に取り組む

災害看護学では、上記目標の達成のために、講義において基礎的看護技術の必要性について教授するとともに、「災害救護訓練への参加」、「赤十字国際活動擬似体験ツアーへの参加」、「避難所疑似体験演習」、「トリアージ訓練の演習」および「OSCE（トリアージ）」などの演習を実施している。災害現場で必要なトリアージの技術について、1回目に模擬傷病者役として実施し、2回目にOSCEを実施している。OSCE実施の評価結果は、おおよそ6～7割程度である。学生は自己の行動を振り返り、OSCEの目標達成が難しかったとしているが、模擬傷病者や評価者からのフィードバックを受けることで、自己の課題を見出すことはできている。学生が主体的に演習に参加し体験することを通して、日頃から基礎的看護技術の習得に向けて努力する必要性に気づく機会になっている。

今後も継続して模擬傷病者を用いたトリアージによるOSCEを実施し、学生が自己の技術の評価ができ、自己の課題を見出せるよう取り組んでいく。また、OSCE実施に向けた学生の事前学習が十分に行えるように支援する必要がある。

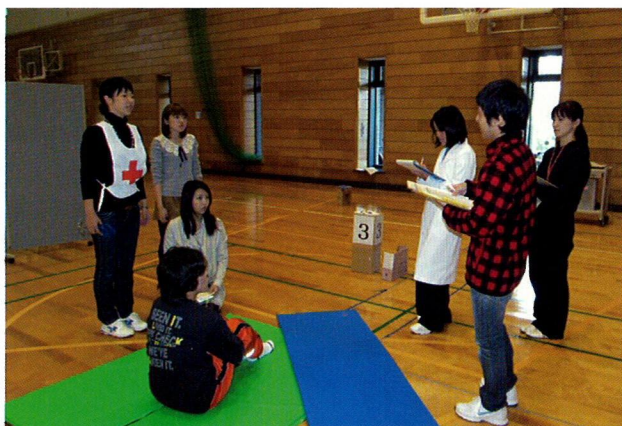


写真50 災害看護学 OSCE実施 (1)



写真51 災害看護学 OSCE実施 (2)



写真52 災害看護学 避難所疑似体験演習 (1)



写真53 災害看護学 避難所疑似体験演習 (2)



写真54 災害看護学 避難所疑似体験演習 (3)



写真55 災害看護学 避難所疑似体験演習 (4)

(5) 国際看護学演習 (アメリカ)

〔この授業と関連する到達目標〕

- ・〈3年次〉 自己の心身の健康管理が行える
- ・〈1～4年次〉 自己の心身を健康な状態に保つため、どのようにストレスに対処したらよいか
気がつける
- ・〈4年次〉 積極的に行動でき、他者への指導力を持つ

国際看護学演習 (アメリカ) では、約2週間のプログラムで、米国コロラド大学とニューヨーク市の国連本部や911テロ跡地等を訪れている。米国コロラド大学看護学部での講義、大学関連の保健医療施設での演習を通して、コロラド州を例に健康問題や看護教育、臨床看護実践について学んでいる。異文化研修として訪問するニューヨーク市では米国の多様な人種・価値観、文化を体験する。

多くの参加学生にとって、初めての海外生活であることに加え、時差や日本とは異なる気候、さらに英語での日常生活、長期滞在型宿泊施設での集団生活など、新たな環境での生活体験となっている。集団生活・行動であるため、学生にとって自己の健康管理の責任を持つことや、他者へ配慮しあうことは最重要課題である。また共同生活の中で、他者と協働し、リーダーシップやメンバーシップについても学ぶ機会にもなっている。米国の大学での講義、演習の看護を学ぶ目標のみでなく、外出時の治安に対するリスク予知と対処、物理的にも広大な土地での移動手段を見つけることなど、衣食住全般を通して異文化を学ぶ豊富な機会となっている。現地で限られた期間、協力しあい一緒に生活することから自己を振り返り自己理解を深め、客観的に日本文化や自己の価値観を見つめ、人間的にも短期間に学生は大きく成長している。



写真56 コロラド大学での講義後のまとめと討議



写真57 ロッキー山脈山頂での昼食



写真58 休日のバーベキュー



写真59 スーパーでの食事の買出し

前述したように、参加学生の多くが、初めての海外演習であることから、今後も引き続き学生が健康に十分配慮できるよう、また集団生活をより充実させて助け合いながら演習が遂行できるよう、事前オリエンテーションを行い、情報提供を十分に行っていく予定である。

(6) 国際看護学演習（ジュネーブ）

〔この授業と関連する到達目標〕

- ・〈1～4年次〉 自己の心身を健康な状態に保つため、どのようにストレスに対処したらよいか気がつける

国際看護学実習（ジュネーブ）では、約10日間、国連関係機関（UN、UNHCR、WHO）、国際赤十字関連機関（ICRC、IFRC、赤十字博物館等）、その他ICN等を訪問した。特に赤十字にゆかりのある地域（ソルフェリーノの丘）に行き、イタリア、スイスの文化・宗教・言語・生活習慣等の違いを実際に学ぶことができた。イタリアからスイスへはバスで7時間かけて移動をしたが、自己の健康管理を行い、体調を崩すことなく研修を終えることができた。初回研修については、スイスに到着してすぐに盗難にあうという体験をしたが、それ以降は適度に緊張感を保つことができた。また、第2回目以降は、事前のオリエンテーションとして危機管理を入れて、外務省やJICA等の資料を配布して注意を促した。国際看護学演習（フィリピン）と同様に、学生の役割分担を行った。そのため、健康係をはじめとして各係が役割を遂行し協力をしあいながら、研修期間中の自己の健康管理はもちろんのことお互いの心身の健康状態等に配慮することができた。



写真60 IFRCのロビーで説明を受ける



写真61 ICNで記念撮影



写真62 カステリオーネのホテルで昼食



写真63 ソルフェリーノの丘で

4. 基礎的看護実践能力

国際救援・開発協力に従事する際に期待される能力の一つである「国際救援時に必要な基礎的看護実践能力」に関しては、国際救援・開発協力の場面において、看護者としてその役割を果たすために重要な能力の一つである。また、日本看護系大学協議会が「看護学士課程におけるコアとなる看護実践能力」を示しているように、学士課程において基礎的な看護実践能力の強化は、重要な課題となっていることと関連する。そして、本学は赤十字の大学であり、赤十字の理念に基づいた看護を実践できる看護者の育成を目指している。また、国際救援・開発協力は赤十字の重要な使命の一つである。以下では本プログラムに特化された14科目において目指された「国際救援時に必要な基礎的看護実践能力」の育成の様子に限定して提示する。

1) 卒業時の到達目標

卒業時の到達目標は次の通りで、各授業に関連する到達目標を○印で表している。

表4 基礎的看護実践能力における卒業時の到達目標

卒業時の達成目標(太字)と 下位目標(年次別目標)	1年次			2年次			3年次			4年次				
	英語 L & S I : 1	英語 L & S I : 2	基礎ゼミ I	英語 L & S II	英語 L & S III	ヒューマン・ケア リング特論 看護英語	基礎ゼミ II	国際社会と保健活動	国際看護学演習 (フィリピン)	卒業研究	総合看護実習	災害看護学	国際看護学	(ジュネーブ) 国際看護学演習 (アメリカ) 国際看護学演習
1. 赤十字の理念と国際人道法に基づく、赤十字の国際救援における看護の役割を理解する														
<1~4年次> 赤十字の理念と国際人道法について理解している														○
<3~4年次> 赤十字の国際救援・開発協力における看護の役割を理解している									○					○
<1~4年次> 赤十字の国際救援・開発協力活動への興味を持ち、自ら学ぶ姿勢を持つ									○					○
2. 文化の多様性を認識し、それぞれの国の文化を尊重する重要性を認識する														
<1, 2年次> 文化の多様性を認識し、それぞれの文化を尊重する重要性を理解している														
<1, 2年次> 生命の尊厳を尊重する姿勢を持つ														
<3~4年次> 国内外の国際救援・開発協力活動の組織的な取り組みについて理解している								○	○		○			○
<4年次> 既存の理論や概念を用いて、対象の個性を考慮した適切な看護を提供できる										○			○	○
<4年次> 状況に応じて自己の態度を柔軟に変化できる						○								○
<4年次> 卒業論文を国際救援・開発協力に関するテーマで、積極的に英文文献を活用して論文作成している										○				
<4年次> チーム医療においてより良い看護を提供するために建設的、創造的に思考できる											○		○	○

2) 授業科目

(1) 災害看護学

〔この授業と関連する到達目標〕

・〈3～4年次〉 国内外の国際救援・開発協力活動の組織的な取り組みについて理解している
災害看護学では、上記の到達目標の達成のために、組織的な取り組みについて講義で教授するとともに、演習として「災害救護訓練への参加」、「赤十字国際活動疑似体験ツアーへの参加」を実施している。

「赤十字国際活動疑似体験ツアー」への参加によって、学生は到達目標について、参加した学生全員が達成することができていた。学生は、赤十字の組織図や組織の役割についての説明、実際の組織的な取り組みのシミュレーションやグループワーク、体験談を聴くことなどで、達成できたと評価している。演習の内容が国際活動であるため、この演習においては国外の組織的な取り組みについての理解となった。

今後は、継続して演習を進めていくとともに、国内の救援活動の組織的な取り組みの理解をより深めていけるよう教授することが課題である。



写真64 赤十字国際活動疑似体験ツアー
(大阪赤十字病院で開催)



写真65 災害救護訓練
(平成23年度 広島赤十字・原爆病院で開催)

(2) 国際社会と保健活動

〔この授業と関連する到達目標〕

- ・〈3～4年次〉 赤十字の国際救援・開発協力における看護の役割を理解している
- ・〈3～4年次〉 国内外の国際救援・開発協力活動の組織的な取り組みについて理解している

国際社会と保健活動では、世界の保健医療状況を理解し、グローバルな視点で国際保健活動に関する基本的な知識を理解することを学習目標としている。本講義の中では、開発協力の理念とその変遷、世界の健康問題とミレニアム開発目標、国際活動のさまざまな組織とその役割等を学習する。これらについては、前半講義をしたうえで、後半は自分たちで取り上げたい国を選択して、その国の保健医療体制や健康問題、それに対する対応策について文献等で調べて発表を行っている。そうすることで、主体的な学習にすることと、幅広く世界の保健医療についてのことを学ぶことができるよう工夫した。国際看護学演習（フィリピン）に参加する学生は、東南アジアやフィリピンの子どもや妊産婦の健康について調べたり、国際看護学演習（ジュネーブ）に行く学生は、ミレニアム開発目標の中でターゲットに上げられているアフリカ・南米地域を選択して、演習を実施し学びを深めた。

(3) 国際看護学演習（フィリピン）

〔この授業と関連する到達目標〕

- ・〈3～4年次〉赤十字の国際救援・開発協力における看護の役割を理解している。
- ・〈1～4年次〉赤十字の国際救援・開発協力活動への興味を持ち、自ら学ぶ姿勢を持つ。
- ・〈3～4年次〉国内外の国際救援・開発協力活動の組織的な取り組みについて理解している。

国際看護学演習（フィリピン）は、3年次の「国際社会と保健活動」を受講し、開発途上国の保健事情および地域保健活動に関心を持った学生が参加をした。平成22年度は9名の学生が参加し、平成23年度は11名の学生が参加予定である。この演習は、日本赤十字社とフィリピン赤十字社の二国間支援のもとで日本から二人の看護師がキリノ州支部に派遣をされ、国際地域保健活動を展開している。キリノ州はマニラからさらにバスで10時間行った地域であり、RHU（Rural Health Unit）はあるが、そこにアクセスすることが困難な地域に住む人たちに対して、ヘルスボランティアの育成を行っている。自分たちで自分たちの地域の人々の健康を維持することを目指した活動であり、開発協力の実際を見学させていただく機会がある。現地の小中学校で学生とともに近くの住民を対象してマラリアやデング熱の予防、異常の早期発見のための観察、対処法などを紙芝居により実施し、健康管理の重要性を低学年から教えることの意味を理解することができていた。水道事業を実施した地域では、下痢や発熱などの健康に関する問題が少なくなり、生活の質が向上したことなどを住民に対してインタビューを実際に行うことで理解を深めることができた。ただ、学生は語学力が乏しく、通訳を介してでないとコミュニケーションをとることが難しく、本研修後に語学力をつ



写真66 水道事業の視察



写真67 井戸式の水道事業



写真68 RHUの看護師からの説明



写真69 衛生教育の見学



写真70 フィリピン赤十字社本社で講義



写真71 コミュニティヘルスの講義

けたいという思いを強くしていた。もともとこの研修に参加を希望する学生たちは、海外ということにとらわれず開発協力に関心を持っており、この研修を通して、住民が主体であること、継続可能な支援の必要があることを実感できた。

(4) 総合看護実習

〔この授業と関連する到達目標〕

- ・〈3～4年次〉赤十字の国際救援・開発協力における看護の役割を理解している
- ・〈3～4年次〉国内外の国際救援・開発協力活動の組織的な取り組みについて理解している
- ・〈4年次〉 チーム医療においてより良い看護を提供するために建設的、創造的に思考できる

総合看護実習では、特に国際救援コースの学生のために「目標4) 国際医療救援拠点病院におけるさまざまな国際救援活動の実際について理解を深める。」を新たに追加して、実習を行った。平成22年度は希望の学生7名が大阪赤十字病院と名古屋第二赤十字病院に、平成23年度は国際救援コースの学生16名が大阪赤十字病院、名古屋第二赤十字病院、日本赤十字和歌山医療センター、熊本赤十字病院に受け入れていただいた。国際救援医療拠点病院では、ERUなどを派遣する緊急救援活動をはじめとして、開発協力事業にも多くの派遣者がおられ、実習期間中にそうした活動経験者からの実際の活動を聞き、それぞれの活動の目的や赤十字の役割、看護師の役割、派遣体制、その後のフォロー体制などについて理解を深めていた。また、国際救援に携わる看護師の人材育成計画やその内容なども説明を受けることができ、さらに国際救援看護師になろうというモチベーションをあげることができた学生もいた。平成23年度は、東日本大震災が発生後それぞれの国際医療救援拠点病院がどのような活動をされたのかという国内救援活動の実際についても学んだ。国内外の救援活動を展開する上で、日頃からの備えや教育が重要であり、学生自身はまずは自立した看護師を目指すことが重要であるという認識を持つことができた。

チーム医療においてより良い看護を提供するため、文献や助言を活用して、課題解決のための建設的な方法や対策の検討については、まだ不十分であった。

国際医療救援拠点病院での総合看護実習については、本来の実習目標に到達させるために、次年度からは、オプションとして実施していたERU研修に国際医療救援拠点病院の役割等を含めて「国際看護活動論」として正式な科目とする。



写真72 名古屋第二赤十字病院 イラクから帰国した看護師の出迎え式(1)



写真73 備蓄倉庫



写真74 医療救援部



写真75 海外に持参するグッズ



写真76 災害外傷研修で活用するグッズ

(5) 国際看護学

〔この授業と関連する到達目標〕

- ・〈1、2年次〉文化の多様性を認識し、それぞれの文化を尊重する重要性を理解している
- ・〈1、2年次〉生命の尊厳を尊重する姿勢を持つ
- ・〈4年次〉 既存の理論や概念を用いて、対象の個別性を考慮した適切な看護をできる
- ・〈4年次〉 チーム医療においてより良い看護を提供するために建設的、創造的に思考できる

国際看護学では、グローバルな視点から文化の多様性を認識し尊重できる看護実践をするための基礎となる、異文化理解に関するテーマ、文化と価値観の多様性とヘルスケアに関するテーマを取り上げて、ディスカッションをしながら講義を進めている。また先進諸国の看護事情、特に米国の看護や医療の現状について、講義において概要を理解した後、学生は興味関心のあるテーマについて米国と日本の現状について比較検討し、資料を作成し発表を行っている。ケアリング理論と実践、異文化看護に関する理論や研究報告の文献を積極的に活用し、理論と実践を統合し、自己の実習等での看護実践を振り返りながらテーマについて、複眼的な視点をもって考えを深めている。

今後の課題として、ディスカッションの方法について、プレゼンテーションを行う学生のみでなくクラス全体が、討論の視点をわかりやすく共有し参加しやすいように、ディスカッションのテーマを予め絞って具体的なテーマを提示するなどの工夫も必要であろう。

(6) 国際看護学演習（アメリカ）

〔この授業と関連する到達目標〕

- ・〈1～4年次〉 赤十字の理念と国際人道法について理解している
- ・〈3～4年次〉 赤十字の国際救援・開発協力における看護の役割を理解している
- ・〈1～4年次〉 赤十字の国際救援・開発協力活動への興味を持ち、自ら学ぶ姿勢を持つ
- ・〈1、2年次〉 文化の多様性を認識し、それぞれの文化を尊重する重要性を理解している
- ・〈1、2年次〉 生命の尊厳を尊重する姿勢を持つ
- ・〈4年次〉 既存の理論や概念を用いて、対象の個別性を考慮した適切な看護を提供できる
- ・〈4年次〉 状況に応じて自己の態度を柔軟に変化できる
- ・〈4年次〉 チーム医療においてより良い看護を提供するために建設的、創造的に思考できる

国際看護学演習（アメリカ）では、米国コロラド大学看護学部での講義、大学関連施設での見学、実習および異文化研究を通して、「既存の看護概念、理論および看護現象について異なった文化・風習、環境下で比較検討し、看護の本質を探究する」という学習目的で毎年、8月中旬より2週間の日程で行っている。平成22年度第8回の国際看護学演習より、米国赤十字社の赤十字活動の実際、地域サービス、保健医療者との連携について学ぶ目的で、米国赤十字社デンバー・マイルハイ支局を訪問することをプログラムに加え実施している。学生は、赤十字基本原則に基づき、人道活動を行うことを再認識し、常時、非常時における支援システムについて理解し、国際的な視野から赤十字のネットワークと役割・機能について学習していた。また平成23年度は、デンバー支局での地域活動における看護職ボランティア活動や、昨年3月11日におこった日本での東日本大震災についての米国赤十字社の支援や募金活動等について学ぶ機会を得た。

参加学生は上記の到達目標は概ね達成できていると評価できる。今後は、学生個々の学習状況に

応じて、演習のプログラム全体の機会を利用し、最大限英語を用いてチャレンジできるよう促していくことが課題である。



写真77 米国デンバー市マイルハイ支局
ベットのCPR講義



写真78 災害援助時でのコミュニケーションシステム



写真79 コロラド大学学生と交流



写真80 コロラド大学病院での見学



写真81 コロラド大学病院臨床講義



写真82 ワトソン博士ケアリング理論の講義

(7) 国際看護学演習（ジュネーブ）

〔この授業と関連する到達目標〕

- ・〈1～4年次〉赤十字の理念と国際人道法について理解している
- ・〈3～4年次〉赤十字の国際救援・開発協力における看護の役割を理解している

- ・〈1～4年次〉赤十字の国際救援・開発協力活動への興味を持ち、自ら学ぶ姿勢を持つ
- ・〈3～4年次〉国内外の国際救援・開発協力活動の組織的な取り組みについて理解している
- ・〈4年次〉 状況に応じて自己の態度を柔軟に変化できる

国際看護学実習（ジュネーブ）では、国際赤十字関連機関（ICRC、IFRC、赤十字博物館等）を中心として、赤十字にゆかりのある地域（エマヌエレ2世祈念塔、サンピエトロ教会（納骨堂））や赤十字博物館等を訪問した。イタリアのカステリオーネでは糸杉の丘に行き、スイスのジュネーブではアンリー・デュナンの生まれた家、ソルフェリーノの思い出を出版した印刷所、5人委員会を開催した場所などの歴史的な場所を巡り、当時に思いを巡らしながら説明を受けた。また、平成22年度はICRCおよびIFRCを訪問し、それぞれに活動目的や実際の活動内容、現在の課題などについて担当者より説明を受け、赤十字のあゆみと活動で学んだ知識に加えて実際に現地でグローバルに活動をしている方から直接に講義を受ける機会を持てたことは学生にとっては非常に貴重な経験となった。特に国際人道法については、ICRCの捕虜の人権擁護のための活動を知り、赤十字の基本理念である人道、中立、独立が深く関わっていることを実感できていた。UNHCR等にも訪問し、緊急支援だけではなく開発協力につながる事業を実施していることも理解できた。さらに赤十字以外の国際機関としては、国連、UNHCR、WHO、ICN等も訪問したことにより、それぞれの組織の役割や赤十字との関係を理解することができた。異文化の中で、生活習慣等も異なるイタリアやスイスでの研修には、それぞれの地域や施設で学生はTPOを考えて対応をするよう努力し、毎日21時に実施した振り返り会で、翌日の行動計画を立てながら行動することができていた。



写真83 アンリー・デュナンの足跡をたどる



写真84 アンリー・デュナンの生家



写真85 WHOの交流会(1)



写真86 WHOの講義



写真87 糸杉の丘



写真88 国際赤十字博物館（ジュネーブ）



写真89 カステリオーネの赤十字博物館



写真90 IFRCの研修

V 評価について

1. 取組の概要

評価班では、救援看護師に求められる4つの能力を、学生にどのように付けて行くか、教科担当者と協議しながらカリキュラム・マップにまとめ、評価方法、評価基準を作成した。その作成過程で、形成評価委員会、第三者評価委員会に諮り完成させた。また、完成したカリキュラム・マップを使用し、学生が習得した能力を評価した。さらには、本事業の意義、カリキュラム編成の妥当性、教育環境等について、学生及び評価委員会委員にアンケートを実施し、事業の評価を行った。

1) 教育プログラムを俯瞰するカリキュラム・マップの作成

評価班ではまず、救援看護師に求められる能力を4つのフィールドに整理し、教育プログラムの作成を行った。そのプログラムの全体は、以下に述べる通り個々の能力の育成と各科目における教育を関連付けたカリキュラム・マップとして具体化した。

国際救援看護師に求められる能力の4つのフィールドとは次の通りである。

- (1) 異文化コミュニケーション能力
- (2) 課題探求能力・創造性
- (3) 国際救援時における状況判断能力・問題解決能力
- (4) 国際救援時に必要な基礎的看護実践能力

4つのフィールドのなかには、「国際救援コース成績通知表」(資料3)に示すとおり卒業時の到達目標を8つ掲げた。そして、それぞれ救援コースに特化した14科目の特徴に合わせて、学年及び科目ごとの下位目標を細分化し、14科目のどの科目で評価するか○印で表わした。

4つの能力と8つの卒業時の到達目標は以下に示す通りである(下位目標は資料3を参照)。

- (1) 異文化コミュニケーション能力
 - ①英語力を活用して、積極的に異文化の人々とコミュニケーションできる。
- (2) 課題探求能力・創造性
 - ②赤十字の理念のもと、被災地等の救援先において、公平・中立に判断できる必要性を理解する。
 - ③赤十字の国際救援に積極的に参加する意思を持ち続け、自己の能力開発を高める姿勢を身につける。
 - ④国際的視野をもち、必要に応じて現状を改善、改革するための創造的思考力を身につける。
- (3) 国際救援時における状況判断能力・問題解決能力
 - ⑤国内外の救援活動において、限りある資源を活用して、看護の必要性や実行可能な活動を判断する能力を身につける。
 - ⑥他者を救援するために、不可欠である自己の判断・行動に責任をもち、心身の自己管理ができる。
- (4) 国際救援時に必要な基礎的看護実践能力
 - ⑦赤十字の理念と国際人道法に基づく、赤十字の国際救援における看護の役割を理解する。
 - ⑧文化の多様性を認識し、それぞれの国の文化を尊重する重要性を認識する。

2) 評価方法と評価基準の作成

次に、救援看護師に求められる看護実践能力の評価方法と評価基準について、評価班で検討し、全体会議、形成評価委員会に諮り次のように決定した。

(1) 評価方法

目標達成度の評価は、科目ごとのルーブリック (Rubric) を作成した。評価方法は科目により異なるが、特徴的なものは、語学系科目におけるTOEIC、英語ポートフォリオ、災害看護学のSP (模擬患者) を活用したトリアージ訓練をOSCE (客観的臨床能力試験) により行うなどである。また、卒業研究においても、国際医療救援拠点病院での実習を通して救援活動に関する論文を作成し評価するなど、科目ごとに多面的に評価した。

(2) 評価基準

細分化された目標は、次の4段階の評価基準で授業科目ごとに評価した。

非常に優れている：3点。優れている：2点。基準に達している：1点。未到達である：0点。従って、評価点1以上は当該学年の基準に達している。

学生への成績通知表は、カリキュラム・マップを活用し、そこにフィールドごとに算出したAPA (Achievement Point Average) を加えたものを作成した。これにより学生自らが学習状況を把握し、学習の動機付けを高めることを意図した。GPA (Grade Point Average) は科目の評価であるLetter Gradeをポイントに換算する際に用いられている。この表は科目の評価ではなく、救援コースの到達目標の達成度 (Achievement) を示すものであるために、GPAとの混用を避け、APAとの表記を用いている。

2. 目指す能力から見た評価

救援コースが目指す4つの能力に対して、学生が実際に獲得した能力を評価した結果は、「国際救援コース成績通知表 (評価結果)」(資料4) に示す通りで、本事業に取り組んだ年に入学した学生が、3年間本カリキュラムに基づいた教育を受け獲得した能力の平均値を示したものである。

評価結果は、いずれも1以上で、各学年の基準をクリアしている。しかし、異文化コミュニケーションの下位目標の達成度を見てみると、2年次の「TOEIC 400点以上を獲得する」は、平均0.9と基準以下である。この下位目標に対する個別の学生評価は、25人中13人が基準に達していない (0点)。しかし、「英語を用いて異文化の人々と積極的にコミュニケーションする」や、「多様な価値観を理解する」は基準をクリアしているため、異文化コミュニケーション能力のAPAは1.8と基準に達している。

3. 本事業に対する学生の評価

国際救援コースの学生1～4年生88人に対し本事業に対するアンケート調査を行った結果、41人 (46.6%) の学生から回答があった。

学生が国際救援コースを選択した理由は、「以前から国際救援や海外で働くことに興味・関心があり、将来海外で救援活動をしたい」、「得意な英語を活用し看護に貢献したい」、「視野を広げたい」、「英語力を伸ばしたい」等、積極的な理由からである。

1) 救援コースの看護師に求められる4つの能力

救援コースの看護師に求められる4つの能力の認知度を質問した結果は、図1の通りで、「大体知っていた」を含め、異文化コミュニケーション（92.6%）、国際救援時に必要な基礎的看護実践能力（82.9%）、状況判断能力・問題解決能力（80.4%）は80%以上であったが、課題探求能力・創造性は48.8%であった。

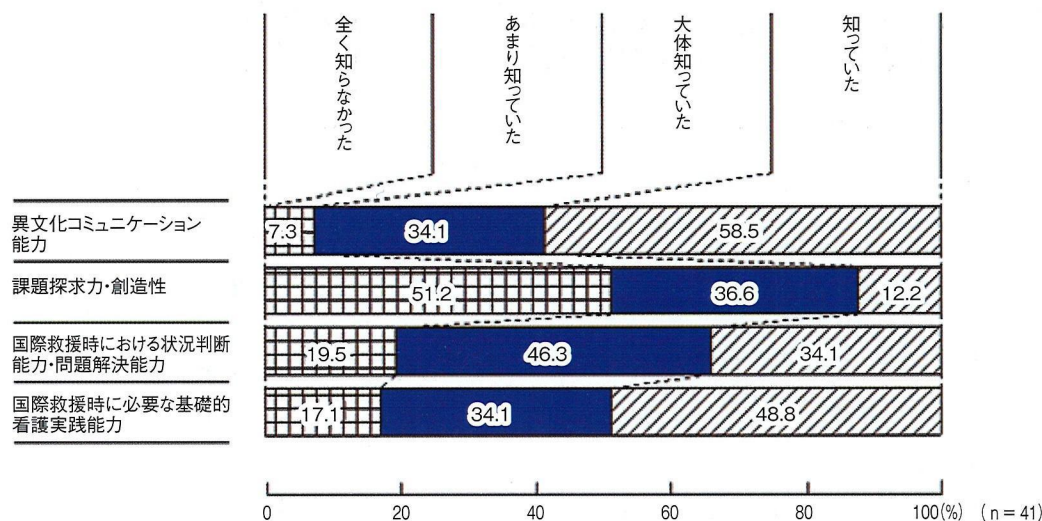


図5 救援コース看護師に求められる4つの能力の認知度

2) 授業や演習の参加について

授業や演習の参加について質問した結果は図6の通りで、65.9%は与えられた機会を活用し、夢の実現やモチベーションの維持のため、積極的に参加したと答えている。

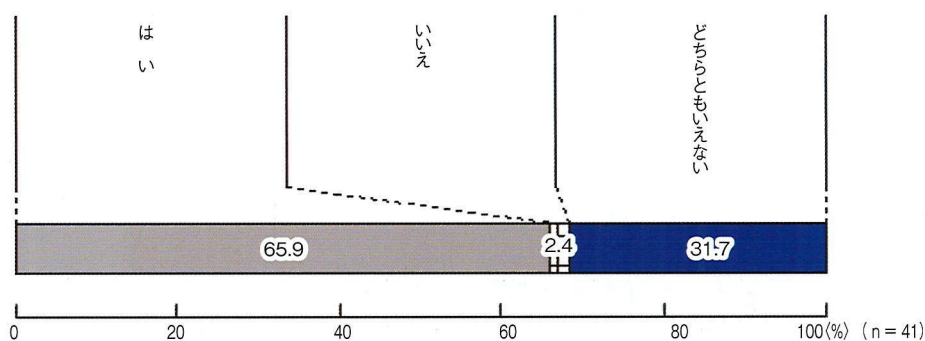


図6 授業・演習の参加

3) 大学の機器を活用した学生の主体的学習

(1) 語学学習センターの活用

語学学習センターについて、65.9%の学生は利用したと答えている。

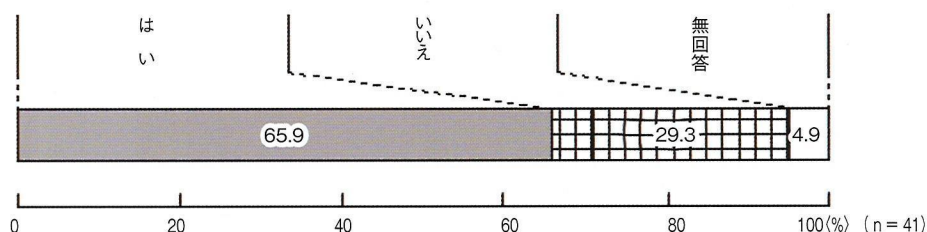


図7 語学学習センターの活用

語学学習センターの利用頻度は、週1回程利用している学生が55.6%と最も多く、月1回程程度の利用が25.9%と続いている。

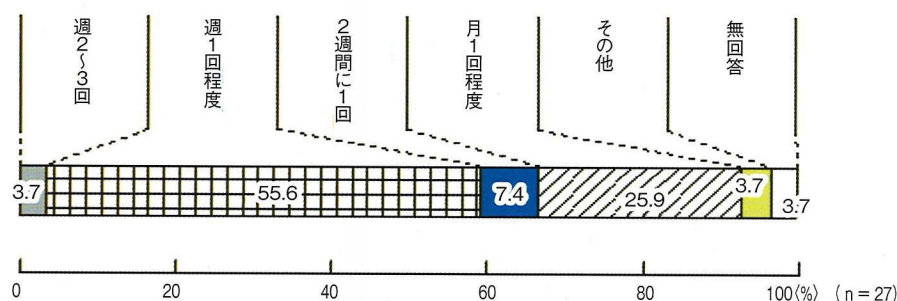


図8 語学学習センターの利用頻度

(2) アルクネットアカデミーやiPodの活用

アルクネットアカデミーやiPod活用によるリスニングやリーディング学習をしている学生は、図5の通りで78%・約8割の学生が活用している。

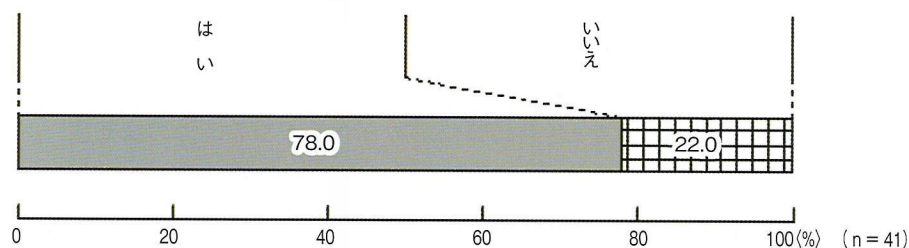


図9 アルクネットアカデミーやiPodの活用

アルクネットアカデミーやiPodの使用頻度は図10に示すとおりで、月1～2回が37.5%と最も多く、週1回以上28.1%、週3回以上15.6%と続いている。

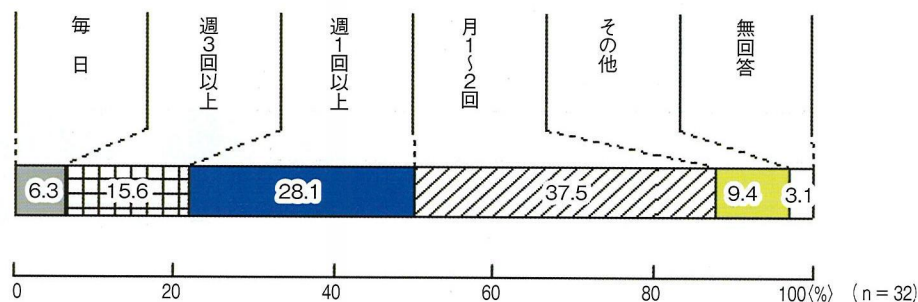


図10 アルクネットアカデミーやiPodの使用頻度

4) 救援コースに特化した授業科目に対する学生の評価

図7は1年次開講科目について1～3年生に質問したものである。熊本ERU研修は91.4%の学生が救援ナースに求められる能力育成に役に立ったと述べ、基礎ゼミは88.6%、英語1も約8割の学生が役に立ったと述べている。

図8は2年次開講科目について2～4年の学生に質問した結果である。看護英語については、83.9%の学生が役立ったと答えており、英語Ⅱ64.6%、ヒューマン・ケアリング特論61.3%、英語Ⅲ58.1%であった。

図14は4年次開講科目について質問したものである。国際看護学は100%、卒業研究、災害看護学、避難所疑似体験学習、災害看護学OSCEは83.4%の学生が役に立ったと述べている。国際医療活動疑似体験ツアー（大阪赤十字病院）とアメリカ研修は、履修しない学生も多いが、履修した学生は役に立ったと述べている。

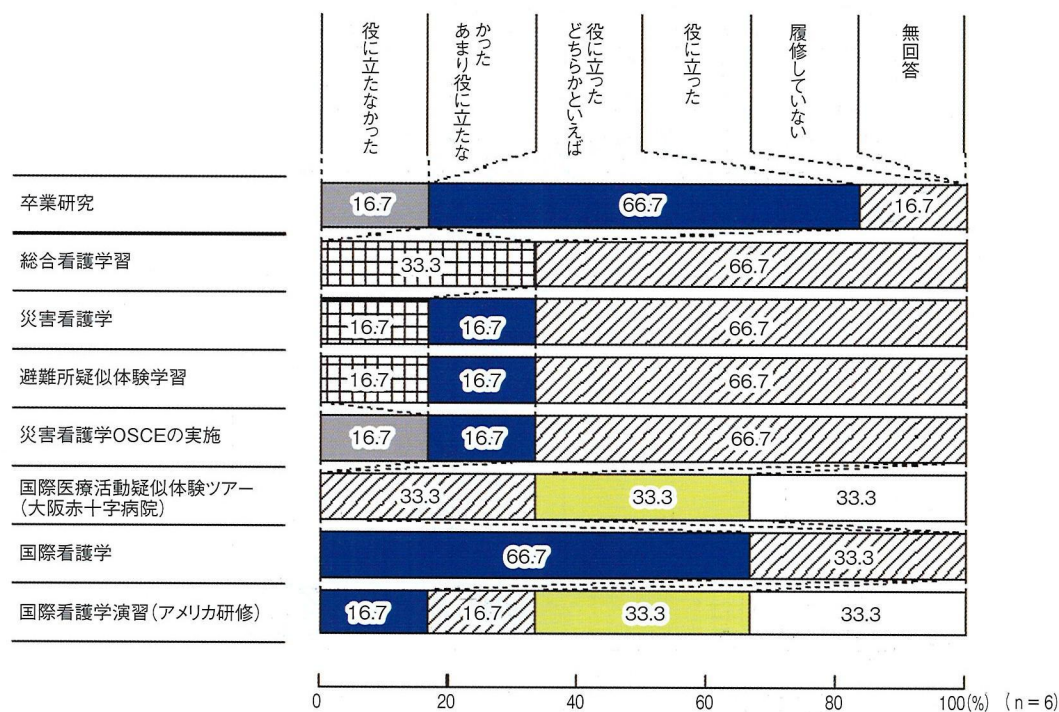


図14 授業科目に対する学生の評価 4

救援コースを受講した学生たちが、具体的にどのようなことを学んだかについて自由記載を見ると、「高い英語力の必要性」を多くの学生が述べている。また、「文化や宗教の違いを理解して係ることの大切さ」、「異文化コミュニケーションの素晴らしさ」、「コミュニケーション能力の重要性や創造性」、「看護技術・経験の大切さ」、「広く世界に目を向け病院以外の世界も知りたいと思うようになった」等、多くの学びを得ている。

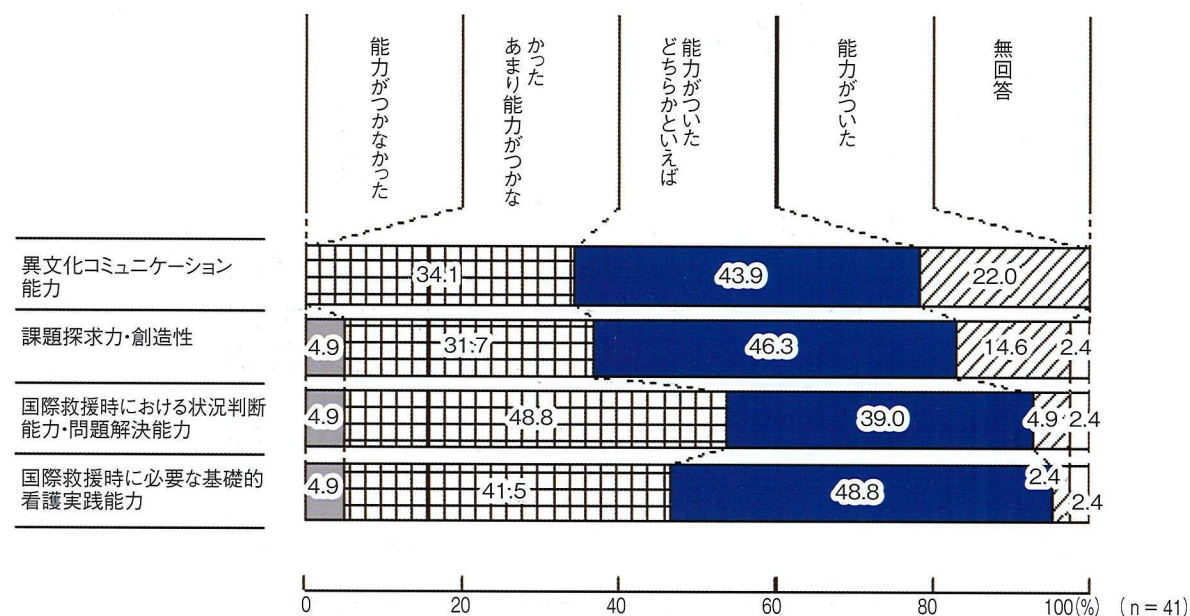


図15 国際救援ナースに求められる能力

5) 救援ナースに期待される能力について

救援コースで4つの能力が育まれたかとの質問に対し、学生の回答は、図15の通りである。異文化コミュニケーション能力65.9%、課題探究能力・創造性60.9%、国際救援時に必要な基礎的看護実践力51.2%、国際救援時における状況判断能力・問題解決能力43.9%となっている。全学生に質問した結果であり、妥当な回答と思われる。

6) 学生が行った具体的努力

次に、4つの能力を獲得するため、学生が行った具体的努力は次の通りである。

(1) 異文化コミュニケーション能力を獲得するため

複数の学生は、iPodやアルクネットアカデミーで英語を学び、授業で積極的に発言した。英語のレポートを書き・TOEICを定期的に受験した。夏休みに看護英語を学んだ。外国人（教員を含む）と積極的に話をした。国際イベントにボランティア参加など国際交流をした。

(2) 課題探究能力・創造性を獲得するため

学生は次のような努力を行った。ERU研修に参加した。基礎ゼミで目標を立て、どうするか考えた。ランチョンセミナーに参加し、救援に出かけた人の体験を聞いた。積極的に海外ニュースを読んだ。グループワークで世界の課題を積極的に考えた。救援ナースに何が必要か、常に考え、目標に向かって努力した。国際保健活動でのプレゼンテーションを積極的に行った。1つの出来事を深く考え、理解できるまで調べたなどである。

(3) 国際救援時の状況判断力・問題解決力を獲得するため

学生は自分の考えを言語化して、述べるよう努力した。ERU研修に参加し、チームワークを学び、チームでどうするか決めた。普段の生活の中で努力した。実習で、看護問題の抽出時、優先順位を考えて行った。グループワークを通じ看護師に求められることを判断し、発表した。ERU研修に参加し、常に考えた。授業や演習に積極的に参加し、災害OSCEで高い能力を持った人の動きを見て学んだ。文化や宗教の違いを学び、固定観念をなくす努力をしようと思った。さまざまなボランティア活動に参加した。

(4) 国際救援に必要な基礎的看護実践力を獲得するため

学生はERU研修で次のことを学んだ。講義・演習・技術演習に積極的に取り組んだ。グループワークを通じ、必要な基礎的看護学実践能力について考えることが出来た。ランチョンセミナーで、多くの経験を聞き考察するようにした。OSCEや実習で考えたり獲得できるようにした。アメリカやジュネーブなど諸外国と日本の看護・医療を比較し学んだ。トリアージ演習で、短時間に何を優先し、患者の不安をどう軽減するか友人同士で練習し取り組んだ。特に総合看護実習で、看護師として必要な人間性や技術、知識を学ぶことが出来、英語や看護の学習をした。

4. 外部評価

1) 形成評価

形成評価は、5人の学外有識者で構成する形成評価委員会を設け、卒業時までには習得すべき看護実践力、活動内容と体制、課題等について審議し評価を得た。

形成評価委員会は、平成21年度に1回、平成22年・23年度に各2回、合計5回開催した。その中

で、教育プログラムを俯瞰するカリキュラム・マップを基に救済看護師に求められる4つの能力、評価方法、評価基準及び評価結果について報告し、活発な意見・評価を得た。形成評価委員から寄せられた意見は次の通りである。

(1)「本プログラムを実施したことは、救済ナースとして求められる能力の育成に役立つと思うか」については、①異文化コミュニケーション能力②課題探究能力・創造性については、全委員が、「役立つ」、「どちらかといえば役立つ」と答えているが、③状況判断能力・問題解決能力、④基礎的看護実践能力については、「あまり役に立たない」と答えた委員もいた。それぞれの理由として次の点が述べられた。

- ・語学の修得はコミュニケーションツールとして重要だが、単に語学力の向上を目指すのではなく、語学の勉強を通し異文化を学ぶのは意義がある。いずれの能力も、本プログラムだけではなく、他の科目と関連し合いながら向上していくものと考ええる。
- ・国際救済等の状況判断や基礎的看護実践能力が、基礎的な看護に必要な判断力、看護実践能力に上乗せしてついているとは考えにくい。
- ・4つの能力の育成にあたって、座学に限定しない教育方法を選択している点は良い。しかし、国際医療救済拠点病院の実習やトリアージ訓練では、リアルな現場に触れる事はできない。また、米国、スイスの演習は見学にとどまる事が予想される。

(2) 特化した14の授業科目の内容について、次のような意見が寄せられた。

- ・救済ナースの育成は、このコースのみでできるものではない、学生に救済コース・救済コース以外の両方のねらいと、それらがどのように関連し合い、統合されて貴大学が目指す救済コースになってほしいか、シラバスだけでなく説明する必要がある。
- ・海外研修が非常に多い。特にジュネーブ研修は、お金をかけていく価値があるのか、コストパフォーマンスを考えると疑問である。その他は意味や価値は十分にある。
- ・救済の場は発展途上国が予想されることから、1年生から国際開発論・国際関係論を、2年生から文化人類学などを入れ込めば、異文化コミュニケーションが単なる英語科目にならず、ベースになると思われる。

(3) 救済コースの教育方法について次のような意見が寄せられた。

- ・救済の現場では、語学テストの点数が高くても、自分の考えを発信できなければ活動できない。テーマに沿ってプレゼンテーションすることで、どのような文献に当たればいいのか学習の深め方を学ぶ事ができる、プレゼンテーション後のディスカッションを少人数から始め、意見を述べる機会を多く作ると良い。日本語で考えを述べる事ができなければ、英語ではもっと難しい。救済コース以外の授業でもディスカッションの機会を多く持つてほしい。
- ・講義よりはゼミ形式が望ましい。ゼミよりは実習がさらに望ましい。

(4) 評価について

- ・TOEICテスト：全委員が、語学力が客観的に評価でき、良いと回答している。ただし、点数と実際のコミュニケーション能力はイコールではない。目標点数に到達するのが難しいようだが、学習を継続してERU研修やIMPACTなど受講できるレベルになってほしいとの意見もあった。
- ・ポートフォリオ：自分の学習内容・進度が把握できる。
- ・ルーブリック評価：授業内容のどの部分が目標達成できていて、どの部分に課題が残っているの

か、細かく把握することができる。

- ・ OSCE：災害看護の訓練では客観的な評価がしやすかったと思う。授業目的・内容に適した評価方法の選択は重要である。

(5) 特化した14科目の授業の進め方について

- ・ 妥当だと思う。
- ・ 学生の反応から、学習に余裕がない状況になっているのが気になる。
- ・ 1年次から4年次まで、本コースの興味、関心を持続させるためには、入学時よりそれを意識させる科目を入れ込んだ方がよい。1年次でフィールド体験させる。

(6) 特化した授業科目の順序性について

- ・ 順序性はいい。関連する他の科目との整合性があれば良い。
- ・ フィリピン研修とジュネーブ研修は逆の方が望ましいのでは？
- ・ 海外スタディーツアーに関して、(1年次・2年次)ー広く体験の為の米国見学、またはJICAなどの国際協力フィールド。3年次ーPHC、フィールド実習。4年次ー救援現場実習、慢性期以降がよいと思われる。

(7) 国際救援コース修了学生に資格を与えることについては反対という意見であった。その理由として次の意見が寄せられた。

- ・ 救援コースは、海外で活動できるナースの芽が芽生え、今後の成長が期待できるものと考えてるが、ナースになってからの成長が非常に重要であり、日赤のキャリアラダーの枠組みからも資格付与は難しいと考える。
- ・ 看護実践能力が無い時点で、資格だけ与えることに意味が感じられない。
- ・ 資格とはそれがあると自律して行動できると想定される。しかし、実動のための準備としては資格試験の設定が必要である。

2) 第三者評価

第三者評価は5人の学外有識者で構成する第三者評価委員会を設け、年1回合計3回の委員会を開催し、取組み事業活動全体、事業内容及び企画、発展のための改善点について評価を得た。第三者評価委員から寄せられた意見は次の通りである。

(1) 本プログラム実施の意義について、全委員が、「意義がある」または「おおむね意義がある」と回答している。その理由は以下の通りである。

- ・ 将来的に自然災害、紛争、平時でも保健衛生の状態が劣悪な中でニーズに応える看護師を育成するための下地づくりとして意義がある。
- ・ グローバル化時代に外に目を向ける点で、多様なチャンネルが必要でその一つになる。
- ・ グローバル社会の中で、国際的に活動できるナースの育成は必須である。また国際活動を行う赤十字にとっても重要である。救援コースを選択した学生にとっては意義がある。
- ・ 看護師の活躍できるフィールドの広さに目を向け、国際社会での活動を動機づけることができる。

(2) グローバリゼーションの時代に、本学が国際救援・開発協力看護師育成を実施することの意味について、次の通り回答があった。

- ・ 赤十字の人的資源として意味がある。

- ・学部教育での成果は本格的になり得ない、何を求めるのか明確にする必要がある。
- ・地球規模で災害が頻発、拡大している状況で、国際的な相互支援が求められている赤十字の活動ができる人材の育成として意味がある。
- ・地球温暖化による自然災害や紛争は増えている。また、教育や保健の基盤が弱い貧しい国も多いので支援が必要である。
- ・日本は国際社会の中で果たすべき役割があるが、それを担う人材の素地を築くことは大変意味がある。

(3) 本学が国際救援・開発協力看護師育成を実施することの成果について、次の通り回答があった。

- ・10年、20年後に発現すれば良い。
- ・学部における実施は、中途半端になる。
- ・国際救援の基礎能力を付けた学生が卒業することによって目的を定めて、今後の教育につなげることが出来る。国際救援に関心を持ち、国際救援活動に関われる人が増える。
- ・成果としては、このコースを修了した学生が、将来国際救援や開発プログラムに派遣される人材となることである。
- ・国際社会で活躍できる人材を増やし、すそ野を広げるために役立っている。

(4) 特化した14科目のカリキュラムの編成の妥当性については、「あまり妥当でない」とNAも1名ずつあった。

- ・語学は3年4年でも継続した方が良い。特にビジネスレター、Eメールの書き方なども必要である。国際保健の様々な資料（WHOやIFRCなど）にも慣れておくとよい。
- ・国際社会と保健活動に含まれているかもしれないが、国際看護学（健康問題の日米比較）は、開発途上国の健康問題の内容が必要と考える。
- ・国際看護学演習の場所は、フィリピンともう1カ国は開発途上国がよいと思う。
- ・“救援”コースとしてはおおむね妥当だが、開発協力看護師育成も目指しているのであれば、そのための科目があまりなくその点ではあまり妥当ではない。

(5) 国際救援コース修了学生に資格を与えることについては、「コース修了証を大学協議会や赤十字社からの公認を受け、大学から出しては」との意見が多かった。また、資格を付与するとなると、学部レベルでは疑問視する意見もあった。

- ・地域や日赤の内外に向け、貴学学科のFlagshipとしてさらなる躍進を期待している。
- ・国際的に活躍できる人材育成に期待する。
- ・国内での災害救護活動についても理解が必要である。また普段から国内の社会情勢について知っておく事も必要である。新聞を読まない人が多くなっている。
- ・日本赤十字の枠にこだわらず、プログラムを追及すると共に、片方が優位な救援という言葉より対等な関係を示唆する協力という言葉を用いてはどうか。

以上のように、今回のプログラムについて高い評価が得られた。

5. 今後の課題と展望

- 1) 平成24年度から、本学の国際救援・開発協力看護師コースがスタートするが、今回の評価を踏まえて、特化した14科目のカリキュラム編成の妥当性については、今後引き続き検討し、修正して行く必要があるだろう。
- 2) 国際救援ナースにとって、英語の語学力は必須要件であるが、今回の評価結果でTOEICの目標値に達しない学生がかなりあることから、国際救援・開発協力看護師コースを選択する学生の英語力の向上が今後の課題と言えよう。

Ⅵ 広報について

本事業の広報活動の目的は、本事業の目的や内容を広く周知し、看護教育のあり方について新しい視点を提供することである。具体的には、リフレットやパンフレットの作成と配布、大学教育改革プログラム合同フォーラムでのポスター展示、本学内に救援コースの常設展示などに取り組んだ。

1. 3年間の取組

1) 平成21年度版リフレットの作成

大学教育推進プログラムにおける「海外で活躍する救援看護師としての基礎的能力を有する看護師を育成」するための救援コースの開設に伴い、在学生および新入生、保護者への周知および対外的な広報を目的として、3つ折りのリフレットを1,000部作成した（図16）。しかし、オープンキャンパスでの配布等により当初を上回る枚数が必要となったため、学内で追加印刷を行った。なお、対外的には全国の看護関連大学、赤十字社関連、高校関連、実習関連の臨床病院等にもリフレットを配布した。



図16 平成21年度版 リフレット

2) 平成22年度版パンフレットの作成

平成22年度は、世界にはばたく救援ナースに求められる基礎的能力を強化する教育プログラムにおける実践報告を中心にしたパンフレットを10,000部作成した。

前年度の配布状況に鑑み大幅に作成部数を増やし、本年度も積極的に対外的にパンフレットを配布するとともに、学内においては学生支援推進プログラムの進捗状況を広報するために教員・職員・学生全員に配布した（図17）。



図17 平成22年度版 パンフレット

3) 大学教育改革プログラム合同フォーラムでのポスター展示

平成23年1月24日・25日に開催された、合同フォーラムにおいてポスター展示（図18）を行った。ブースを訪れた方からは、「赤十字」の特徴を生かし、他大学との差異を図れるプログラムであることに関心が集まり、意見の交換が活発に行われた。

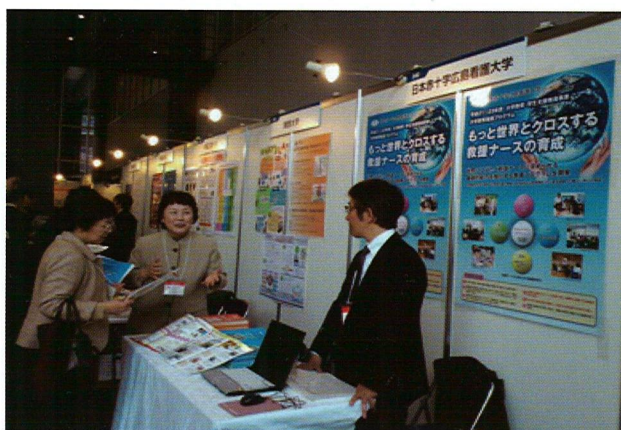


写真91 平成22年度合同フォーラム会場（1）



写真92 平成22年度合同フォーラム会場（2）



図18 平成22年度合同フォーラムポスター展示



写真93 平成22年度合同フォーラム会場(3)

4) 平成23年度版パンフレットの作成

大学教育推進プログラムの最終年度にむけて、救援コースによって育成された4つの能力、①異文化コミュニケーション能力、②状況判断能力・問題解決能力、③課題探求能力・創造性、④国際救援時に必要な看護実践能力が、将来どのように国内救援、国際救援・開発協力に繋がるのかを加味したパンフレットの作成が必要であった。

さらに今年度は、これまでの2年間の活動の具体化と平成24年度カリキュラムに反映された「国際救援・開発協力看護師コース（救援看護師コース）」を良く理解されるようなパンフレットの作成に取り組んだ。

本年度も積極的に対外的にパンフレットを配布し、今後も日本赤十字広島看護大学らしい大学教育の有様を全国の高校・大学に広報していく資料として活用する。

また、学内に対しては学生支援推進プログラムの進捗状況を広報するために教員・職員・学生全員に配布した（図19）。

5) 救援コースの常設展示

本事業の目的や内容を広く周知し、看護教育のあり方について新しい視点を提供するために、救援看護師コース改革プログラムの紹介・合同フォーラムでのポスター展示など、本学内に救援コースの常設展示に取り組んだ（図20）。

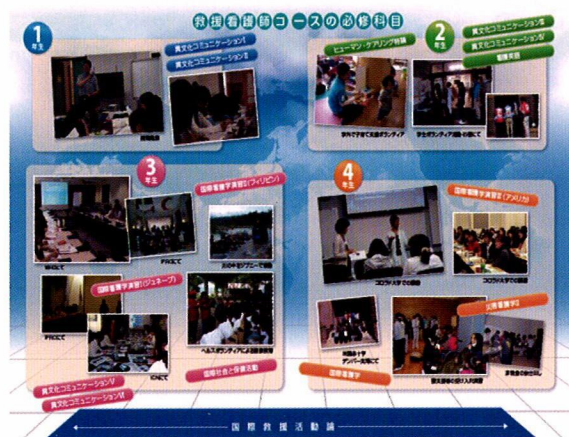


図19 平成23年度版 パンフレット



図20 救援コース常設展示室

Ⅶ 今後の展望

1. 国際救援・開発協力看護師コースの開設

本学において、学部教育課程は、平成24年度から新カリキュラムとなり、保健師教育課程は選択制となる。

平成21～23年度にわたるテーマAのプログラムの実施・評価に基づき、救援コースのための必修科目を設定し、看護師教育課程126単位に加え134単位を履修とした。

語学では、必修科目「総合英語Ⅰ～Ⅳ」計4単位の履修に加え、「異文化コミュニケーションⅠ～Ⅵ」計7単位を設定し、10単位の履修を卒業要件とした。また、「国際救援活動論」1単位は、1年次から4年次にわたる通年の演習科目とし、主にERU研修など臨床の場での学習を単位化した。

「国際看護演習Ⅰ～Ⅲ」（各2単位）は、ジュネーブ、フィリピン、アメリカとそれぞれ研修先別の科目とし、学生はいずれか1科目を必ず履修することを推奨する。

災害看護学は、学部生全員が履修する「災害看護学Ⅰ」1単位に加え、救援コースのための「災害看護学Ⅱ」2単位を編成した。「災害看護学Ⅱ」では、「国際医療救援疑似体験ツアー」、「避難所疑似体験」の演習を行う。

なお、「ヒューマン・ケアリング特論」、「看護英語」、「国際看護学」、「国際看護学演習」は、教育内容や方法を洗練化しながら継続して行う。

救援コースの学生は、平成24年度入学生のうち履修希望者を募り、学内選抜を行うこととなった。そこで、平成24年1月12日に、経営会議において『日本赤十字広島看護大学看護学部看護学科における「国際救援・開発協力看護師コース」履修希望者に対する学内選抜の実施要領』を決定した。さらに、平成24年1月18日開催の教授会では、「平成24年度国際救援・開発協力看護師コースを希望する者に対して実施する学内選抜について」を決定した。

本学に入学の意思表示し、かつ、国際救援・開発協力を携わる看護師として、活動することを希望している者を募集し、定員20名として学内選抜を行う。選抜方法は、書類審査、面接審査及び小論文審査を実施する。学内選抜では、学内選抜委員会を設置し、委員会の構成を学部長、学長が指名する教員3名の計4名として評価を行う。

学内選抜の内容は、救援コースを選択する動機、基礎的な英語能力や論理的な思考能力などを審査する。

選抜内容、方法は、次の通りである。

(1) 書類審査

①救援コース履修申込書

氏名・住所・連絡先・海外留学等の海外における経験の有無を記述する。

②レポート

救援コースを希望する理由及び自己PRを記載した、日本語800文字以内のレポートを提出する。

③個人調査：高校時の成績表（英語）、英検合格書、TOEIC公式認定書のいずれか一つを提出する。

(2) 面接審査：学内選抜委員が英語による面接審査を行う。

(3) 小論文審査：英語による200～250ワードのレポートを作成する。

2. 災害看護専門看護師コースの創設

1) 学部における災害看護教育

もともと、赤十字という組織は、救護看護師の育成のために医療機関を開設した経緯があるように、災害時に救援活動の展開できる人材育成を重視してきた歴史的な背景がある。さらに本学は、平成12年開学以来、学部教育の中で、災害看護学を教授してきた。広島県支部や赤十字関連施設との連携により、災害訓練等についても実施し、6割が赤十字関係の医療機関に就職している中、医療救護班で活動し、さらに国際救援活動に参加をしている卒業生もいる。こうした国際救援活動に参加している看護師の姿を見て、本学に入学を希望する学生も多い。昨今の国内外の災害の頻発により、平成21年度より看護基礎教育指定規則の改正カリキュラムに災害看護が導入され、これまでに以上に災害看護教育内容の充実とともに災害看護学を教育できる教員の人材育成が緊急の課題となった。改正カリキュラムにおける災害看護の分野では、災害直後から支援できる看護の基礎的知識を理解することと定義されている。災害看護実践と教育活動実践双方を経験している人材が不足し、教授内容は各教育機関において格差があるのが現状である。

また、平成21年～23年の3年間、文部科学省から「もっと世界とクロスする救援ナースの育成」の採択を受け、全学的な取り組みの中で災害看護および国際看護に関する実践と教育・研究活動を展開してきた。具体的には、本コースのカリキュラムは、国際救援・開発協力看護師コースの教育目標に対応して現行カリキュラムの中から14科目を選択し、国際救援・開発協力看護師基礎コースで求められる能力を明らかにし、学習を開始した。

2011年3月11日に発生した東日本大震災の被災地では、多くの看護職が医療現場だけでなく避難所、福祉避難所、仮設住宅地域などにおいて、災害発生直後から活動を開始し、今後の中長期的な関わりを含め、広い範囲で活動を展開している。日本赤十字社では、発生後から9月30日までに896医療救護班が出動し、また日本看護協会では、災害支援ナース914名（延べ3,674人）を派遣している。その他の医療機関や組織でも多くの看護職を現場に派遣している。今回の震災は、かつてない規模であり被害地域が広範囲にわたり、原発事故も重なり、復旧・復興については中長期的支援が必要である。看護職は被災者の健康と生活を護り復興に向かうための持続的な支援活動の中で、災害サイクルや活動現場等の状況、そして被災者特性に応じた様々な役割を担っている。このような役割を果たすためには、実践、コンサルテーション、コーディネート（連携）、教育、研究の分野において、高度な災害看護の能力を有する人材育成が火急の課題である。また災害現場対応の専門家だけでなく、防災・減災の視点から病院防災、地域防災の現場においても看護専門職としての指導的立場の人材育成が必要である。

こうした社会のニーズにこたえるためにも、災害看護の修士課程を平成24年度より創設することとなった。このコースは専門看護師コースとして、兵庫県立大学、日本赤十字看護大学と本学の3大学で災害看護の専門看護師教育課程としての検討を重ねてきた。本学としては、赤十字のネットワークや人的資源を活用し、国内外で活動できる災害看護の専門家を育成したいと考えている。

2) 大学院における災害看護学の教育内容

本学の修士課程を修了するために必要な修得単位数は下記の科目群において所定の単位を選択し、総計32単位以上を修得する。

共通基礎科目 4科目 8単位以上を選択
 共通専門科目 2科目 4単位以上
 領域別専門科目 6科目 12単位以上
 特別研究 2科目 8単位以上

〈ねらい〉

赤十字の基本理念に基づき、国内外の災害に対応できる高度な看護実践を行うことができ、また状況に応じたリーダーシップを発揮し、かつ、災害看護教育・実践活動を積極的に行うことができ、災害看護領域における問題関心を研究的にまとめることができる能力を修得する。

表5 災害看護専門看護師の授業科目と講義概要

科 目 名	講 義 概 要
災害看護学特論Ⅰ (災害サイクルと看護活動・支援優先度の高い人の健康ニーズと看護介入)	さまざまな災害の災害各期の症状アセスメント、対象者別の治療ケアに対する基本的な知識を理解し、災害時に看護専門職として活用できる知識と技術について理解を深めることを目的とする。大規模災害における災害サイクルの各期の特徴とその時間軸にそって行う看護活動や、災害時に支援ニーズの高い対象が持つ健康ニーズとその看護介入について、これまでの災害について文献を用いて討議する。
災害看護学特論Ⅱ (災害救援・開発協力・人道支援)	国際赤十字や国連機関、また他の人道団体が実施する国際的人道・救援活動について理解を深めるとともに、救援現場で救援の方法や組織的枠組み全体を捉える能力を得ることを目的とする。グローバルヘルス、コミュニティヘルス、プライマリーヘルス、ヘルスプロモーション、国際人道法等について基本的理解を活動経験者から、また文献を参考に理解を深め人道支援のあり方を討議する。
災害看護学特論Ⅲ (PCM)	PCM手法は、開発援助プロジェクトの計画・実施・評価という一連のサイクルを「プロジェクト・デザイン・マトリックス (PDM)」と呼ばれるプロジェクト概要表を用いて管理運営する方法である。事例展開をしながら、その方法を修得する。
災害看護学特論Ⅳ (災害看護教育) (災害看護教育の実態と教育方法)	国内外の災害看護教育の歴史を文献検討し、災害時における看護教育の実態を理解する。さらに、今後災害看護教育の専門家として、さまざまな教育方法を理解し実践することを目標に、地域住民や看護基礎教育における災害への備えの重要性について検討する。
災害看護学特論Ⅴ (災害時における危機管理)	災害発生時にはその規模によって異なるが、保健医療福祉機関は、入院・入所中の患者などの安全管理のみならず、被災者の救援のための対応が不可欠である。その対応には、被災地の内外及び被災地の行政機関や関連施設との協働連携が重要である。それらの認識の元に、災害時の危機管理について理解を深め、実践が出来ることを目標に、国内外の関連文献を参考に討議する。
災 害 看 護 演 習	赤十字救急法指導員講習受講をととして、赤十字の理念と使命を具現化し実践するための赤十字の救急法に関する十分な知識と技術の指導方法を学び、さらにはボランティア育成や防災意識の普及を実践する能力を修得する。
実 習	災害看護活動のさまざまな現場（災害基幹・拠点病院あるいは国際医療救援拠点病院等、被災地における地域保健活動現場である避難所や仮設住宅地区等）において必要な知識や技術を用いて、災害看護活動への参加を意図的にすることにより、災害看護の専門家としての役割と機能について実践を通して評価をする。
課 題 研 究	実践活動の中で見出した災害看護領域における問題関心を研究的（事例報告あるいは論文）にまとめる能力を修得する。

3. 今後の展望と課題

平成21～23年度のテーマAの教育事業の取組みを終えて、平成24年度の入学生から救援コースを履修する学生を選抜し、救援コースを開始することとなった。

今後の展望と課題について、次の4点を述べる。

1) 救援コースの教育課程の洗練化

救援コースに特化した14科目と4つの国際救援・開発協力看護師に求められる能力との関連を示した。また、授業実施後には、APAでの評価を行ってきた。今後、救援コースの教育課程の評価を行い、教育課程を実施しつつ、洗練化を継続していくことである。具体的には、編成した授業科目とその教育内容・方法の検討を継続すること、救援コースを履修した学生の到達目標を作成したマップに基づき評価を行うこと、その際には、看護職として求められる看護実践能力の育成状況と救援コースの学生として習得する能力とをあわせて評価していくことである。

2) 救援コースの学生の就職や継続教育の検討

日本赤十字社の国際救援・開発協力看護師になるためには、看護師の臨床経験3年を必要としている。原則として、学生自身が希望する病院に就職することであるが、国際救援・開発協力看護師をめざす看護職としての就職支援を行う必要がある。

また、救援コースを卒業した学生が、病院で勤務する間に動機や意欲が減少しないように、動機づけや意欲向上につながるような関わりをどのように行っていくか、学生自らが異文化コミュニケーション能力の維持・向上をめざした学習を継続することが必要となる。学生に、継続教育の重要性や方法を説明し、学生の能力育成のための支援プログラムを構築することも一案であろう。

救援コースの学生のための継続教育支援については、次の通りである。

平成24年度から、学部には救援コース学生のための担当教員を配置する予定である。さらに、平成24年度から、大学院に災害看護学の専門看護師コースを開設予定である。

将来的には、災害看護学など国際救援・開発協力関連の博士課程の開設をめざし、国際救援・開発協力を探求できる教育課程の編成を検討する予定である。

3) 救援コースの学費（経費）の検討

救援コースの履修に伴う学費（経費）は、原則として学生が負担を行う。学生が負担する経費を算出すると、4年間で100万円～150万円となる。具体的には、救援コースに特化した授業科目のうち学費が必要となるのは、国際看護学演習（アメリカ、ジュネーブ、フィリピン）、異文化コミュニケーションⅥ（イギリス語学研修）、大阪赤十字病院や熊本赤十字病院での演習に係わる学費（旅費、宿泊費）である。

救援コースは、文部科学省が述べているグローバル人材に必要な資質を育む教育プログラムであると自負している。誰もが救援コースで学ぶことができるように、文部科学省の教育支援事業に申請し、補助金などの支援を得ていきたい。

4) 大学教育のグローバル化と大学教育のあり方の検討

本学の国際救援コースは、日本赤十字社の国際救援・開発協力に係わる人的資源の確保として大きな意義を持つ。また、学部における大学教育の使命は、学生らが国際社会の中で果たすべき役割を自覚し、国際的に活躍できる人材育成を行うことである。しかし、どのような教育内容や教育方法が、地球規模で人類の幸福のために活躍できる能力を育むのかを継続して探求していきたい。

救援コースは、看護系大学においてわが国ではじめて開始される教育課程である。看護職は、看護師教育課程、保健師教育課程、助産師教育課程と3つの教育課程により育成されてきた歴史を持つ。救援コースを実施・評価していくことは、未来を見据えた保健・医療・福祉を担う看護職の育成の教育課程を検討するための貴重な資料を得ることができるであろう。

グローバルに活躍できる人材とは、語学が堪能でコミュニケーションができるのみではなく、異文化の人々の暮らしや価値観を理解すると同時に、異文化の人々の安寧と健康に貢献できることである。本学では、国内外で活躍できる看護職の育成をめざし、たゆまぬ努力を継続していきたい。

資 料 目 次

資料1	救援コースを選択する人のための履修モデル (平成21～23年度教育課程)	71
資料2	救援コースを選択する人のための履修モデル (平成24年度教育課程)	72
資料3	救援コース成績通知表	74
資料4	救援コース成績通知表(評価結果)	76
シラバス		79
本事業担当者一覧		98

資料1 救援コースを選択する人のための履修モデル（平成21～23年度教育課程）

		<1年生>		<2年生>		<3年生>		<4年生>		<5年生>		単位数
		1セメスター	2セメスター	3セメスター	4セメスター	5セメスター	6セメスター	7セメスター	8セメスター			
一般教養	必修	赤十字の歩みと活動 2(30) 統計学 2(30) 英語Reading I-1 1(30) 英語Writing I-1 1(30) ①英語Lis.&Spe. I-1 1(30) (異文化コミュニケーションⅠ)	英語Reading I-2 1(30) 英語Writing I-2 1(30) ②英語Lis.&Spe. I-2 1(30) (異文化コミュニケーションⅡ)	英語Reading II 1(30) 英語Writing II 1(30) ③英語Lis.&Spe. II 1(30) (異文化コミュニケーションⅢ) フランス語 I-1 1(30) 中国語 I-1 1(30)	英語Reading III 1(30) 英語Writing III 1(30) ④英語Lis.&Spe. III 1(30) (異文化コミュニケーションⅣ) フランス語 I-2 1(30) 中国語 I-2 1(30)						10	
	選択必修										10	
	選択	人間の存在 2(30) 法と人権 2(30) 社会の構造と機能 2(30)	国際社会と政治 2(30) 発達心理学 2(30)	⑤ヒューマン・ガルフ 特論 I(15) (※ラテラ行活動・特講)							11	
専門基礎	必修	食生活と健康 1(30) 生化学 1(30) 人体の構造と機能 I 1(30) 情報処理学 I 1(30) ⑤基礎ゼミⅠ 1(30) (英語集中ゼミ)	医療の本質 1(15) 人体の構造と機能Ⅱ 2(60) 病態治療学 I 1(30)	病態治療学Ⅱ-1 1(30) 感染症と免疫 1(30) 薬学 2(30) 保健福祉と行政 2(30)	病態治療学Ⅱ-2 1(30) 薬理学 1(30) 疫学 2(30) 保健福祉と行政 2(30)	生命と倫理 1(15) 保健統計学 2(30) ⑥基礎ゼミⅡ 1(30) (語学研修)					22	
	選択必修		家族と社会2(30)			⑦国際社会と保健活動 2(30) (国際医療保健活動)					4	
	選択		生活と環境 2(30) 社会福祉と社会保険 2(30)		保健行動論 2(30)						6	
専門	必修	看護学概論 I 2(30) 基礎看護学Ⅱ-1 2(60)	基礎看護学Ⅱ-2 1(30) 看護学概論Ⅱ 1(15) 成人看護学 I 1(15) 基礎看護学 I 1(30) ☆基礎看護学実習 I 1(45)	母性看護学 I 1(15) 小児看護学 I 1(15) 老年看護学 I 1(15) 精神看護学 I 1(15) 地域看護学 I 2(30) 成人看護学 I 2(60) 基礎看護学Ⅲ 1(30) 基礎看護学Ⅳ 1(30) ☆基礎看護学実習Ⅱ 2(90)	母性看護学Ⅱ 1(30) 小児看護学Ⅱ 1(30) 老年看護学Ⅱ 1(30) 精神看護学Ⅱ 1(30) 地域看護学Ⅱ 4(60) 成人看護学Ⅱ 2(30) 成人看護学Ⅲ 2(60) 成人看護学Ⅳ 1(30) 基礎看護学Ⅴ 1(15) 在宅看護学 I 2(30) ☆成人看護学実習 I 3(135)	母性看護学Ⅲ 2(60) 小児看護学Ⅲ 2(60) 成人看護学Ⅴ 1(30) 老年看護学Ⅲ 2(60) 精神看護学Ⅲ 2(60) 地域看護学Ⅲ 2(30) 在宅看護学Ⅱ 2(30) ☆領域別実習 1 3(135) ☆領域別実習 2 3(135) ☆領域別実習 3 3(135)	研究方法 2(60)	⑧卒業研究 2(60) ―国際教養に関するテーマ― 看護管理学 2(30) 看護教育学Ⅰ 1(15) 看護心理学 2(30) 看護倫理学 1(15) ☆領域別実習 4 3(135) ☆領域別実習 5 3(135) ☆領域別実習 6 4(180) ⑨立総合看護学実習 2(90) (国際医療福祉学院実習)	84			
	選択		赤十字看護・救急法(集中講義) 1 救急法 1(30)	⑩看護英語Ⅰ 1(30)	⑩国際看護学 2(30) (健康問題の日本比較) ⑪国際看護学実習 2(60) (7)forフイリピン研修	⑪国際看護学 2(30) (健康問題の日本比較) ⑪国際看護学実習 2(60) (7)forフイリピン研修	⑪国際看護学 2(30) 臨床看護学特論Ⅰ(Ⅱ) 1(15) 発達看護学特論Ⅰ(Ⅱ) 2(30) 応用看護学特論Ⅰ(Ⅱ) 1(15)			14		
	単位数		40単位(3単位(90時間))	59単位(5単位(135時間))	32単位(5単位(75時間))	30単位(10単位(270時間))					161	

(注) 救済コースの授業科目は下線で示し①～④の番号を付記した。その科目の特化した内容表現をゴシック体で付記した。

資料2 救援コースを選択する人のための履修モデル（平成24年度教育課程）

		<1年生>						<2年生>					
		1セメスター開講科目	単位数	時間数	2セメスター開講科目	単位数	時間数	3セメスター開講科目	単位数	時間数	4セメスター開講科目	単位数	時間数
必修科目	一般教養	赤十字の歩みと活動Ⅰ	1	15	総合英語Ⅲ	1	30	統計学	2	30			
		総合英語Ⅰ	1	30	総合英語Ⅳ	1	30						
		総合英語Ⅱ	1	30									
	専門基礎	教育人間学	2	30	医学概論	1	15	病理学	1	30	病態治療学Ⅰ	1	30
		栄養と健康	1	30	人体の構造と機能Ⅱ	2	60	社会福祉と社会保障	2	30	病態治療学Ⅱ	1	30
		人体の構造と機能Ⅰ	1	30	感染と免疫	1	30				臨床薬理学	1	30
		生化学	1	30							疫学	2	30
		情報リテラシー	2	30							保健医療福祉行政論	2	30
		基礎ゼミ	1	30									
	専門	(通年)看護援助演習Ⅰ			(通年)看護援助演習Ⅱ								
		看護学概論Ⅰ	2	30	看護学概論Ⅱ	2	30	公衆衛生看護学概論	2	30	母性看護学Ⅰ	1	30
		基礎看護学Ⅰ	1	30	精神看護学概論	1	15	在宅看護論Ⅰ	2	30	小児看護学Ⅰ	1	30
					基礎看護学Ⅱ	2	60	成人看護学Ⅰ	2	60	成人看護学Ⅱ	1	30
					☆基礎看護学実習Ⅰ	1	45	基礎看護学Ⅲ	1	30	老年看護学Ⅰ	1	30
								基礎看護学Ⅳ	1	30	精神看護学Ⅰ	1	30
								☆基礎看護学実習Ⅱ	2	90	個人・家族・集団の援助論	4	60
								発達看護学概論	3	45	成人看護学Ⅲ	1	30
											成人看護学実習Ⅰ	2	90
選択科目	一般教養	人間の存在	2	30	教育の本質と過程	2	30	★(通年)ヒューマン・ケアリング特論					
		日本国憲法	2	30	国際社会と平和	2	30	英語ReadingⅠ	1	30	英語ReadingⅡ	1	30
		心理学概論	2	30	★異文化コミュニケーションⅡ	1	30	英語WritingⅠ	1	30	英語WritingⅡ	1	30
		化学概論	2	30	発達心理学	2	30	英語Lis.&Spe.Ⅰ	1	30	英語Lis.&Spe.Ⅱ	1	30
		生物学概論	2	30				フランス語Ⅰ	1	30	フランス語Ⅱ	1	30
		社会の構造と機能	2	30				中国語Ⅰ	1	30	中国語Ⅱ	1	30
		文章表現法	2	30				★異文化コミュニケーションⅢ	1	30	★異文化コミュニケーションⅣ	1	30
		★異文化コミュニケーションⅠ	1	30									
	専門基礎	体育(健康と活動の理論と実践)	2	30	情報科学Ⅰ	1	30				社会心理学	2	30
					家族と社会	1	15				保健行動論	2	30
	専門	★ (通 年) 国											
								赤十字救護・援助方法Ⅰ	1	30			
								赤十字救護・援助方法Ⅱ	1	30			
								赤十字救護・援助方法Ⅲ	1	30			
								*Ⅰ・Ⅲを修得することが望ましい					
計			17		計	9		計	9		計	11	
合計			31		合計	25		合計	25		合計	31	

の部分が国際救援コースに特化した科目。

★の部分が国際救援コースの必修科目。国際看護学演習はⅠ・Ⅱ・Ⅲから一つを選択必修。異文化コミュニケーションⅤ・Ⅵは選択科目。

の部分が保健師教育課程の必修科目。

<3年生>						<4年生>						必要 単位数		
5セメスター開講科目	単位数	時間数	6セメスター開講科目	単位数	時間数	7セメスター開講科目	単位数	時間数	8セメスター開講科目	単位数	時間数			
									赤十字の歩みと活動Ⅱ	1	15	8 単位		
						(通年)キャリアディベロップメント論				1	15	2 3 単位		
(通年)看護管理学					2	30	(通年)卒業研究					2	60	7 4 単位
(通年)看護援助演習Ⅲ					2	45	看護教育学	2	30	看護倫理学	1	15		
母性看護学Ⅱ	1	30	研究方法	2	30	(通年)看護援助演習Ⅳ					1	15		
小児看護学Ⅱ	1	30	☆領域別実習1	2	90	災害看護学Ⅰ	1	15						
成人看護学Ⅳ	1	30	☆領域別実習2	2	90	☆領域別実習7	2	90						
老年看護学Ⅱ	1	30	☆領域別実習3	2	90	☆領域別実習8	2	90						
精神看護学Ⅱ	1	30	☆領域別実習4	2	90	☆総合看護実習	2	90						
在宅看護論Ⅱ	2	30	☆領域別実習5	2	90									
			☆領域別実習6	2	90									
			異文化コミュニケーションⅤ	1	30								2 0 単位 以上	
			異文化コミュニケーションⅥ	2	60									
ライフサイクルと学習	2	30												
保健統計学	2	30												
★国際社会と保健活動	2	30				情報科学Ⅱ	1	30						
国際救 援 活 動 論										1	45	修（保 健 師 教 育 単 位 併 せ て 履 修） 9 単 位 以 上 2 課 程 を 併 せ て 履 修		
公衆衛生看護管理論	2	30	国際看護学演習Ⅱ（フィリピン）	2	60	★国際看護学	2	30	基礎看護学特論	1	15			
★看護英語	1	30	公衆衛生看護活動展開論Ⅱ	2	30	国際看護学演習Ⅲ（アメリカ）	2	60	発達看護学特論	2	30			
国際看護学演習Ⅰ（ジュネーブ）	2	60	公衆衛生看護学実習Ⅰ	1	45	公衆衛生看護学実習Ⅱ	4	180	応用看護学特論	2	30			
代替療法	1	15							女性ケア論	2	30			
公衆衛生看護活動展開論Ⅰ	2	30							★災害看護学Ⅱ	2	30			
計	14		計	5		計	15		計	21				
合計	21		合計	23		合計	24		合計	27				
国際救 援 コース												134		
国際救 援 コース+保健師教育課程												145		

資料3 救援コース成績通知表

期待される能力	卒業時の達成目標(太字)と下位目標(年次別目標)	1年次			
		英語Lis&Spe I-1	英語Lis&Spe I-2	基礎ゼミ I	GPA
異文化コミュニケーション能力	3. 英語力を活用して、積極的に異文化の人々とコミュニケーションできる。				1年次
	<1年次>TOEIC350点以上を獲得する。	○	○	○	0.0
	<1,2年次>英語を用いて、異文化の人々と積極的にコミュニケーションできる。	○	○	○	
	<2年次>TOEIC400点以上を獲得する。				
	<1,2年次>多様な価値感を理解する姿勢を持つ	○	○		
	<3年次>英語を用いて自分の意見を他者に表現できる。				
	<3年次>自分の意見を理論立てて表現でき、他者と意見交換できる。				
	<3年次>TOEIC500点以上を獲得する。				
	<4年次>TOEIC550点以上を獲得する。 ※アルク等自立的英語学習により達成する。				
<4年次>英語で他者と相互理解・意思疎通を図るコミュニケーションを図ろうとすることができる。					
課題探求能力・創造性	5. 赤十字の理念のもと、被災地等の救援先において、公平・中立に判断できる必要性を理解する。				
	<1~4年次>倫理に関する基本的概念、理論を理解している。				
	<3,4年次>医療現場における倫理的課題について気づく。				
	<4年次>国際救援・開発協力の現場における倫理的課題について検討し、問題解決の方法を考察できる。				
	6. 赤十字の国際救援に積極的に参加する意思を持ち続け、自己の能力開発を高める姿勢を身につける。				
	<1~4年次>赤十字の国際救護・開発協力活動への興味を持ち(ち、自ら学ぶ姿勢を持つ)つ。				
	7. 国際的視野をもち、必要に応じて現状を改善、改革のための創造的思考力を身につける				
	<1,2年次>他者と協調して課題に取り組む姿勢を持つ。				
	<1,2年次>日常生活において限られた資源の活用を考えられる。				
	<2年次>ボランティア活動の運営に積極的に参加する。				
	<2,3年次>対象により良い看護を提供するために創造的に工夫することができる。				
	<3年次>積極的に行動でき、他者への指導力を持つ。				
	<1~4年次>自分の意見を持ち、他者に表現できる。				
	<4年次>自分の意見を理論立てて表現でき、他者と意見交換できる。				
国際救援時における 状況判断能力・問題 解決能力	4. 国内外の救援活動において、限りある資源を活用して、看護の必要性や実行可能な活動を判断する能力を身につける				
	<4年次>国際救援・開発協力現場に必要な基礎的看護技術の習得に取り組む。				
	8. 他者を救援するために、不可欠である自己の判断・行動に責任をもち、心身の自己管理ができる				
	<2年次>ボランティア活動の運営に積極的に参加する。				
	<3年次>自己の心身の健康管理が行える。				
	<1~4年次>自己の心身を健康な状態に保つため、どのようにストレスに対処したらよいか気がつける。				
国際救援時に必要な 基礎的看護実践能力	<4年次>積極的に行動でき、他者への指導力を持つ。				
	1. 赤十字の理念と国際人道法に基づく、赤十字の国際救援における看護の役割を理解する				
	<1~4年次>赤十字の理念と国際人道法について理解している。				
	<3~4年次>赤十字の国際救援・開発協力における看護の役割を理解している。				
	<1~4年次>赤十字の国際救援・開発協力活動への興味を持ち、自ら学ぶ姿勢を持つ。				
	2. 文化の多様性を認識し、それぞれの国の文化を尊重する重要性を認識する				
	<1,2年次>文化の多様性を認識し、それぞれの文化を尊重する重要性を理解している。				
	<1,2年次>生命の尊厳を尊重する姿勢を持つ。				
	<3~4年次>国内外の国際救援・開発協力活動の組織的な取り組みについて理解している。				
	<4年次>既存の理論や概念を用いて、対象の個性を考慮した適切な看護を提供できる。				
	<4年次>状況に応じて自己の態度を柔軟に変化できる。				
	<4年次>卒業論文を国際救援・開発協力に関するテーマで、積極的に英文文献を活用して論文作成している				
<4年次>チーム医療においてより良い看護を提供するために建設的、創造的に思考できる。					
年次APA(Achievement Point Average)		0.0			
通算APA(Achievement Point Average)					

氏 名

評価基準			
3	2	1	0
非常に優れている	優れている	基準に達している	未到達である

資料4 救援コース成績通知表（評価結果）

期待される能力	卒業時の達成目標(太字)と下位目標(年次別目標)	1年次			
		英語Lis&Spe I-1	英語Lis&Spe I-2	基礎ゼミ I	APA
異文化コミュニケーション能力	3. 英語力を活用して、積極的に異文化の人々とコミュニケーションできる。				1年次
	<1年次>TOEIC350点以上を獲得する。		1.2		2.1
	<1、2年次>英語を用いて、異文化の人々と積極的にコミュニケーションできる。		2.6		
	<2年次>TOEIC400点以上を獲得する。				
	<1、2年次>多様な価値感を理解する姿勢を持つ		2.6		
	<3年次>英語を用いて自分の意見を他者に表現できる。				
	<3年次>自分の意見を理論立てて表現でき、他者と意見交換できる。				
	<3年次>TOEIC500点以上を獲得する。				
	<4年次>TOEIC550点以上を獲得する。 ※アルク等自立的英語学習により達成する。				
	<4年次>英語で他者と相互理解・意思疎通を図るコミュニケーションを図ろうとすることができる。				
課題探求能力・創造性	5. 赤十字の理念のもと、被災地等の救援先において、公平・中立に判断できる必要性を理解する。				
	<1～4年次>倫理に関する基本的な概念、理論を理解している。				
	<3、4年次>医療現場における倫理的課題について気づく。				
	<4年次>国際救援・開発協力の現場における倫理的課題について検討し、問題解決の方法を考察できる。				
	6. 赤十字の国際救援に積極的に参加する意思を持ち続け、自己の能力開発を高める姿勢を身につける。				
	<1～4年次>赤十字の国際救援・開発協力活動への興味を持ち、自ら学ぶ姿勢を持つ。				
	7. 国際的視野をもち、必要に応じて現状を改善、改革するための創造的思考力を身につける				
	<1、2年次>他者と協調して課題に取り組む姿勢を持つ。				
	<1、2年次>日常生活において限られた資源の活用を考えられる。				
	<2年次>ボランティア活動の運営に積極的に参加する。				
	<2、3年次>対象により良い看護を提供するために創造的に工夫することができる。				
	<3年次>積極的に行動でき、他者への指導力を持つ。				
国際救援時における 状況判断能力・問題 解決能力	<1～4年次>自分の意見を持ち、他者に表現できる。				
	<4年次>自分の意見を理論立てて表現でき、他者と意見交換できる。				
	<4年次>限られた資源の活用について検討し、工夫することができる。				
	<4年次>専門職としての自覚を持ち、積極的に自己開発することの重要性を理解する。				
	4. 国内外の救援活動において、限りある資源を活用して、看護の必要性や実行可能な活動を判断する能力を身につける				
	<4年次>国際救援・開発協力現場に必要な基礎的看護技術の習得に取り組む。				
	8. 他者を救援するために、不可欠である自己の判断・行動に責任をもち、心身の自己管理ができる				
	<2年次>ボランティア活動の運営に積極的に参加する。				
国際救援時に必要な 基礎的看護実践能力	<3年次>自己の心身の健康管理が行える。				
	<1～4年次>自己の心身を健康な状態に保つため、どのようにストレスに対処したらよいか気がつける。				
	<4年次>積極的に行動でき、他者への指導力を持つ。				
	1. 赤十字の理念と国際人道法に基づく、赤十字の国際救援における看護の役割を理解する				
	<1～4年次>赤十字の理念と国際人道法について理解している。				
	<3～4年次>赤十字の国際救援・開発協力における看護の役割を理解している。				
	(<1～4年次>赤十字の国際救援・開発協力活動への興味を持ち、自ら学ぶ姿勢を持つ。)削除?				
	2. 文化の多様性を認識し、それぞれの国の文化を尊重する重要性を認識する				
	<1、2年次>文化の多様性を認識し、それぞれの文化を尊重する重要性を理解している。				
	<1、2年次>生命の尊厳を尊重する姿勢を持つ。				
	<3～4年次>国内外の国際救援・開発協力活動の組織的な取り組みについて理解している。				
	<4年次>既存の理論や概念を用いて、対象の個性を考慮した適切な看護を提供できる。				
	<4年次>状況に応じて自己の態度を柔軟に変化できる。				
	<4年次>卒業論文を国際救援・開発協力に関するテーマで、積極的に英文文献を活用して論文作成している				
	<4年次>チーム医療においてより良い看護を提供するために建設的、創造的に思考できる。				
年次APA(Achievement Point Average)		2.1			
通算APA(Achievement Point Average)					

学籍番号

209B

氏 名

3年生

25名

2年次					3年次				4年次							卒業時				
英語Lis&Spe II-1	英語Lis&Spe III	ヒューマンケ アリング特論	看護英語	APA	基礎ゼミ II	国際社会と 保健活動	国際看護学演習 (フィリピン)	APA	卒業研究	総合看護 実習	災害 看護学	国際看護学	国際看護学演習 (アメリカ)	国際看護学演習 (ジュネーブ)	APA	APA				
				2年次				3年次							4年次					
2.4	2.4			1.8			○	1.7					○		通算					
0.9	0.9						○						○							
		2.3										○	○							
				通算	○		○	通算					○							
				1.9	○	1.7	○	1.9	○			○	○							
					○															
					(○)															
									○	○	○	○	○	1.7						
				2年次				3年次							4年次					
				1.9				2.1	○			○	○		通算					
										○	○	○	○							
						2.3	○													
				通算				通算												
		2.2												○						
		2.3												○						
		1.2		1.9				2.0												
						1.9					○	○		○	○	2				
									○	○	○	○	○							
									○	○	○	○	○							
				2年次				3年次							4年次					
				1.7				通算			○				通算					
		1.7					○							○						
				1.7									○	2.7						
										○			○							
													○							
				2年次				3年次							4年次					
				通算				2.2					○	2	通算					
							2.3		○					○			2			
									○					○			2.7			
				通算				通算	○			○	○							
											○	○	○	○						
						2	○									2				
								2.2	○			○	○	2.3						
										○			○							
										○	○		○							
1.8					2.0															
1.9					1.9															

評価基準			
3	2	1	0
非常に優れている	優れている	基準に達している	未到達である

シ ラ バ ス

英語Lis. & Spe. I - 1	81
英語Lis. & Spe. I - 2	82
基礎ゼミ I	83
英語Lis. & Spe. II	84
英語Lis. & Spe. III	85
ヒューマンケアリング特論	86
国際社会と保健活動	87
基礎ゼミ II (是澤)	88
基礎ゼミ II (Capper)	89
総合看護学実習	90
国際看護学演習 (アメリカ)	91
国際看護学演習 (ジュネーブ)	92
国際看護学演習 (フィリピン)	93
国際看護学	94
看護英語	95
災害看護学	96
卒業研究	97

授業科目	英語 Intercultural Communication (英語Lis.&Spe. I-1) (※国際救援・開発協力看護師コース)				担 当	Keith Hoy	
					研究室	非常勤講師	
開講年次	1	セメスター	1	時間数 (単位数)	30	必修/選択	必修
					(1)	開講最低人数	
授業の目的及びねらい							
This course aims to give students a basic introduction to the study of intercultural communications. They will learn how to share personal opinions and ideas (either in pairs or groups) as they examine the customs, practices and values of Japan and other countries. Students will also be encouraged to try out new language structures and vocabulary as it relates to these following topics: Family, Hometown, Food, Manners, Explaining things Japanese and Language.							
講義回数	主な授業内容						
第1回	Course introduction: Knowing Me, Knowing You Pairwork, small group discussion, role-play and listening activities.						
第2回	Talking about your family and related vocabulary building activities Pairwork, small group discussion, role-play and listening activities.						
第3回	Examining your hometown Pairwork, small group discussion, role-play and listening activities.						
第4回	Highlighting famous places in your hometown Pairwork, small group discussion, role-play and listening activities.						
第5回	Looking at food -Talking about likes and dislikes Pairwork, small group discussion, role-play and listening activities.						
第6回	Vocabulary building exercises related to food Pairwork, small group discussion, role-play and listening activities.						
第7回	Manners in Japan - Values Pairwork, small group discussion, role-play and listening activities.						
第8回	Do's and Don'ts for visitors in Japan Pairwork, small group discussion, role-play and listening activities.						
第9回	Intercultural Simulation: Blue versus Red Culture (Barnga) Pairwork, small group discussion, role-play and listening activities.						
第10回	Souvenir items and what they mean Pairwork, small group discussion, role-play and listening activities.						
第11回	Explanation Strategies using common items found in Japan Pairwork, small group discussion, role-play and listening activities.						
第12回	Looking at Language - Kanji, Hiragana or Katakana? Pairwork, small group discussion, role-play and listening activities.						
第13回	Learning about Language - difficulties of learning English in Japan Pairwork, small group discussion, role-play and listening activities.						
第14回	Oral Exam An oral evaluation will be carried out.						
第15回	Final Exam A written evaluation will be carried out.						
必須文献、参考文献等							
必須文献: This is Japan Your Culture, Your Life by Simon Capper, (MacMillan Language House)							
参考文献: Supplementary material will be provided by the teacher.							
評価の方法							
Participation (20%) Coursework (30%) Attendance (15%) Quizzes (15%) Final Exam (20%)							
受講生へのメッセージ							
Be prepared to practice your English skills in pairs and in groups about topics related to intercultural communications. This is also a chance to reflect on your personal experiences. Enjoy the course and don't be afraid to ask questions!							

授業科目	英語 Intercultural Communication (英語Lis.&Spe. I-2) (※国際救援・開発協力看護師コース)				担 当	Keith Hoy	
					研究室	非常勤講師	
開講年次	1	セメスター	2	時間数 (単位数)	30 (1)	必修/選択	必修
						開講最低人数	
授業の目的及びねらい							
This course continues with the objectives in term 1 which is to give students a basic introduction to the study of intercultural communications. They will learn how to share personal opinions and ideas (either in pairs or groups) as they examine the customs, practices and values of Japan and other countries. Students will also be encouraged to try out new language structures and vocabulary as it relates to these following topics: Temples and Shrines, Housing, Special days and events, Education, Famous people in Japan and Television viewing.							
講義回数	主な授業内容						
第1回	Course introduction: Review of key concepts and vocabulary Pairwork, small group discussion, role-play and listening activities.						
第2回	Talking about Temples and Shrines in Japan Pairwork, small group discussion, role-play and listening activities.						
第3回	Vocabulary building exercises related to Temples and Shrines Pairwork, small group discussion, role-play and listening activities.						
第4回	Traditional Japanese housing Pairwork, small group discussion, role-play and listening activities.						
第5回	Looking at housing in other countries Pairwork, small group discussion, role-play and listening activities.						
第6回	Special days and events Pairwork, small group discussion, role-play and listening activities.						
第7回	The meanings behind the special days and events Pairwork, small group discussion, role-play and listening activities.						
第8回	Education: School and College life Pairwork, small group discussion, role-play and listening activities.						
第9回	Examining education in other countries Pairwork, small group discussion, role-play and listening activities.						
第10回	Famous people in Japan Pairwork, small group discussion, role-play and listening activities.						
第11回	Japanese Movies and TV Pairwork, small group discussion, role-play and listening activities.						
第12回	Television and internet viewing habits - Popular shows in other countries Pairwork, small group discussion, role-play and listening activities.						
第13回	Examining video clips of famous movie scenes and their meanings Pairwork, small group discussion, role-play and listening activities.						
第14回	Oral Exam An oral evaluation will be carried out.						
第15回	Final Exam A written evaluation will be carried out.						
必須文献、参考文献等							
必須文献: This is Japan Your Culture, Your Life by Simon Capper (Macmillan Language House)							
参考文献: Supplementary material will be provided by the teacher.							
評価の方法							
Participation (20%) Coursework (30%) Attendance (15%) Quizzes (15%) Final Exam (20%)							
受講生へのメッセージ							
Be prepared to practice your English skills in pairs and in groups about topics related to intercultural communications. This is also a chance to reflect on your personal experiences. Enjoy the course and don't be afraid to ask questions!							

授業科目	基礎ゼミ I (前期：国際教養・開発協力看護師コース、 F2：後期、S2：後期)				担 当	Simon Capper	
					研究室	研究室16	
開講年次	1	セメスター	1・2	時間数 (単位数)	30 (1)	必修/選択	必修
					開講最低(上限)人数		
授業の目的及びねらい							
In this seminar we will explore a variety of strategies and techniques for improving language learning. Seminar members will be expected to have a positive, motivated attitude, and should be willing to be active in the classroom, and to show initiative with self-directed learning outside the classroom.							
講義回数	主な授業内容						
第1回	Introduction to the seminar: The Good Learner Checklist. Small group & pairwork conversation and discussion activities, self-directed research.						
第2回	Goal setting. Small group & pairwork conversation and discussion activities, self-directed research.						
第3回	Developing skills for extensive reading (reading for pleasure) Small group & pairwork conversation and discussion activities, self-directed research.						
第4回	Developing skills for extensive reading (reading for pleasure). Small group & pairwork conversation and discussion activities, self-directed research.						
第5回	Vocabulary learning and remembering techniques. Small group & pairwork conversation and discussion activities, self-directed research.						
第6回	Vocabulary learning and remembering techniques. Small group & pairwork conversation and discussion activities, self-directed research.						
第7回	Vocabulary learning and remembering techniques. Small group & pairwork conversation and discussion activities, self-directed research.						
第8回	Improving speaking skills and pronunciation. Small group & pairwork conversation and discussion activities, self-directed research.						
第9回	Improving speaking skills and pronunciation. Small group & pairwork conversation and discussion activities, self-directed research.						
第10回	Improving speaking skills and pronunciation Small group & pairwork conversation and discussion activities, self-directed research.						
第11回	Exploring non-verbal communication. Small group & pairwork conversation and discussion activities, self-directed research.						
第12回	Exploring non-verbal communication. Small group & pairwork conversation and discussion activities, self-directed research.						
第13回	Exploring non-verbal communication. Small group & pairwork conversation and discussion activities, self-directed research.						
第14回	Exploring internet resources and self-directed study. Small group & pairwork conversation and discussion activities, self-directed research.						
第15回	Review & Interview. Individual progress reports: short presentation/oral report.						
必須文献、参考文献等							
必須文献:Materials will be provided by the teacher							
参考文献:Materials will be provided by the teacher							
評価の方法							
Active learning outside the classroom (50%)			Active learning in the class (50%)				
受講生へのメッセージ							
Students who volunteer for this seminar should have some kind of digital audio-player (i-pod or MP3 player), and have a genuine interest in improving their English ability. You learn by doing. Practise, practise, practise!							

授業科目	英語 Intercultural Communication (B) (英語Lis.&Spe. II (救援コース))				担 当	Keith Hoy	
					研究室	非常勤講師	
開講年次	2	セメスター	3	時間数 (単位数)	30 (1)	必修/選択	選択必修 (※国際教授・開発協力看護師コースは必修)
				開講最低人数		1人	
授業の目的及びねらい							
The objective of this course is to give students a chance to reflect upon their personal experiences as they relate to key principles in the study of intercultural communications. In short, they will be able to discuss (either with their partner or in a group) a wide range of intercultural topics, among them personal and cultural identity, values, culture shock, proverbs, nonverbal communication and individualism.							
講義回数	主な授業内容						
第1回	Course introduction Pairwork, small group discussion, role-play and listening activities.						
第2回	Exploring personal identity / Exploring cultural identity Pairwork, small group discussion, role-play and listening activities.						
第3回	Bi-lingual and Bi-cultural / Visible vs. Hidden differences Pairwork, small group discussion, role-play and listening activities.						
第4回	Values / Lifestyle values Pairwork, small group discussion, role-play and listening activities. Portfolio review session.						
第5回	Values that people receive from their families Pairwork, small group discussion, role-play and listening activities.						
第6回	Culture shock / Personality checklist and adaptation to new situations Pairwork, small group discussion, role-play and listening activities.						
第7回	Intercultural simulation exercise / Reading: Experiences of an Intercultural trainer Pairwork, small group discussion, role-play and listening activities.						
第8回	Connection between language and culture / Understanding cultural values through proverbs Pairwork, small group discussion, role-play and listening activities. Portfolio review session.						
第9回	Idioms: giving color and vitality to a language / Being an effective translator Pairwork, small group discussion, role-play and listening activities.						
第10回	Body language and customs Pairwork, small group discussion, role-play and listening activities.						
第11回	Body language / Examination of various customs through body language Pairwork, small group discussion, role-play and listening activities.						
第12回	Individualist or Collectivist?: Readings and Questionnaires Pairwork, small group discussion, role-play and listening activities. Portfolio review session.						
第13回	Examination to the ways people group themselves in a society Pairwork, small group discussion, role-play and listening activities.						
第14回	Oral Exam An oral exam will be carried out.						
第15回	Final Exam A written evaluation will be carried out.						
必須文献、参考文献等							
必須文献:Identity, by Shaules, Tsujioka and Iida (Oxford University Press) 参考文献:Supplementary material will be provided by the teacher.							
評価の方法							
Participation (20%) Coursework (30%) Attendance (15%) Quizzes (15%) Final Exam (20%)							
受講生へのメッセージ							
Be prepared to pratice your English skills in pairs and in groups about topics related to intercultural communications. This is also a chance to reflect on your personal experiences in terms of how it relates to people from other cultures. Enjoy the course and don't be afraid to ask questions!							

授業科目	英語 Intercultural Communication (B) (英語Lis. &Spe. III (救援コース))				担 当 研究室	Keith Hoy 非常勤講師	
開講年次	2	セメスター	4	時間数 (単位数)	30 (1)	必修/選択	選択必修 (※国際救援・開発協力看護師コースは必修)
授業の目的及びねらい				開講最低人数 1人			
This course is a continuation of the objectives in term 1 which is to give students a chance to reflect upon their personal experiences as they relate to key principles in the study of intercultural communications. In short, they will be able to discuss (either with their partner or in a group) a wide range of intercultural topics, among them politeness, communication styles, gender and culture, diversity, social change and the global community.							
講義回数	主な授業内容						
第1回	Course introduction and review of key concepts and vocabulary Pairwork, small group discussion, role-play and listening activities.						
第2回	The role of Politeness / Checklist: Are you a formal or casual person? Pairwork, small group discussion, role-play and listening activities.						
第3回	Description about people we respect / Reading: Manners and Etiquette Pairwork, small group discussion, role-play and listening activities.						
第4回	Communication Styles: Are you Expressive, Flexible or Reserved? Pairwork, small group discussion, role-play and listening activities. Portfolio review session.						
第5回	Communication styles in the workplace / Reading: Intercultural training to managers Pairwork, small group discussion, role-play and listening activities.						
第6回	Gender and Culture / Questionnaire: What are the differences between men and women? Pairwork, small group discussion, role-play and listening activities.						
第7回	Modern lifestyles / Reading: Margaret Mead and the role of gender in society Pairwork, small group discussion, role-play and listening activities.						
第8回	Understanding Diversity in different countries Pairwork, small group discussion, role-play and listening activities. Portfolio review session.						
第9回	What are Stereotypes / Multiculturalism Pairwork, small group discussion, role-play and listening activities.						
第10回	Social change and problems within societies Pairwork, small group discussion, role-play and listening activities.						
第11回	Discrimination: A case study Pairwork, small group discussion, role-play and listening activities.						
第12回	The Global Community Pairwork, small group discussion, role-play and listening activities. Portfolio review session.						
第13回	Topics we share with people from other countries / Reading: Mahatma Ghandi Pairwork, small group discussion, role-play and listening activities.						
第14回	Oral Exam An oral exam will be carried out.						
第15回	Final Exam A written evaluation will be carried out.						
必須文献、参考文献等							
必須文献:Identity, by Shaules, Tsujioka and Iida (Oxford University Press) 参考文献:Supplementary material will be provided by the teacher.							
評価の方法							
Participation (20%) Coursework (30%) Attendance (15%) Quizzes (15%) Final Exam (20%)							
受講生へのメッセージ							
Be prepared to pratice your English skills in pairs and in groups about topics related to intercultural communications. This is also a chance to reflect on your personal experiences in terms of how it relates to people from other cultures. Enjoy the course and don't be afraid to ask questions!							

授業科目		ヒューマン・ケアリング特論			担 当	矢野 博史	
					研究室	研究室11	
開講年次	2	セメスター	3・4	時間数 (単位数)	15 (1)	必修/選択	選択 (※国際救援・開発協力看護師コースは必修)
						開講最低人数 1人	
授業の目的及びねらい							
ボランティア活動の学習と参加を通じて、ヒューマン・ケアリングな活動を行う際のプロセス、知識・技術の応用、関係形成やコミュニケーションのあり方、倫理的課題とその対応について学びます。							
講義回数	主な授業内容						
第1回	ヒューマン・ケアリングと社会活動（矢野） ケアする存在(ホモ・クーランス)としての人間が「社会のなかで生きる」ことの意味について理解します						
第2回	ボランティア概論（外部講師） ボランティアの理念・目的・意義について理解を深めるとともに現状や問題点について学びます						
第3回	ボランティア活動体験記（外部講師） ボランティア活動に参加した方から実際の事例について学びます						
第4回	ボランティア活動の実践 ボランティア活動に参加します 計2日間以上（1日＝10単位時間 計20時間程度）						
第5回	ボランティア活動の実践						
第6回	ボランティア活動の実践						
第7回	ボランティア活動の実践						
第8回	ボランティア体験の総括（矢野） ボランティア体験記録票の提出および総括						
必須文献、参考文献等							
必須文献： 特になし。資料は適宜配布します。							
参考文献： 特になし。							
評価の方法							
ボランティア体験記録票(60%) 自己評価(30%) 出席状況(10%) 評価の対象となるボランティアの詳細については初回講義時にお知らせします。							
受講生へのメッセージ							
ボランティア活動への参加認定は、自己開拓したもの以外にも、ヒューマンケアリング・センターが支援する学生ボランティア活動や大学が企画する学外研修活動に参加した場合も対象とします。学外での積極的な活動を期待しています。							

授業科目		国際社会と保健活動			担 当	渡邊 智恵	
					研究室	研究室28	
開講年次	3	セメスター	5	時間数	30	必修/選択	選択必修
				(単位数)	(2)		(※国際救援・開発協力看護師コースは必修)
				開講最低人数		1人	
授業の目的及びねらい							
栄養失調や感染症などで多くの子どもたちが亡くなっている一方で、栄養過多で運動不足による子どもの肥満や生活習慣病が増えている国があります。ここでは、紛争地域、熱帯地域などの特定地域の健康問題とケア活動を理解し、国際保健医療の変遷およびグローバルヘルスについて学び、世界ではどのような保健政策や保健活動がなされているのか、看護専門職が何をしてきているのか、保健活動に関する基本的知識を国際的な視点で理解します。							
講義回数	主な授業内容						
第1回	コースガイダンス 国際社会や国際保健に対する問題意識？						
第2回	国際協力に関するさまざまな組織とその役割						
第3回	世界の健康問題の現状とミレニアム開発目標						
第4回	開発途上国の抱える健康問題：子どもが死んでしまう世界を考える						
第5回	プライマリ・ヘルスケアと看護職の役割						
第6回	赤十字の国際緊急援助活動：インドネシア地震後の緊急支援活動						
第7回	開発支援活動：フィリピンでの赤十字看護師の活動の実際						
第8回	人道支援活動：パレスチナでの活動を通して（招聘予定）						
第9回	事例から学ぶ国際救援・開発協力の意味						
第10回	課題学習 演習① 世界の人々の健康問題を探求する						
第11回	課題学習 演習②						
第12回	課題学習 演習③						
第13回	課題学習 演習④						
第14回	課題学習 発表						
第15回	国際的な緊急支援・開発協力への道						
必須文献、参考文献等							
必須文献:適宜紹介します。							
参考文献:ディヴィッド・ワーナー/ディヴィッド・サンダース(1998).いのち・開発・NGO.東京,新評論。							
ロバート・チェンバース(1997). 参加型開発と国際協力ー変わるのはわたしたちー. 東京,明石書店。							
評価の方法							
レポート課題(50%) 課題の取り組みと発表(30%) 出席状況(20%)							
受講生へのメッセージ							
見えないものを見る力、声なき声を聴く力をつけられるよう、演習をしながら進めていきます。国際救援コースは必修ですが、国際看護や災害看護に関心のある方の積極的な参加を期待します。							

授業科目		基礎ゼミⅡ (国際救援・開発協力看護師コース)			担 当	是澤 克哉	
					研究室	非常勤講師	
開講年次	3	セメスター	6	時間数 (単位数)	30 (1)	必修/選択	必修
					開講最低(上限) 人数		
授業の目的及びねらい							
This seminar offers an alternative for International Disaster Relief course students who have either already completed the Overseas Language Study Programme in New Zealand, or who will not be taking part in the forthcoming programme. It focuses on developing communication, debate and speech skills based on themes related to human life and nursing.							
講義回数		主な授業内容					
第1回	Course orientation/introductions. Assign "Introductory Speech"						
第2回	Defining communication. Getting Started: Where responsibility begins						
第3回	Public speaking and critical listening. Critical listening for responsible speakers, public speaking and cultural life.						
第4回	Planning and preparing your speech responsibly. Understanding your audience, finding supporting materials, organizing your speech outline.						
第5回	Beginning and ending your speech. Seven skills of beginning and five skills of ending your speech.						
第6回	Responsible presentation. Wording and delivering your speech, using visual aids.						
第7回	Types of public speaking. Speech to inform and speech to persuade.						
第8回	Informative speeches. Presentation, peer evaluation, discussion activities.						
第9回	Group communication. Changing audiences' minds and actions.						
第10回	Public speaking and cultural life. Understanding cultural processes, communicating unity through diversity: possible strategies.						
第11回	Group presentations. Presentation, peer evaluation, discussion activities.						
第12回	Argumentation and critical thinking 1. Rational thinking and talking: Argumenatation, evaluating arguments.						
第13回	Argumentation and critical thinking 2. Detecting fallacies in reasoning, tips for developing argumentative speeches.						
第14回	Review and Debate Day 1 Pros and cons of preimplantation genetic diagnosis						
第15回	Review and Debate Day 2 Pros and cons of preimplantation genetic diagnosis						
必須文献、参考文献等							
必須文献:Materials will be provided by the instructor 参考文献:Gronbeck, B. E. et al. (1997). Principles of speech communication (13th brief ed.). Longman Pub Group.							
評価の方法							
Informative speech (20%), Group presentation (30%), Debate (40%), Active learning in the class (10%)							
受講生へのメッセージ							
I am here to help you in any way possible to learn the material presented in class and to teach you the theory of speech communication. The course is primarily discussion-oriented, so your participation is essential. Please do not hesitate to ask any questions in or out of class.							

授業科目		基礎ゼミⅡ (国際救援・開発協力看護師コース)			担 当	Simon Capper	
					研究室	研究室16	
開講年次	3	セメスター	6	時間数 (単位数)	30 (1)	必修/選択	必修
					開講最低(上限) 人数		
授業の目的及びねらい							
This seminar prepares members of the International Disaster Relief Nursing course for the English Overseas Study Programme in Christchurch, New Zealand.							
講義回数	主な授業内容						
第1回	Overview: The benefits of studying English in New Zealand. Small group & pairwork conversation and discussion activities, self-directed research.						
第2回	Goal setting: study skills and study objectives Small group & pairwork conversation and discussion activities, self-directed research.						
第3回	Exploring internet resources; learning about CCEL and Christchurch. Small group & pairwork conversation and discussion activities, self-directed research.						
第4回	Autonomous learning and study planning. Small group & pairwork conversation and discussion activities, self-directed research.						
第5回	New Zealand: Society & culture. Small group & pairwork conversation and discussion activities, self-directed research.						
第6回	Communication style: mind the gaps between English and Japanese. Small group & pairwork conversation and discussion activities, self-directed research.						
第7回	New Zealand: Geography, politics & economics. Small group & pairwork conversation and discussion activities, self-directed research.						
第8回	Practical advice for living and studying in New Zealand. Small group & pairwork conversation and discussion activities, self-directed research.						
第9回	Secrets of a successful homestay. Small group & pairwork conversation and discussion activities, self-directed research.						
第10回	Secrets of a successful homestay. Small group & pairwork conversation and discussion activities, self-directed research.						
第11回	Explaining your culture and lifestyle. Small group & pairwork conversation and discussion activities, self-directed research.						
第12回	Safety awareness and problem solving Small group & pairwork conversation and discussion activities, self-directed research.						
第13回	Classroom culture in New Zealand and Japan. Small group & pairwork conversation and discussion activities, self-directed research.						
第14回	Culture shock: causes and solutions. Small group & pairwork conversation and discussion activities, self-directed research.						
第15回	Review & Interview Individual progress reports: short presentation/oral report.						
必須文献、参考文献等							
必須文献:Materials will be provided by the teacher 参考文献:Materials will be provided by the teacher							
評価の方法							
Active learning outside the classroom (50%), Active learning in the class (50%)							
受講生へのメッセージ							
Students who take this course must be committed to joining the New Zealand Overseas Study Programme in Christchurch. Learn before you go – forewarned is forearmed!							

授業科目	総合看護学実習				担当	○新道 幸恵・村田 由香・渡邊 智恵・村田 美和・新沼 剛	
					研究室	学長室/研究室26/研究室28/研究室34/助教・助手研究室4	
開講年次	4	セメスター	2	時間数 (単位数)	90 (2)	必修/選択	必修
						開講最低(上限)人数	
授業の目的及びねらい							
<p>医療施設・地域等の看護サービスの場で、保健医療福祉チームにおけるケア実践に参加し、夜間を含むチームケアのありようを理解します。さらに、ヒューマン・ケアリングの視点から課題や強みを見出し、その根拠および解決策を考え明示することを目的としています。</p> <p>※ここでいう保健医療福祉チームとは、実習セクションの対象者集団に関わっている保健・医療・福祉職で構成されるチームを示します。</p>							
講義回数	主な授業内容					担当者	
	<p>指定された実習病院において、下記の実習目標を達成する。</p> <p>1) 保健医療福祉チームにおける看護活動の展開の実際に参加し、以下のことを理解できる。</p> <p>(1) 保健医療福祉チームにおいて看護活動を展開していくため、種々の看護チームの存在、体制、目標、役割、看護実践等の現状について体験を通して理解できる。</p> <p>(2) 利用者の夜間を含む療養生活や看護の実際を見学・体験し、チームケアのありようを理解できる。</p> <p>2) ヒューマン・ケアリングの視点から、着目した看護チームやケアの課題や強みを見出し、その根拠および解決策を考え明示する。</p> <p>(1) 日々の実習目標と計画を具体的に立て、自発的に実施できる。</p> <p>(2) ヒューマン・ケアリングの視点から、看護チームやケアの課題や強みを明確にし、考察することができる。</p> <p>(3) 文献や助言を活用して課題解決のための建設的な方法や対策を検討できる。</p> <p>3) 看護を学ぶ者として主体的に倫理的な行動をとることができる。</p> <p>(1) チームケアを通して、対象者の尊厳を重んじた責任ある行動をとる。</p> <p>(2) 主体的に誠実かつ謙虚に学ぶ。</p> <p>詳細については、実習要項を参照のこと</p>					新道・村田・渡邊・村田・新沼	
必須文献、参考文献等							
<p>必須文献:なし</p> <p>参考文献:実習前オリエンテーション時にリストを配布します。</p>							
評価の方法							
実習要項ご参照ください。							
受講生へのメッセージ							
<p>4年間の集大成としての実習です。</p> <p>実習の事前から準備性を高め、自律と自己責任の下、学び得たいことを学び、実践の場で探究し、自分たちの力で実りある実習に創りあげましょう。</p>							

授業科目	国際看護学演習(アメリカ)				担 当	○稲岡文昭 ・ 戸村道子	
					研究室	研究室19・研究室20	
開講年次	4	セメスター	7	時間数	60	必修/選択	選択
	編4		7 (編)		(単位数)		(2)
					開講最低(上限) 人数		10名程度
授業の目的及びねらい							
国際看護学演習は、「国際看護学」を履修していることが望ましい。米国の看護大学での講義、大学関連の保健医療施設、および米国赤十字社での演習・見学を通して、既存の看護概念・理論および看護現象と人々の健康問題について、異なった文化・風習・環境下で比較検討し、看護の本質を探究します。							
主な授業内容							
<ul style="list-style-type: none">・ H23年度演習はコロラド大学看護学部での実施予定。別途詳細は説明会を開催します 日程・プログラム内容、米国での講師等、訪問大学との毎年の調整により、多少変更します。 また旅程、演習料金等は、国際情勢と経済状況、為替レート、本学学生参加人数等の影響を受け変更を余儀なくされる場合があります。・ 参考として過去の演習訪問先大学一覧と、第7回・第8回の演習内容の概要を提示します。 第1回～第5回(2001年～2006年)：マサチューセッツ州セーラム州立大学 第6回(2007年)：ネバタ州立大学レノ校看護学部 第7回～第8回(2008年・2010年)：コロラド大学デンバー校看護学部・ 講義・演習・施設見学等には本学国際看護学担当教員が通訳・理解と討議を深めるためファシリテーターとなります。参加者学生20名以上の場合には教員3名が同行します。							
大まかな日程		コロラド大学看護学部演習プログラム(例)					
第1日目		関西空港→シアトル経由でコロラド州デンバー市へ					
第2日目		米国赤十字デンバー支社見学					
第3日目		米国赤十字デンバー支社・米国海洋大気庁、米国地質研究所					
第4日目		コロラド大学看護学部 オリエンテーション 米国の看護教育コロラド大学紹介 講義：看護管理・リーダーシップ論 施設見学：大学キャンパスツアー					
第5日目		講義：小児看護学（米国での小児保健） 看護教育・実践応用への研究 レセプション：コロラド大学教員・看護学生と学生同士の意見交換会					
第6日目		演習：模擬患者とシミュレーション演習 IT技術と看護/シミュレーターロボット 病院見学：Anschutzキャンパスコロラド大学病院 産科・小児病棟					
第7日目		講義：米国における老年看護と慢性疾患 米国の保健医療システム 病院見学：Anschutzキャンパスコロラド大学病院 急性期病棟・VIP病棟 臨床講義：看護部教育担当 マグネットホスピタル 病院見学： Prebysterian/St.Lukes病院 病院薬剤部・小児病棟 成人病棟					
第8日目		講義：地域看護学 ケアリング理論：科学と実践 病院見学： デンバー市こども病院 ＜交流会＞大学教員、病院施設看護師、および看護学生との交流会					
第9日目～第11日目		＜異文化体験＞ ロッキー山脈国立公園 ニューヨーク市：国連本部、コロンビア大学ティーチャーズカレッジ見学、911テロ跡地					
上記演習期間に週末をはさむことあり		米国→日付変更線→日本					
第13日目							
必須文献、参考文献等							
必須文献：適宜講義で配布します。							
参考文献：適宜講義で配布します。							
評価の方法							
演習参加度：60％ 課題レポート：40％							
受講生へのメッセージ							
何事にも好奇心旺盛で、チャレンジ精神のある皆さんの参加をお待ちしています。日本語でまず自身の考えや日頃の看護実践について明確に他者に伝え、多様な背景、価値観を持つ人たちと「ディスカッション」をして一緒に「理解を深めて」いくことを重視しています。							

授業科目		国際看護学演習(ジュネーブ)			担 当	○渡邊智恵・新沼剛																			
					研究室	研究室28/助教・助手研究室 4																			
開講年次	4	セメスター	7	時間数	60	必修/選択	選択																		
	編4		7 (編)	(単位数)	(2)	(※国際救援・開発協力看護師コースは必修)																			
						開講最低(上限) 人数	10～20人程度まで																		
授業の目的及びねらい																									
国際赤十字の活動拠点であるジュネーブにおける国際赤十字関連施設や国際機関を見学し、さまざまな国際救護組織並びに国際開発支援組織の役割や活動内容を理解し、国際活動における看護活動理念・方法について自己の考えを深めます。																									
主な授業内容																									
・2010年度から始まった国際救援コースに特化した演習です。この演習内容、日程等については交渉中で、別途詳細は説明会を開催します。 日程・演習内容・訪問先等は、調整によって変更する可能性があります。また、旅程や演習費用等も、国際情勢や経済状況、為替レート、学生の参加人数等によって変動する場合があります。 ・全日程において、本学国際看護学演習担当教員が、本演習の成果並びに安全と演習の効果的な実施のために同行・サポートします。 * 当該国の社会情勢等により、この演習を取りやめる場合もあります。																									
<演習場所> ジュネーブ(IFRC, ICRC, WHO, ICN, UNHCR, 国際赤十字博物館等)、イタリア(ソルフェリーノの丘等)																									
<日 程> 2011年8月～9月頃(9日間)																									
<対象学生> 3年次の「国際社会と保健活動」あるいは4年次の「国際看護学」を受講している学生(原則4年生対象)を約20名対象とします。																									
<事前課題>ジュネーブに出かける前に、各自の学習課題を明確にするために、訪問機関のことを事前学習します。																									
<table><tr><td>日程</td><td>演習プログラム(2010年度を提示)</td></tr><tr><td>1日目</td><td>広島→関西空港へ移動。 関西空港内ホテルにて前泊</td></tr><tr><td>2日目</td><td>関西空港→ジュネーブ空港着。(トランジット地はアムステルダム)</td></tr><tr><td>3日目</td><td>3日目から6日目まで下記の施設見学、講義受講、視察を行います。 IFRCの見学・説明 ICRCの見学・説明</td></tr><tr><td>4日目</td><td>WHO見学と講義 ICNの災害対策についての説明</td></tr><tr><td>5日目</td><td>UNHCR見学・説明 国際赤十字博物館</td></tr><tr><td>6日目</td><td>イタリアへ移動(バスで約7時間)</td></tr><tr><td>7日目</td><td>ソルフェリーノの丘、納骨堂、赤十字博物館などの視察</td></tr><tr><td>8日目</td><td>イタリア見学(異文化体験) ミラノ発→(機中泊)</td></tr></table>								日程	演習プログラム(2010年度を提示)	1日目	広島→関西空港へ移動。 関西空港内ホテルにて前泊	2日目	関西空港→ジュネーブ空港着。(トランジット地はアムステルダム)	3日目	3日目から6日目まで下記の施設見学、講義受講、視察を行います。 IFRCの見学・説明 ICRCの見学・説明	4日目	WHO見学と講義 ICNの災害対策についての説明	5日目	UNHCR見学・説明 国際赤十字博物館	6日目	イタリアへ移動(バスで約7時間)	7日目	ソルフェリーノの丘、納骨堂、赤十字博物館などの視察	8日目	イタリア見学(異文化体験) ミラノ発→(機中泊)
日程	演習プログラム(2010年度を提示)																								
1日目	広島→関西空港へ移動。 関西空港内ホテルにて前泊																								
2日目	関西空港→ジュネーブ空港着。(トランジット地はアムステルダム)																								
3日目	3日目から6日目まで下記の施設見学、講義受講、視察を行います。 IFRCの見学・説明 ICRCの見学・説明																								
4日目	WHO見学と講義 ICNの災害対策についての説明																								
5日目	UNHCR見学・説明 国際赤十字博物館																								
6日目	イタリアへ移動(バスで約7時間)																								
7日目	ソルフェリーノの丘、納骨堂、赤十字博物館などの視察																								
8日目	イタリア見学(異文化体験) ミラノ発→(機中泊)																								
必須文献、参考文献等																									
必須文献: 必要に応じて説明会にて配布します。 参考文献: 必要に応じて説明会にて配布します。																									
評価の方法																									
演習への参加度:30% 課題レポート:70%																									
受講生へのメッセージ																									
国際赤十字、国際救援活動に関心のある人は、是非参加してください。現地での健康管理はとても重要ですので、自分自身できちんと自分の健康・体調管理ができて、また安全行動がとれることを求めます。																									

授業科目		国際看護学演習(フィリピン)			担 当	渡邊智恵・村田美和	
					研究室	研究室28/研究室34	
開講年次	4	セメスター	7	時間数	60	必修/選択	選択
	編4		7 (編)		(2)		(※国際救援・開発協力看護師コースは必修)
						開講最低(上限) 人数	10～20人程度まで
授業の目的及びねらい							
3年次の「国際社会と保健活動」の授業内容を踏まえて、災害復興過程にある人の生活と健康状態を理解し、赤十字の活動や途上国への開発支援活動の実際を理解します。特に、現地赤十字社や関連する現地保健医療施設での見学・体験を通して、途上国における健康問題や看護支援(PHC)、日本とは異なる国(フィリピン)の文化や人々の生活への理解を深め、国際社会の中での看護活動および赤十字が担う役割について考えます。							
主な授業内容							
・2011年度の演習内容、日程等については交渉中。別途詳細は説明会を開催します。 日程・演習内容・訪問先等は、調整によって変更する可能性があります。また、旅程や演習費用等も、国際情勢や経済状況、為替レート、学生の参加人数等によって変動する場合があります。 ・全日程において、本学国際看護学演習担当教員および添乗員が、安全と演習の効果的な実施のために同行・サポートします。 ・2010年度の第2回フィリピン国際看護学演習の概要を提示します。2011年度の計画については、決定次第提示します。 2011年度は2月～3月に実施予定で交渉をします。 <演習場所> フィリピン(マニラ、キリノ州～ルソン島北部の農村エリア) <日程> 2010年9月2日～9月11日(10日間) <対象学生> 3年次に「国際社会と保健活動」を受講している学生 * 当該国の社会情勢等により、この演習を取りやめる場合もあります。							
日程		演習プログラム(2010年度の実際)					
1日目		広島→福岡空港へ移動。 福岡空港→マニラ空港着。 マニラ市内ホテルへ					
2日目		〔午前〕 マザーテレサセンターでのボランティア活動(死を待つ人の家) 〔午後〕 フィリピン赤十字本部にて活動概要の説明を受け、施設見学					
3日目		〔午前〕 スモーキーマウンテンでの自立支援活動の見学 〔午後〕 マザーテレサセンターでのボランティア活動(子どもの家)					
4日目		マニラ→キリノ州へ移動					
5日目		〔午前〕 フィリピン赤十字本部へ表敬訪問 〔午後〕 ケソン市の病院見学。 マニラ市内の看護大学の訪問、学生との交流					
6日目		〔午前〕 キリノ支部にてPHCプロジェクトの説明 〔午後〕 キリノ州内の市にあるRHU(Rural Health Unit)訪問、見学					
7日目		〔午前〕 同地域で赤十字職員・日赤派遣要員による健康教育への参加、見学 同地域での家庭訪問 〔午後〕 キリノ州立病院の見学、看護学生との交流、キリノ州知事の表敬訪問					
8日目		キリノ州→マニラへ移動					
9日目		マニラ市内で歴史研修、自由行動					
必須文献、参考文献等							
必須文献: 必要に応じて説明会にて配布します。 参考文献: 必要に応じて説明会にて配布します。							
評価の方法							
演習への参加度:30% 課題レポート:70%							
受講生へのメッセージ							
国際看護・災害看護・開発協力等に関心のある人の中で、積極的に学習や交流を深められる、学習意欲と好奇心の旺盛な皆さんの参加をお待ちしています。現地での健康管理はとて重要ですので、自分自身でちゃんと自分の健康・体調管理ができて、また安全行動がとれることを求めます。							

授業科目		国際看護学			担 当	○戸村道子・稲岡文昭	
					研究室	研究室20・研究室19	
開講年次	4	セメスター	7	時間数	30	必修/選択	選択
	編4		7 (編)		(単位数)		(2)
						開講最低(上限) 人数	1人
授業の目的及びねらい							
国際看護学は、4年次の学生を対象とし「国際社会と保健活動」を履修した学生が望ましい。国際看護学の目的は、国や文化を越え、グローバルな視点から看護の諸問題を捉え理解を深めるとともに、その問題解決のための初歩的な方策について学習します。							
講義回数	主な授業内容						担当者
第1回	コースオリエンテーション						戸村
第2回	国際看護学概論 国際看護の概念について理解する						戸村
第3回	異文化看護 レニンガー看護論 異文化看護の視点、レニンガー看護論と実践への応用について学ぶ						戸村
第4回	先進諸国（米国・イギリス・オーストラリアにおける看護）海外文献から 海外文献から先進国の看護の概要を理解する						戸村
第5回	宗教と文化の多様性と看護 宗教と文化の多様性とヘルスケアに関する議論について理解する						戸村
第6回	宗教と文化における葛藤 倫理的ジレンマと葛藤事例についてディスカッションを通して理解を深める						戸村
第7回	異文化理解とコミュニケーション 異文化の捉え方と接し方・適応のための能力について理解する						戸村
第8回	米国における医療制度の概要 日米の医療制度の概要と比較について理解する						稲岡
第9回	米国における看護教育制度 日米の看護師資格と教育制度の比較について理解する						戸村
第10回	米国における高度看護専門職の役割と実践 ナースプラクティショナー、クリニカルナーススペシャリスト、看護助産師、看護麻酔師						戸村
第11回	日本と米国における健康問題と看護① 学生プレゼンテーションと討議： 日米の健康問題・医療過誤・EBN・クリティカルパス						戸村
第12回	日本と米国における健康問題と看護② 学生プレゼンテーションと討議： マグネットホスピタル・緩和ケアと代替療法・在宅ケア						戸村・稲岡
第13回	日本と米国における健康問題と看護③ 学生プレゼンテーションと討議： 海外渡航者の健康・感染症と対策						戸村・稲岡
第14回	日本と米国における健康問題と看護④ 学生プレゼンテーションと討議： 臓器移植・保健政策						戸村
第15回	まとめ						戸村
必須文献、参考文献等							
必須文献： 講義で適宜配布します							
参考文献： 講義で配布します							
評価の方法							
授業の参加・ディスカッション貢献度：40％ グループプレゼンテーション：60％							
受講生へのメッセージ							
クラスでは、配布資料や文献をもとにディスカッションを中心に進めていきます。							

授業科目	看護英語				担 当	稲岡 光子	
					研究室	非常勤講師	
開講年次	4	セメスター	7	時間数 (単位数)	30 (1)	必修/選択	選択 (※国際救援・開発協力看護師コースは必修)
	編4 2		7 (編) 4			開講最低(上限) 人数	1人
授業の目的及びねらい							
1.看護関連の論文に興味をもてるようになること。 2.国際看護学演習参加者の準備の一助として、セーラム州立大学(またはコロラド大学)看護学部のシラバスを概観し、カリキュラム、教育内容を理解するための用語および救護・災害看護に必要な用語になじむこと。 3.看護が直面している課題をグローバルな視点で解決するため、将来看護研究論文に親しむための基礎を養うこと、等をねらいとします。							
講義回数	主な授業内容						
第1回	コースオリエンテーション これからの看護実践に不可欠な共通語としての英語の意義を考える						
第2回	先進国ナースの身近な看護実践についての短いエピソード、レポート等に親しむ Is There a Nurse On Board? by Linda Heitman 他						
第3回	ケアの視点から書かれたものを、状況のイメージを広げながら読み、看護論文になれる ① Touched by a Nurse — Special Moments That Transform Lives(Hope)から2～3例						
第4回	ケアの視点から書かれたものを、状況のイメージを広げながら読み、看護論文になれる ② Touched by a nurse— Special Moments That Transform Lives(Love)から2～3例						
第5回	認定看護師、専門看護師の役割、日々の看護実践、アドバイス等に触れ看護専門用語を増やす ① 101 Careers in Nursing からクラスで関心のある看護領域から1～2例						
第6回	認定看護師、専門看護師の役割、日々の看護実践、アドバイス等に触れ看護専門用語を増やす ② 101 Careers in Nursing からクラスで関心のある看護領域から1～3例						
第7回	セイラム州立大学(またはコロラド大学)看護学部のシラバスを概観する ① 看護専門領域別の用語に親しむ一成人、母性、小児、精神、地域看護等						
第8回	セイラム州立大学(またはコロラド大学)看護学部のシラバスを概観する ② 実際に行われた講義内容、病棟見学等の例から専門領域別の用語に慣れる						
第9回	視聴覚教材を通して広く看護の英語になれる 初期の看護理論家(ヘンダーソン、ロジャース、オレム他)の言葉に触れる						
第10回	看護関連領域の世界のトピックスを読解する ① 国際的看護・助産関連専門団体(WHO,ICN,ICM等)の機関誌から選択						
第11回	看護関連領域の世界のトピックスを読解する ② 国際的看護・助産関連専門団体(WHO,ICN,ICM等)の機関誌から選択						
第12回	救護、災害看護に必要な専門用語に慣れる ① 英語圏の看護専門雑誌等 から数例選択						
第13回	救護、災害看護に必要な専門用語に慣れる ② 災害看護実践体験を読み、共通語としての英語の意義を認識する						
第14回	救護、災害看護に必要な専門用語に慣れる ③ 災害時の看護にかかわった米国看護学部の体験を読む						
第15回	まとめ						
必須文献、参考文献等							
必須文献:随時、学生の進捗状況に沿って配布します 参考文献:必要に応じて提示します							
評価の方法							
授業への参加状況(60%)とレポート(40%)							
受講生へのメッセージ							
興味のもてるところからコツコツと忍耐強く学ぶこと。							

授業科目	災害看護学				担 当	○中信 利恵子・百田 武司 ・伊藤文子・松本由恵・鈴木香苗	
					研究室	研究室2/研究室4/助教・助手研究室 1	
開講年次	4 編4	セメスター	8 (編)	時間数 (単位 数)	30 (2)	必修/選択	必修
	編4(助)		8(編)			開講最低(上限) 人数	
授業の目的及びねらい							
国内外の災害の事例を踏まえ、災害の概念や災害時の健康障害、災害時に必要な看護を提供するための負傷者への応急的な対応システム及び被災者への継続的な支援活動を維持するためのシステムなどについて学びます。また、災害看護の実践に関して、赤十字の人道の理念に基づいた看護師の役割と援助方法を学習します。							
講義回数	主な授業内容					担当者	
第1回	コース・オリエンテーション 災害看護学概論 災害の定義と災害の分類, 災害のサイクル, 災害, 防災に関する諸制度					中信	
第2回	赤十字救護活動 赤十字の災害救護活動, 国際救援活動の実際(特別講義)					百田・中信	
第3回	災害各期における被災者の特徴と看護活動 急性期の看護					百田	
第4回	災害各期における被災者の特徴と看護活動 急性期の看護					百田	
第5回	災害各期における被災者の特徴と看護活動 亜急性期の看護					百田	
第6回	災害各期における被災者の特徴と看護活動 慢性期, 復旧・復興期の看護					中信	
第7回	災害各期における被災者の特徴と看護活動 災害時におけるこころのケア(被災者, ケア提供者)					中信	
第8回	災害看護活動の実際 災害救護訓練への参加・避難所疑似体験演習・国際医療活動疑似体験ツアー参加(学外演習)					百田・中信 伊藤・松本・鈴木	
第9回	災害看護活動の実際 災害救護訓練への参加・避難所疑似体験演習・国際医療活動疑似体験ツアー参加(学外演習)					百田・中信 伊藤・松本・鈴木	
第10回	災害看護活動の実際 トリアージ訓練					百田・中信 伊藤・松本・鈴木	
第11回	災害看護活動の実際 災害時の看護活動の実際(特別講義)					中信・百田	
第12回	災害への備えと災害看護研究					中信	
第13回	ヒロシマ原爆被爆時の看護活動					中信	
第14回	<国際救援コース以外の学生> 課題学習 災害時救援優先者の特徴と看護について				<国際救援コースの学生> S Pにシミュレーションでトリアージを実施 (OSCE)	百田・中信 伊藤・松本・鈴木	
第15回	課題学習 災害時救援優先者の特徴と看護について				S Pにシミュレーションでトリアージを実施 (OSCE)	百田・中信 伊藤・松本・鈴木	
必須文献、参考文献等							
必須文献:小原真理子, 酒井明子監修(2007). 災害看護. 東京, 南山堂. 参考文献:講義時に提示します							
評価の方法							
1) 定期試験受験資格:授業の2/3以上の出席を必要とします。 2) 評価方法:個人レポートを30%, 筆記試験を70%として評価します。 国際救援コースの学生は, トリアージ訓練でOSCEを行います。 OSCEの評価は次の視点です。 ①トリアージの区分が行える、②傷病者に対してヒューマンケアリングに基づいた態度で関わるができる							
受講生へのメッセージ							
災害は、いつ、どこで、どのような形で起こるかわかりません。近年は自然災害だけではなく、人類がつくり出す紛争やテロリズム、大規模な交通事故なども増加しています。それだけに、災害時の看護が看護職に求められています。今後、より多様になるであろう看護の役割について、共に探求していきましょう。 第14回,第15回は国際救援コースの学生と国際救援コース以外の学生では異なる授業内容となります。							

授業科目	卒業研究				担 当	専任教員（助教以上）	
					研究室		
開講年次	4 編4	セメスター	7・8 7・8（編）	時間数 （単位数）	60 （2）	必修/選択	必修
	編4（助）		7・8（編）			開講最低（上限）人数	
授業の目的及びねらい							
<p>卒業研究は、「研究方法」の単位を修得した4年次学生を対象とします。「研究方法」で学習した知識を基盤に、今までの授業や演習及び実習をとおして興味・関心を抱いた看護上の問題や看護現象について、自ら探究し、その結果をもとに独自の考えを導き出して、論文にまとめます。この過程をとおし、科学的・系統的探究方法及び研究論文の書き方を学習し、研究的態度を育成します。</p>							
講義回数	主な授業内容					担当者	
第1回	<p>学生は1年間指導教員より「研究」に関して一貫して指導を受け、指定された日時に「卒業研究レポート」として教務課に提出する。なお、学生及び指導教員が必要と判断したときは、指導教員をとおして、他の専任教員に依頼し、研究テーマに関連したアドバイスを受けることができる。</p>						
第2回							
第3回							
第4回							
第5回							
第6回							
第7回							
第8回							
第9回							
第10回							
第11回							
第12回							
第13回							
第14回							
第15回							
第16回							
第17回							
第18回							
第19回							
第20回							
第21回							
第22回							
第23回							
第24回							
第25回							
第26回							
第27回							
第28回							
第29回							
第30回							
<div>必須文献、参考文献等</div> <p>必須文献:適宜配布します。 参考文献:適宜配布します。</p>							
<div>評価の方法</div> <p>評価は、次の基準により指導教員によって行われる。①論文内容(研究課題の着眼点・意義、研究目的と方法の整合性、結果の適切性、考察の適切性、看護への示唆)、②論文の構成(論理的な構成、論文形式の充足性)③論文作成の過程(研究遂行に対する計画性、研究に対する意欲の継続性)</p>							
<div>受講生へのメッセージ</div>							

本事業担当者一覧（平成23年度）

班名		詳細	単位 (時間数)	担当者
プロジェクト代表者				新道幸恵学長
プロジェクトリーダー				植田喜久子
企画班 実施班	英語教育班	英語Listening&Speaking I-1 (異文化コミュニケーションⅠ)	1 (30)	Simon G.Capper・女鹿喜治・ (非常勤講師)Keith Hoy
		英語Listening&Speaking I-2 (異文化コミュニケーションⅡ)	1 (30)	Simon G.Capper・女鹿喜治・ (非常勤講師)Keith Hoy
		基礎ゼミⅠ (英語集中ゼミ)	1 (30)	Simon G.Capper
		基礎ゼミⅡ (語学研修)	1 (30)	Simon G.Capper・女鹿喜治・ (非常勤講師)是澤克哉
		英語Listening&Speaking Ⅱ (異文化コミュニケーションⅢ)	1 (30)	Simon G.Capper・女鹿喜治・ (非常勤講師)Keith Hoy・Eleanor Carson
		英語Listening&Speaking Ⅲ (異文化コミュニケーションⅣ)	1 (30)	Simon G.Capper・女鹿喜治・ (非常勤講師)Keith Hoy・Eleanor Carson
		英語Writing I-1	1 (30)	(非常勤講師)是澤克哉
		英語Writing I-2	1 (30)	(非常勤講師)是澤克哉
		看護英語 (国際救援活動英文購読)	1 (30)	稲岡光子
		英語学習アドバイザー		(非常勤講師)是澤克哉
	ヒューマン・ ケアリング特論班	ヒューマン・ケアリング特論 (ボランティア活動、特別講義)	1 (15)	矢野博史
	国際看護学班	国際看護学 (健康問題の日米比較)	2 (30)	戸村道子
		国際社会と保健活動 (国際医療保健活動)	2 (30)	渡邊智恵
		国際看護学演習 (フィリピン研修)	2 (60)	渡邊智恵・村田美和
		国際看護学演習 (アメリカ研修)	2 (60)	稲岡文昭・戸村道子・稲岡光子
		国際看護学演習 (ジュネーブ研修)	2 (60)	渡邊智恵・村田美和・新沼剛
		基礎保健ERU研修		村田美和・新沼剛
		卒業研究 (国際救援に関するテーマ)	2 (60)	渡邊智恵・新沼剛
	災害看護学班	災害看護学 (トリアージ訓練、避難所疑似体験演習、 国際医療活動疑似体験ツアーを含む)	2 (30)	中信利恵子・百田武司
	総合看護班	総合看護実習 (国際医療救援拠点病院実習)	2 (90)	渡邊智恵・村田美和・村田由香・新沼剛
広報班				森川千鶴子・笹本美佐・松原みゆき
評価班				飯村富子・矢野博史・眞崎直子・ 山村美枝・村田美和・奥村ゆかり・是澤あずさ

平成21～23年度大学教育・学生支援推進事業
大学支援推進プログラム

もっと世界とクロスする救援ナースの育成
最終報告書

発行日 平成24年3月

編集・発行

日本赤十字広島看護大学

事業推進代表者 新道幸恵

〒738-0052 広島県廿日市市阿品台東1-2

TEL（代表）0829-20-2800

FAX 0829-20-2801

HPアドレス <http://www.jrchcn.ac.jp>

印刷・製本

株式会社タカトープ rint メディア

〒733-0833 広島市中区千田町3丁目2-30

TEL（代表）082-244-1110